

多くの佛土中、特別に彌陀の淨土を選び求めたことを説示するのである。此は抑も何を意味するのであるかと云へば、一言にして云へば、彌陀如來の本國たる極樂淨土は、四十八願其物であるといふのである。説明して云へば極樂とは彌陀の根本精神たる四十八願の圓現したもの、四十八願の具體的表現であるといふのである。この四十八願の一々は皆な佛果に至り届かすにはおかぬといふ殊勝な因力を開發してゐるのである。この因力によりて殊勝な修行を起し、修行によりて證りの智果を感得し、智果によりて涅槃の理果を感得し涅槃の果報によりて嚴淨の極樂淨土を感得せられたのである。素より勝果、勝報、極樂といふ三の果報は決して時間的因果として感得せられたのではないが、只彌陀の報土の内容を表はさん爲めにかやうに記述したのである。

この證りの極果たる淨土を感得することから、所謂「大悲西化を隠して、驚いて火宅の門に入る」といふ如來の大悲攝化の活動が開始せられるのである。そして此利他大悲の攝化から、下三品の惡人の爲めに往生の道を開き給ふ彌陀の智慧門が開かれたのである。

この彌陀如來の慈悲智慧は、その儘釋尊と表はれて、不盡の大悲心、無窮智慧の二つが雙び行はれて、提婆、阿闍世の逆害、韋提求道を因縁として、甘露の法たる涅槃の眞因が

宣説せらるゝに至つたのである。是が爲めに彌陀如來の大法は、恰も水の大地に潛沈して自由に行き亘るやうに、普く一切衆生の乾き切つた無功德の心を潤はすことである。

更に淨土の三經のみならず、廣く一代諸經の上に眼を放つても、所謂「諸經讚する所、多く彌陀に在り」で、多くの經典に西方極樂の往生を勧め、十方諸佛を初め多くの聖者達も、心を齊うして一樣に西方を指し示して凡夫往生の大道を讃嘆してをられる。

是等の深い因縁がある爲めに、釋迦如來が秘密に韋提夫人をして、彌陀の淨土を選ばしめ給ふたのである。この「密」といふ所に無限の妙趣がある、韋提自らとしては自身で彌陀の淨土を選び求めたいと思つてをるのであるが、夫は如來眞實の智慧が感應して韋提別選の智慧となつたといふのである。

第四科 『定善義』の文

又云、西方寂靜無爲樂、畢竟逍遙離有無、大悲薰心遊法界、分身利物等無殊、歸去來魔障不可停、曠劫來流轉六道盡、皆逕到處無餘樂、唯聞愁嘆聲、畢此生平後、入彼涅槃城。

【讀方】 またいはく、西方寂靜無爲の樂は、畢竟逍遙して有無をばなれたり。大悲心に薰じて法界にあ

そぶ。分身利物ひとしくして殊なることなし。いざいなん冤郷にはとまるべからず。曠劫よりこのかた流轉して、六道ことごとくみなへたり。いたるところに餘の樂なし。たゞ愁嘆の聲をきく。この生平を畢へて後、かの涅槃の城にいらんと。

【字解】一。無爲樂。無爲は爲作造作を離れたること。凡夫の不自然な計ひを離れた極樂。

二。逍遙。差別を越えた悠々として遊なる形容。

三。有無。有は有見、萬物の常住なるを執する見解、無は無見、萬物の空無を執する見解。是等は單に法の一画だけを見たる偏頗の邪見である。従つてこの有無の二見は、あらゆる凡夫の迷妄の見解を指す。

四。生平。生涯の意。今生一生といふこと。

【文科】『定善義』により西方淨土の相を讚詠し給ふ。

【講義】又宣ふやう、西方極樂淨土は、寂靜にして爲作造作を離れた無爲自然の淨國である。そこは第一義諦微妙の境界であるから、際もなく邊もない、中道實相の月圓にして淺果敢な有(肯定)、無(否定)の偏見を離れてをる。この國に生る、衆生は、自と大慈悲心に薰じ附けられて、十方法界に遊び、一時に諸方に顯はれて、いろ／＼の身相を示し、衆生を利益すること皆一様である。夫であるから、いざいなん、娑婆世界、惡魔の栖家は長く停つてをる所ではない。吾等は久遠劫の昔から、六道をへめぐつて、何處でも生れない

處はないが、何處も樂みのある處はない、行く處として愁嘆の聲の聞えない所はないのである。願くばこの一生を畢つた後には、彼安樂淨土の涅槃の境界へ行きたいものである。

第四科 『法事讚』の文

又云、極樂無爲涅槃界、隨緣雜善、恐難生故、使下如來、選要法、教念彌陀、專復專、又云、從佛逍遙歸自然、自然即是彌陀國、無漏無生、還即眞行、來進止常隨佛、證得無爲法性身。

又云、彌陀妙果、號曰無上涅槃、已上抄出

【讀方】またはいはく、極樂は無爲涅槃界なり。隨緣の雜善おそらくは生じがたし。かるがゆへに如來、要法を選びてをしへて彌陀を念せしむること專にしてまた專ならしむ。またはいはく、佛にしたがひ逍遙して自然に歸す。自然はすなはちこれ彌陀國なり。無漏無生かへりてすなはち眞なり。行來進止につれに佛にしたがうて、無爲法性身を證得すと。

またはいはく彌陀の妙果をば號して無上涅槃といふ。抄出

【字解】一。無漏。煩惱のなきこと。清淨なること。上六七頁をみよ。

二。無生。再び迷ひの生を受けないこと。涅槃の義譯。

【文科】『法事讚』の文によりて無爲自然の他力の因果を示し給ふ。

【講義】 又宣ふやう、西方極樂淨土は凡夫の意志や努力を離れた無爲自然の世界である  
それであるから、其淨國に生れるには、其時々外界の刺撃等の外縁に随つて修めるやう  
な雜り氣のある善根功德をもつては、恐く往生することは出来ないものである。之が爲めに  
釋迦如來は、彌陀廻向の他力念佛の要法を選んで、其意義を説示し、専ら二心なく一向一  
心に彌陀如來を念じ奉れと、懇に教へて下されたのである。

又宣給ふやう、大悲の彌陀如來の仰せに隨ひ奉りて、計度の念を離れ、靈變として軸  
を出づる白雲のやうに、大自然界たる極樂淨土に歸向するであらう。この自然とは即ち極  
樂をいふのである。それは無爲自然の涅槃常樂の世界である。

誠に淨土は煩惱を離れた真無漏の國である。復と三界生死の生を受くることのない眞無  
生の國である。相似でない、部分の證でない、その儘純眞な證りである。行も歸るも、進  
むも止るも、一擧手一投足、常に如來大自來の力に隨うて少しも逆うことはない、自然  
に無爲法性身を證るのである。

又宣給ふやう、彌陀如來の不可思議の果報をば、この上ない大涅槃と號け奉るのであ  
る。

第三項 保興師の釋文

保興師云無量光佛非算數無邊光佛照故無礙光佛無有入法無對

光佛非諸菩薩及故光炎王佛光明自在更清淨光佛從無食善根而現故亦除

之心故歡喜光佛從無瞋善根而生故能智慧光佛從無癡善根而起復不

斷光佛佛之常照故難思光佛非諸二乘所堪說故無稱光佛亦非餘乘等超日月

光佛日應恒照不周變皆一耀之光故皆是蒙光觸身者身心柔軟願之所致也已上抄出

【讀方】 保興師のいはく無量光佛(算數にあらざるがゆへに)無邊光佛(縁としてらざることなきがゆへに)無礙光佛(諸菩薩のおよぶところにあらずるがゆへに)光炎王佛(光明自在にしてさらにうへにするものなきがゆへに)清淨光佛(無食の善根よりして現するがゆへに)また衆生の貪濁の心をぞく貪濁の心なきがゆへに清淨といふ)歡喜光佛(無瞋の善根よりして生ずるがゆへに)衆生の瞋盛心を除くがゆへに)智慧光佛(無癡の善根心よりおこる)また衆生の無明品心をぞくがゆへに)不斷光佛(佛の常光つねに照益をなすがゆへに)難思光佛(もろゝの二乗測度するところにあらずるがゆへに)無稱光佛(また餘乘等)とくにたふるところにあらずるがゆへに)超日月光佛(日はつれにてらすことあまれからざるべし)涅槃一耀のひかりなるがゆへに)みなこれ光觸を身

にかうふる者は、身心柔順の願のいたすところなり。已上抄出

【字解】一。憬興 新羅熊川に生る。十八歳出家して三藏を究め、神文王元年(西暦六八一年)國考にあげらる。寂年不詳。『大涅槃經疏』十四卷、『法華經疏』十六卷、『瑜伽記』三十六卷、『無量壽經』連敘述文讀』三卷等述作甚だ多し。

【文科】『述文讀』によりて十二光を讚嘆し給ふ。

【講義】憬興師は其著『述文讀』中卷に『大經』の十二光を解釋して云はれたるは、無量光佛——彌陀の光明を數量的の方面から表はしたので、それが相對有限界に於ける數學的智識を超えてゐることを示すのである。無邊光佛——縁ある機類ならば何處にありても照さぬことはないから。無礙光佛——彌陀の光明は無礙の大道であつて、煩惱、惡業(人)も、其他の一切萬法(法)も礙けることはできないから。無對光佛——その功用に於いて、其徳相に於いて、諸菩薩の光明の及ぶ所でないから。光炎王佛——自在に照す光明の威徳の熾んなること、王者に比べて此名あり。清淨光佛——彌陀の光明は、欲貪を離れた善根から現はれてゐる。そしてその功用として衆生の濁れと貪愛の心を除く。かやうに穢い貪欲心がないから清淨と名けられたのである。歡喜光佛——彌陀の光明は

曠志を離れた善根から現はれてゐる。故にその光明の威徳として衆生の盛んなる曠志の煩惱を除く。そこに歡喜の念が溢れて居る。それが即ち歡喜光である。智慧光佛——愚痴の煩惱を離れた心から現はれた光明であるから、よく衆生の愚痴無明の品類に屬する心を除く故に此名あり。不斷光佛——彌陀の光明は常に長へに一切衆生を照して利益を與へ給ふ故に。難思光佛——諸の聲聞、緣覺等の二乗の聖者達の測度り知ることの出來ない智慧、徳相を備へ給ふ方であるから。無稱光佛——彌陀の教へ以外の教(餘業)などの能く説示することの出來ない佛でゐらせられるから。即ち説くことが出來ないといふのは、知ることが出來ないといふことである。取りつめて云へば、言説の能く及ぶ所でないと同じ時に心で思ひ稱することの出來ないこと。超日月光佛——太陽は世を照せどもこの娑婆の外部丈の一方面しか照し得ない。然るに彌陀の光明は深く一切諸法の根柢に潛り入つて、その功用を示し給ふ故に。

是等の光觸に逢ひ奉る者は、皆夫々利益を戴くことが出来るのであるが、夫は源を尋ねれば、四十八願中の身心柔順の願の致す所である。

【餘義】一。今茲に憬興師の『述文讀』を引用し給ふは、當時の諸師がみな、彌陀如來

及び淨土を應身應土と判するに反し、憬興師はひとり報身報土と定められ、この十二光の釋も、この儘、報眞佛の相であるから、茲に諸師の中から特に憬興師を引き出して引用し給うたのである。我が聖人の『述文讚』を常に愛好なされたことは、『教卷』五德現瑞の下『行卷』會本三丁以下十文、『化身土卷』會本八丁八及び當處にこのやうに引用なされたことと知ることが出来る。

### 第五節 結釋

【大意】 上來廣く眞佛土の證文として經論釋を引かれしにより、こゝに例によりて結釋を施し給ふ。第一項眞實報土を結成し、第二項に得證の意義を對辯し、進んで第三項眞偽分別をなし眞佛、眞土、往生を説き、更に假の佛土を示して次の化身土卷を起す。結を開き給ふ。終りに第四項に於いて結釋し勸信し給ふ。

### 第一項 眞實報土の結釋

爾者如來眞說宗師釋義明知顯安養淨刹眞報土

【讀方】 しかれば如來の眞說、宗師の釋義あきらかに知んぬ。安養淨刹は眞の報土なることをあらはす。

【文科】 眞實報土の結釋

【講義】 上に引用した釋迦如來の眞說たる經典に依りて見ても、又天親、曇鸞、善導等諸師の解釋に照らして考へて見ても、安養極樂國は明に眞實報土であることが知られて来る。

眞實報土の結釋

【餘義】 一。我が聖人は、上來、佛經と論釋とを引用して、眞佛眞土の義を證成し、茲に愈々私釋に入り、先づ彌陀の淨土の眞實報土なることを結び止め給ふのである。聖人の信仰は、「悟は彼岸」である。謙抑と恭讓との中に一味の法樂を得給うた聖人は、その力の威得を他力と表現なされた。而してこの他力の妙用の全現するは、彼岸である。彼岸は報土である。報土に入つて、一切有情は初めて眞の開覺を得るのである。この開覺の境地は彌陀如來の涅槃境であつて、同時に十方同生者の涅槃境である。『唯信鈔文意』十七丁に涅槃とは滅度といふ。無爲といふ。安樂といふ。常樂といふ。實相といふ。法身といふ。法性といふ。眞如といふ。一如といふ。佛性といふ。佛性すなはち如來なり。とあり。この涅槃境は未だ種々にいひ顯はすことが出来るのである。

「涅槃は佛性といふ、佛性すなはち如来なり」。我が親鸞聖人の佛性觀はこれに盡きてゐるといへる。聖人が『涅槃經』の文を御覽なされたのもこの見方である。佛性といへばとて、決して聖道門にいふが如き自性住佛性とか正因佛性とかいふものではない。他力廻向と御與へ下された信心の、彼岸に到つて果實を結んだ相である。先きに長々と引用せられた『涅槃經』の文、及びこの私釋中の『涅槃經』の用語を見る上に、この注意を忘れてはならぬ。猶、佛性のことについては第二卷三三四頁を参照せられたい。

### 第三項 得證辨

#### 第一科 正明

惑染衆生於此不能見性所覆煩惱故經言我説十住菩薩少分見佛性故知到安樂佛國即顯佛性由本願力廻向故亦經言衆生未來具足莊嚴清淨之身而得見佛性上

【讀方】 惑染の衆生、こゝにして性をみるゝことあたはず。煩惱に覆るゝがゆへに。經にわれ十住の菩薩、少分佛性をみると説くとのたまへり。かるがゆへに知んぬ。安樂佛國にいたれば、即かならず佛性をあらはす。本願力の廻向によるがゆへに。また經には衆生未來に清淨の身を具足し莊嚴して、佛性を見ることを得とのたまへり。

【文科】 正しく得證の意義を示し給ふ。

【講義】 吾等のやうな疑惑の雲に鎖され、濁惡の煩惱に穢されてをるものは、此娑婆世界に於いては、眞實に佛性を見ることが出来ない。それは一言にして云へば煩惱が覆はれてゐるからである。

上に引いた『涅槃經』には、「我（釋尊御自身を指す）十住位の菩薩は、小分の佛性を見ると説いた」と云うてある。それは修行によりてあれ丈の位に昇つた菩薩でさへ少分の佛性丈しか見ることが出来ないのであるから、況んや凡夫の淺い智慧では、到底此世界では佛性を見ることが及びもつかないと云ふことを示してをるのである。夫であるから安樂佛國に往生するならば、その往生の一念同時に佛性を顯開して證りを開くのである。これは自分の小さい力ではない。如来の本願力の廻向の然らしむる所である。だから上に引用した『涅槃經』には、「衆生は今佛性を開發してをらないけれども、來世には無垢清淨に莊嚴したる法身を具足へて、佛性を見ることが出来る」と説いてあるのである。

第二科 『起信論』の文

起信論曰、若知雖說無有能說、可說雖念亦無能念、可念名爲隨順、若離於念、名爲得入。

得入者、眞如三昧也。況乎無念之位、在於妙覺。蓋以了心、初生之相也。而言、知初相者、所謂無念、非菩薩十地所知。而今之人、尙未階三十信、即不依馬鳴大士、從說入無說、從念入於無念。

【讀方】起信論にいはく、若説くといへども、能説の説くべきあることなく、また能念の念すべきもなしと知るをなづけて、隨順とす。もし念を離るゝをなづけて得入とす。

得入といふは眞如三昧なり。いかにいへんや、無念の位は妙覺にあり。蓋して了心は初生の相なり。しかも初相を知るといふは、いはゆる無念の菩薩十地の知る所にあらず。而るに今の人なを未十信にかなはず。すなはち馬鳴大士の説より無説にいり。念より無念に在るとのたまふに依らざらんや。抄。

【字解】『起信論』梵語 (Mahāyāna-Sādhoḥpāda-Sūtra) 『大乘起信論』といふ。馬鳴菩薩造、眞諦譯。一巻。實又難陀譯二巻。『起信論』は略稱である。一心(衆生心)の上に、眞如門と生滅門の二面を開き、眞如門には心の本體的方面たる眞如を説き、生滅門には心の現象的方面たる眞如縁起を述べ、一心の義理を辯別して、體大、相大、用大の三大を説く。次に實踐的方面に及び、眞如と三寶を信する四信と、布施、持戒、忍辱、精進、止觀の五行を實修することを教ゆ。之を一心、二門、三大、四信、五行といふ。

二。馬鳴 梵語アシュワゴーシヤ (Aśvaghoṣa) 紀元一世紀に西印度に生る。博識、智辯、詩才、一世を覆ふ。北印度に行きて迦濕彌羅の國主、迦膩色迦王の保護を受け、大乘佛教を宣揚す。『大乘起信論』『大莊嚴論』『佛所行讚』等の著みな有名である。曾つて『賴吒悉羅』の戯曲を作りて、自ら樂人とともに之を華氏城中に歌ひ、五百の王子を出家せしめ遂に戯曲の禁止を見るに至つたといふ。

【文科】得證を證する爲めに『起信論』の文を引用し給ふ。

【講義】『起信論』に曰く、眞如といふものは言を離れ、考へを超越してゐるものであるから、之はいかに説いても説き得るといふことはないこと、又此眞如は説くことが出来なればかりでない、念ひ知るといふことも決して出来ないと知るのを隨順と名ける。即ち隨順とは眞如を觀する方便觀である。かやうに眞如といふものは、能説、所説、能念、所念といふやうな對立關係の形式を離れてゐるといふことを知るのが、眞如觀の第一歩である。されど、今まで來ても、尙ほある主觀(念)を離れることは出来悪い。若し一步進んで其念慮を一切打ち棄てる時に正しく眞如を觀することが出来る。夫を得入と名ける。即ち眞如に入ること、眞如と渾融した所である。夫が正觀である。

上の『起信』の文を飛錫禪師は、其著『念佛三昧寶王論』に釋して曰く、得入といふは眞如三昧のことである。それは眞如に證入し得たことをいふ。即ちこの得入とは念を離れた所というてあるが、其言説の根本たる念慮を離れるといふのは、所念の境を絶し、能念の心を棄てることで、その無念の位といふものは妙覺果滿を指すのである。それが即ち眞如三昧である。

更に他の方面よりこの眞如に證入する模様を観察すれば、了心といふことである。この了心とは、心が初めて生じた相、即ち無始無明の初起をいふので、三細の中の第一の業相である。忽然として業無名の起つたその一念の相を突き止めることである。この心初起の相を知るのは、麤雜な能働的な念慮を離れた無念の智慧でなければならぬ。これは十地の菩薩などの知ることの出来ない天地である。修道の位滿ちて方便の行滿足し、最後の一念相應する所にて證に入るので、佛果を得る時の刹那の心である。然るに今の一般の人達は未だ十信の位にも相應してはをらぬ。即ち馬鳴大士の云はれたやうに、有説の法門を信することから、遂に無説の眞如界に入り、有念の教説によりて、無念無相の極樂無爲涅槃界を證することに從ふといふことが一番適切な教へではあるまいか。

【餘義】一。茲に『起信論』に曰くとしてあるが、實は『起信論』の文そのまゝではなくて、飛錫の『念佛三昧寶王論』中に有念の念佛から無念の念佛に入らねばならぬといふ下に證文として引用せられた『起信論』の文を『寶王論』の文に連ねて引用されたものである。それで、「若知難説」から「名爲得入」までは『起信論』の文であるが、「得入者」以下は『寶王論』の文である。

然らば、何故『寶王論』に曰くとせないで、『起信論』の名を出されたかといふに、『寶王論』の釋は『起信論』の正意を得、全體を『起信論』の文というても差支ないから、「得入者」以下の釋文は『起信論』の文に連ね、「起信論」の名を出されたのである。『寶王論』の文は、『行卷』會本三十四にも引用してあるけれども、『起信論』は、大乘通申論と稱し、幾多の論釋の中にも殊に有名なる書であり、また淨土傍依の書であるから殊にその名を揚げられたものであらう。

それであるから、この文は、先づ初めに、『起信論』の意で解し、次に『寶王論』に引用せられた意味を知り、更に進んで我が聖人御引用の御覺召を伺はねばならぬ。『起信論』にありては、この文は、離言眞如を解釋する中に、妨難を通釋する文である。



『起信論義記』中本をみると能くそのことが知れる。

眞如と言へば、亦相あることなし。謂く言説の極、言に因つて言を遣る。この眞如の體遣る可き無し。一切の法悉く眞なるを以ての故に。亦立すべき無し。一切の法皆同じく如なるを以ての故に。當に知るべし。一切の法説く可からず、念すべからず、故に名けて眞如と爲す、問うて曰く。若し是の如き義ならば、諸の衆生等、云何んが隨順して得入せん。

答へて曰く、若し一切の法、説くと雖も、能説可説あることなし。念すと雖も亦能念可念あることなしと知らば是れを隨順と名づく、若し念を離るれば名づけて得入と爲す眞如は言説を離れ、説く可からず、念す可からざるものである。もし不可説不可念のものならば、どうして、眞如に隨順し、證入することが出来やうかといふ問ひである。

これに對する答は、眞如は勿論不可説不可念のものであるが、これに證入するには順序がある。説いても能説所説なく、念しても能念所念ないと知了する境地、この境地は絶對に念を離るゝことが出来なから、これを隨順(方便)と名づける。この方便の境地を過ぎて一步を進むれば、絶對に念を離れることが出来る。これを得入(正觀)と名づけるので

ある。この有念無念の順序で、眞如に證入することが出来るといふのが『起信論』の文の意である。この無念の境といふは下に出づる心の初相を知る位である。

二。飛錫師は事理雙修の念佛といふことを唱へ、口稱の事相の念佛即ち有念の念佛から進んで無念の理の念佛に入らねばならぬといふことを云はれる人である。それで、茲に有念の念佛から無念の念佛に進む證文として『起信論』を引用し、ついでその文を解釋せられたのである。隨順は有念の念佛である、得入は無念の念佛である。得入の念佛の境に至るは眞の目的であるが、この無念の境地は所謂心の初生之相を了する位で、妙覺位に至らねば得ることの出来るものではない。十地の菩薩でも至り得ない境地である。されば、この無念の念佛に至るは眞の目的であるけれども、今日の我等は馬鳴大士にならひ、説より無説へ、有念より無念に至るやうにせねばならぬといふ意味である。

心の初生之相を了すといふは『起信論』の思想を知らねばわからぬことであるが、『起信論』は誰も知る如く、根柢的實在を一心眞如となし、これから萬法が緣起して來るといふのである。この緣起の具合はどうかといふに、波のない處に忽然として浪が起るやうに、一心眞如の上に忽然として念起り(業相)これを無明と名づける。この無明が、一心眞如に

影響して、次第に主觀(轉相)客觀(現相)の兩境界を作り出すといふのである。これを三細といふのである。この三細から六塵が現はれる。これを流轉門といひ、諸法緣起の相と稱するのである。それであるから『起信論』の教理からいへば、迷妄は源還すれば、一念の念である。この一念の念のなくなつたところが大悟境である。而してこの一念の念は風なきに風を起し浪なきに浪を起す實體なき妄念であるから、この妄念を突きつむれば、念はなくなる。無い念が顯はれた處が心の初生の相である。心の初生の相を知れば心の初相の實體なきことが知れ、細微の念をも遠離して明朗の心性を見ることが出来るといふのである。以上が『起信論』及び『寶王論』の文意である。

三。我が聖人は、この文全體を隨宜轉用して、有念を此土の願生に當て、無念を報土の證果に當て給うたものである。佛性の開覺はこの土に於てなしうるものではない。他力本願の廻向に依つて、この土に於て、願生の信心を與へしめ給ひ、淨土に於て眞證を開覺せしめ給ふといふ意味に用ゐなされたのである。

### 第三項 眞假分判

#### 第一科 報土の總釋

夫按報者由如來願海酬報果成土故曰報也

【讀方】 それ報を按ずれば、如來の願海によりて果成の土を酬報せり。かるがゆへに報といふ。

【文科】 眞實報土を總釋し給ふ一段。

【講義】 今熟「報」といふ意義を考へて見るに、之は如來の因位誓願力によりて恰も蒔いた種が芽を吹いて遂に實を結ぶやうに、果の淨土が必然的に酬報い表はれたことを報といふのである。

#### 第二科 報土の別釋

然就願海有眞有假是以復就佛土有眞有假由選擇本願之正

因成成就眞佛土

言眞佛者大經言無邊光佛無礙光佛又言諸佛中之王也光明

中之極尊也上論曰歸命盡十方無礙光如來也

言眞土者大經言無量光明土或言諸智土上論曰究竟如虛空

廣大無邊際也

第三章 眞佛土

言往生者大經言皆受自然虛無之身無極之體上論曰如來淨華衆正覺華化生又云同一念佛無別道故上又云難思議往生是也

【讀方】しかるに願海について真あり假あり。こゝを以てまた佛土について真あり假あり。選擇本願の正因によりて眞佛土を成就せり。眞佛といふは大經には無邊光佛無礙光佛とのたまへり。また諸佛のなかの王なり。光明のなかの極尊なりとのたまへり。上論には歸命盡十方無礙光如來といへり。

眞土といふは、大經には無量光明土とのたまへり。あるひは諸智土とのたまへり。上論には究竟如虛空、廣大無邊際といふ。

往生といふは、大經には皆受自然虛無之身無極之體とのたまへり。上論には如來淨華衆、正覺華化生といへり。また同一念佛無別道故といへり。上また難思議往生といふこれなり。

【文科】眞實報土を別釋して眞佛、眞土、往生を示し給ふ一段である。

【講義】然るに此果報土の原因たる如來の本願の中に眞實と權化方便の二つがある。是によりて其果報の淨土に眞實と方便があるのである。即ち選擇本願中の第十二壽命無量願、第十三光明無量願の正因によりて、彌陀の眞佛眞土が成就つたのである。即ち眞佛とは『大無量壽經』には無邊光佛、無礙光佛と説いてあり、又十方諸佛中の王である。あ

らゆる光明といふ光明中の尤も尊い主體であるとも説かれてある。已上

又天親菩薩の『淨土論』には、歸命盡十方無礙光如來と稱へ奉つてある。是が即ち眞宗の本尊にてゐらせらるゝ。因果の大法に隨つて、功德の主となり、力といふ力の統率者となり、大慈悲と大智慧をもて、十方世界に遍滿して、救済の大能を垂れ給ふ無礙の極尊にてましますのである。

又彌陀如來の眞土といふは『大經』には限りなき智慧光の照耀する極土、即ち無量光明土と説き、或は又あらゆる大智慧を集めたといふ意味にて諸智土と説いてある已上。『淨土論』には彌陀の淨土は、全法界を窮め盡して無障礙こと虚空の如く、其廣さは悠遠にして邊際がないと稱讃してある。

往生といふことに就いては、『大經』には、淨土に生るゝ人は、誰れも一樣に業報因果の束縛を離れた無爲自然にして、虚空の如く滯りなき身、一切に遍滿する無限絶對の身を得ると説いてある。已上

『淨土論』には、淨土に生れる人々は、皆彌陀如來の正覺の華より化生する、夫故に如來の淨華衆と名けらるゝのである。即ち如來の證悟そのものから生れるのを、華をもつて象

徴して華化生といひ、淨華衆と名けたのである。

更に又この極樂に於ける平等の化生に對する同一の因を述べて、『同論』には、極樂に生るる者は、信念佛の一因であつて、之より外には道がないから、極樂も同一化生であるといふのである。

又『法事讚』には、極樂の往生は、實に吾等の思議ることの出来ない絶妙不可思議であるといふので、難思議往生といふのである。

第三科 假土を示す

假之佛土者在下應知既以真假皆是酬報大悲願海故知報佛土也良假佛土業因千差土復應千差是名方便化身土由不知真假迷失如來廣大恩德

【讀方】 假の佛土といふは、下にありて知るべし。既にもて眞假みなこれ大悲の願海に酬報せり。かるがゆへに知んぬ、報佛土なりといふことな。まことに假の佛土の業因千差なれば、土また千差なるべし。これを方便化身土となづく。眞假を知らざるによりて如來廣大の恩徳を迷失す。

【文科】 假佛土を示して眞佛土を明了ならしめ更に化巻を起し給ふ。

【講義】 假之佛土、即ち方便化身土に就いては、下の『化身土卷』に委しく説示してあるから、そこで知つて頂きたい、

かやうに眞實、權假の二つに類れてゐるけれども、共に彌陀如來の大悲の誓願たる第八願、又方便の願たる第十九、第廿の本願に酬報表はれたものである。かやうに酬報の土であるから、眞土も化土も皆な報身の土にして、化土は即ち報中の化土と呼ばれるものである。良に此假の佛土は眞土の一因一果と異り、化土に生るゝ機類は自力が加はるのであるから、其修むる業因に千差萬別の相違がある。因がかくの如く差別してゐるから、果も亦千差萬別である。之を方便化身土と名けるのである。是等の眞實と方便の深い旨趣を知らない爲めに、迷妄に覆はれて、如來の廣大なる恩徳を失うて仕舞ふのである。

【餘義】 一。この私釋は正しく『眞卷』の結文であつて、前を結んで、眞佛眞土の體を出し、眞假分別をして下の『化身土卷』を引き起し給ふものである。而してこの結文に就いて注意すべきことが一つある。

一には、眞假分別は我が聖人已證の法門であつて、淨土眞宗開闢の祖意は、この眞假を分判して、如來廣大の恩徳を知らしめるためであること。

二には、茲に化佛化土といふは、普通にいふ三身門の化佛化土とは異なり、報中に真化を分つたもので、三身門でいへば、同じく大悲の願行に酬報した報身報土であるといふことである。

第四項 結釋勸信

因茲今顯真佛真土斯乃真宗之正意也經家論家之正說淨土宗師之解義仰可敬信特可奉持也可知

【讀方】これによりていま真佛真土をあらはす。これ乃ち真宗の正意なり。經家論家の正說淨土宗師の解義、あほいで敬信すべし。ことに奉持すべきなり。しるべし。

【文科】正しく本巻を結びて信を勧め給ふ。

【講義】是等の深い譯合があるによりて、今茲に真佛真土の因果を顯開したことである。この如來廻向の一因によりて一果の往生を得るといふのが、真宗の正意とする所である。釋尊（經家）及び龍樹、天親の二菩薩（論家）の眞實なる說示、曇鸞、善導等の淨土教の宗師達の懇篤なる解釋に對し、仰いで敬ひ信じ、特に心を一つにして謹んで其眞意を持たねばならぬことであります。

ねばならぬことあります。

今や振り返つて、自分の環周を見給ふべき時は来た。その淳なる思想信仰を一切の上に蒙むらしめ給ふべき時は来た。換言すれば、その思想信仰を以て、當時の時代思想を解剖し批判して、それ／＼の正當なる位置を與へ給ふべき時は来たのである。『化身土卷』一卷は正しくその晴の舞臺である。

『化身土卷』一卷は、聖人の思想信仰の力を試めすべき舞臺である。聖人の思想の一刀が振るゝものを切り断ちうる名刀であるか否かの明かになる舞臺である。換言すれば、『化身土卷』一卷は當時のあらゆる。時代思想の縮圖であり、聖人の解剖刀の利鈍を示した手術室である。この意味に於て、『化身土卷』一卷は聖人にとつて非常に重大なる意味を有し、『教行信證』六軸の中に於て重要な位置を占むるのである。

聖人の思想は、自然法爾の力を擲む思想である。淡い狭い自我のはからひなき任運法爾の生命の力を得る思想である。これを表現して佛力といひ、他力といふ。他力といふは局限せられた待對の力ではない。少なくとも自力といふ對手持つやうな力ではない。それ自ら絶對的な不變の力である。この法爾の力を知らないものを貶して自力執心の徒と名ける。この自力は他力に對する價値ある力ではない。局限せられた力を執するものを貶する名

稱である。

翻つて當時の思想界を見るに悉くこれ自力執心の徒である。圓かに法爾自然の力を感得してゐるものがない。みな自性唯心に沈み、定散二心に迷ひ、眞假の門戸を知らず、邪正の道路を辨へずして彷徨してゐる輩ばかりである。これみな型にこだはつて、その中に湧き返る生命を忘れてゐるからである。

かくして、我が聖人は、自己の思想の最高峯に立つて、時代を見下し、茲にその當時に流行する思潮を遺憾なく解剖し批判して、眞なるものは甚だ尠なく、偽なるものは頗る多きを見給うた。然も驚くべきことには、大悲は、この眞偽を一括して、願海の中に置き給ふのである。大悲方便の手は飽くまで低く廣く垂れて、定散の諸善と、自力の執心とをその因願に攝取して、一機をも洩さじと誓はせられた。而してこの因願は廣く『觀經』彌陀經に開説せられ、因願既にこの方便引接の御手あるが故に、證果も亦如來の方に於て約束せられてある。解剖刀を取つて、時代の思潮に對せられた我が聖人は、茲にあらゆるものゝ上に蒙むらせ給ふ法爾の力、大悲の働きに驚嘆して、一は自身の取らせ給ふ解剖刀の利きを示して眞假を明かにし、一は大悲の思召を開いて時代を覺醒せしめ給うたのであ

# 序 講

## 第一章 化身土卷の來由

時代の思想  
の批判

一。劇しい苦闘と、長い努力に依つて、遂に到るべきところへ到りついた人は、必ず翻つて、自分の環周一切を見直して、これが解剖と批判とをなすものである。つまりこれは、その到達點たる思想若くは信仰を一切の上に行き亘らせるのである。時代思想の正當な解剖と批判が出來ず、その時代思想の上に批判者たる權威を有せない思想信仰ならば、それは力ないものである。死せるものである。時代の劣敗者が遁げ込む避難所たるに過ぎないものである。到底後世の人々を支配する思想信仰たることが出來ないものである。

我が親鸞聖人は、劇しい苦闘と長い努力に依つて、到り着くべき所へ到り着いた人である。その信仰は圓融無礙自在の一道である。その思想は淳乎として淳なる彩想である。聖人はその思想信仰を直説法に依つて、『教行信證』前五卷に吐露し給うた。宇宙の一原を掴んだ微妙なる聖人の思想信仰は光彩の陸離たる明玉の様に高く掲げられた。而も、聖人は、

今や振り返つて、自分の環周を見給ふべき時は来た。その淳なる思想信仰を一切の上に蒙  
むらしめ給ふべき時は来た。換言すれば、その思想信仰を以て、當時の時代思想を解剖し  
批判して、それ／＼の正當なる位置を與へ給ふべき時は来たのである。『化身土卷』一卷は  
正しくその晴の舞臺である。

『化身土卷』一卷は、聖人の思想信仰の力を試めすべき舞臺である。聖人の思想の一刀が  
振るゝものを切り断ちうる名刀であるか否かの明かになる舞臺である。換言すれば、『化身  
土卷』一卷は當時のあらゆる。時代思想の縮圖であり、聖人の解剖刀の利鈍を示した手術  
室である。この意味に於て、『化身土卷』一卷は聖人にとつて非常に重大なる意味を有し、  
『教行信證』六軸の中に於て重要な位置を占むるのである。

聖人の思想は、自然法爾の力を擱む思想である。淡い狭い自我のはからひなき任運法爾  
の生命の力を得る思想である。これを表現して佛力といひ、他力といふ。他力といふは局  
限せられた待對の力ではない。少なくとも自力といふ對手持つやうな力ではない。それ  
自ら絶對的な不變の力である。この法爾の力を知らないものを貶して自力執心の徒と名け  
る。この自力は他力に對する價値ある力ではない。局限せられた力を執するものを貶する名

稱である。

翻つて當時の思想界を見るに悉くこれ自力執心の徒である。圓かに法爾自然の力を感得  
してゐるものがない。みな自性唯心に沈み、定散二心に迷ひ、眞假の門戸を知らず、邪正  
の道路を辨へずして彷徨してゐる輩ばかりである。これみな型にこたはつて、その中に湧  
き返る生命を忘れてゐるからである。

かくして、我が聖人は、自己の思想の最高峯に立つて、時代を見下し、茲にその當時に  
流行する思潮を遺憾なく解剖し批判して、眞なるものは甚だ尠なく、偽なるものは頗る多  
きを見給うた。然も驚くべきことには、大悲は、この眞偽を一括して、願海の中に置き  
給ふのである。大悲方便の手は飽くまで低く廣く垂れて、定散の諸善と、自力の執心とを  
その因願に攝取して、一機をも洩さじと誓はせられた。而してこの因願は廣く『觀經』彌  
陀經』に開説せられ、因願既にこの方便引接の御手あるが故に、證果も亦如來の方に於て  
約束せられてある。解剖刀を取つて、時代の思潮に對せられた我が聖人は、茲にあらゆる  
ものゝ上に蒙むらせ給ふ法爾の力、大悲の働きに驚嘆して、一は自身の取らせ給ふ解剖刀  
の利きを示して眞假を明かにし、一は大悲の思召を開いて時代を覺醒せしめ給うたのであ



三々四科の法門

それで聖人は、この『化身土卷』に於て、水際立て、時代を解剖し、分類せられた。『化身土卷』一卷の正所明は二願二經二機二往生であるが、これを『教行信證』前五卷の所明に照し合せてみると、茲に所謂三願三經三機三往生といふ三々四科の法門が確立して、聖人の思想信仰を明かに知ることが出来るのである。先づこれを圖示してみやう。



「洛都の儒林行に迷つて、邪正の道路を辨ふることなし」と歎かせられた當時の儒者達は、いつの世でも同じい様に受け賣専門の道學者であつたのであらう。道學者は高貴な靈性問題を取り扱ふには餘りに血の涸れた無資格者である。諸寺の釋門教に昏くして、眞假の門戸を知らず」と悲しまれた當時の貴族的佛學者は、これも亦遊戯的思辨に日を消す

時代批判と自己批判

型にく、られた人達であつたであらう。當時聖道の諸教は定型に囚はれて、内部生命を忘却して仕舞つてゐた。この囚はれた遊戯的思辨者が、靈性の問題に背を入れる資格のないことは前の道學者と同様である。茲に靈性の明みを尋ねる三種の人がある。一は要門の人、二は眞門の人、三は弘願の人である。この三種の人は因願に引接を誓はれ、三種の往生を得る人々である。然も、要門の機は、進んでは眞門に入り、眞門の機は更に進んで弘願に入るのである。弘願門に入つて、法界は始めて洞然として一法爾力の顯現として認められるのである。この三種の機教は世界の現相にして、大悲力の活現の相状である。前にもいふ通り、聖人はこの『化身土卷』に於てかく時代を見、かく時代を誘導せられたのである。二。更に思ふに、自分一身は、時代そのもの、縮寫圖である。時代そのものが自分一身に悉く具はつてゐるものである。今聖人の場合に於ても、聖人がかくの如く時代を解剖し批判せられたのは、その儘自身の解剖と批判である。聖人は自ら『化卷』に、是を以て、愚禿親鸞、論主の解義を仰ぎ、宗師の勸化に依つて、久しく萬行諸善の假門を出で、永く雙樹林下の往生を離る。善本徳本の眞門に廻入して、偏に難思往生の心を發しき。然るに今特に方便の眞門を出で、選擇の願海に轉入し、速に難思往生の心を

離れ、難思議往生を遂げんと欲す。果遂の誓良に由有る哉、と示し給うた。聖人一身の上に世界の現狀は順次に轉換した。大悲力の活現は順次に效を奏した、聖人の思想信仰は次第に圓熟して到り着くべき所へ到着した。其の模様を告白なされたのがこの『化身土卷』一卷である。

それであるから、『化身土卷』一卷の開出は二方面から伺ふことが出来る。一は對外的であり、一は向内的である。對外的にいへば、聖人の御時代の全思想界の解剖である、向内的にいへば、聖人御自身の信仰圓熟の過程の告白である。然も、その二方面は決して相離れて別なるものではなく、不二不異の關係にあるものである。

『化身土卷』の織組

標擧

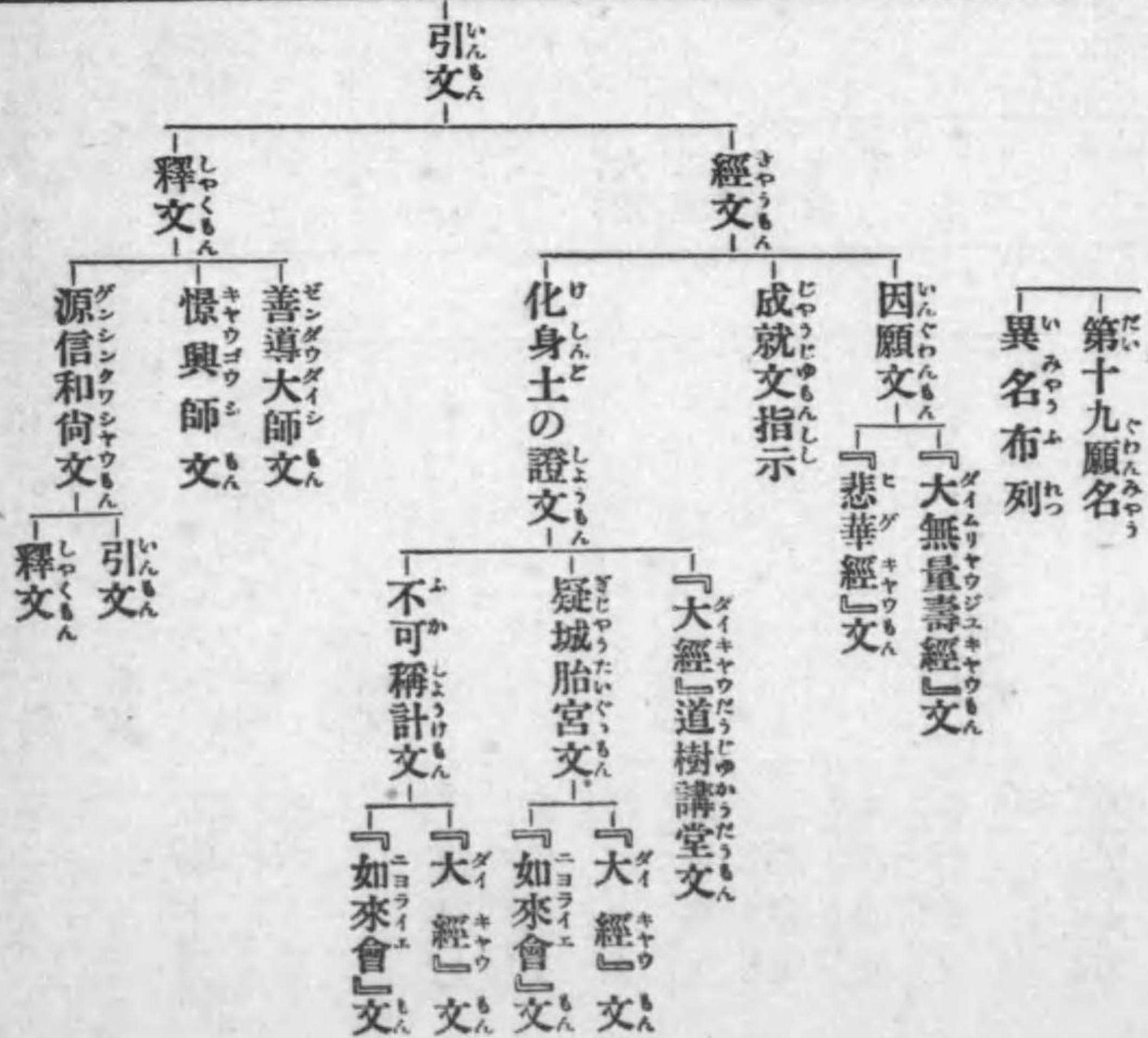
略頭

第十九願大旨

所化の機類  
二尊の能化

化身土を明す

第一章 化身土卷の來由



正釋

第九願第十願  
開說  
觀經  
意を  
顯はす

大觀二の經  
を會異す

問

隱顯を略明す

結文

解釋

標舉

顯義  
隱義

禮讚前序文  
後序文  
顯行緣文  
示觀緣文  
三心釋文  
顯行緣文  
證信序文  
宗旨門文  
序題門文

善導大師釋文

問答  
廣釋

答

引文

義理  
分齊

曇鸞大師釋文  
道綽禪師釋文

三經通顯

三經隱顯

觀經隱顯

機相廣述

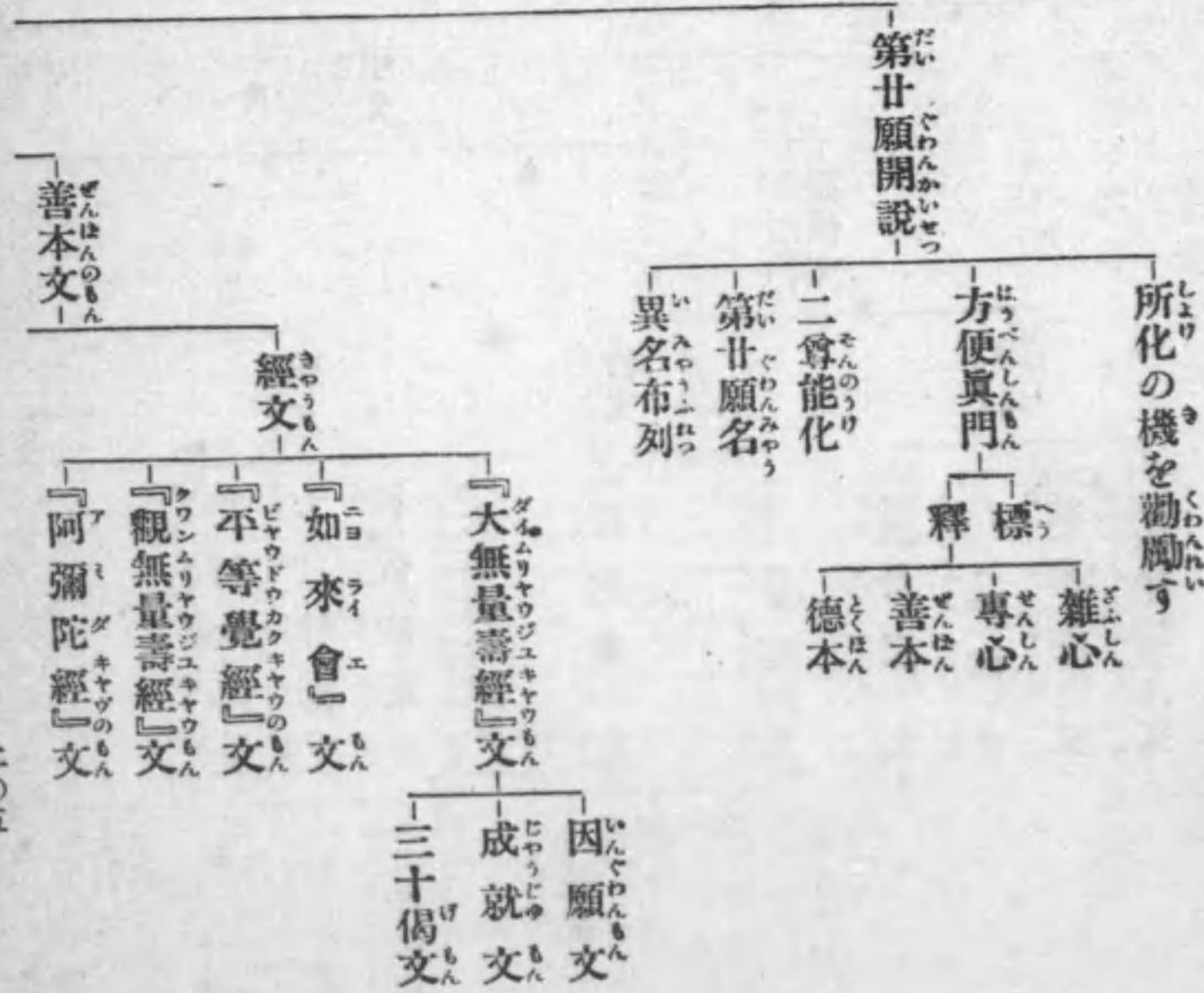
聖道門

雜修失文  
護念緣文  
如來出現文  
萬劫修劫文  
定散俱迴文

方便  
眞實  
引文  
正明  
文釋

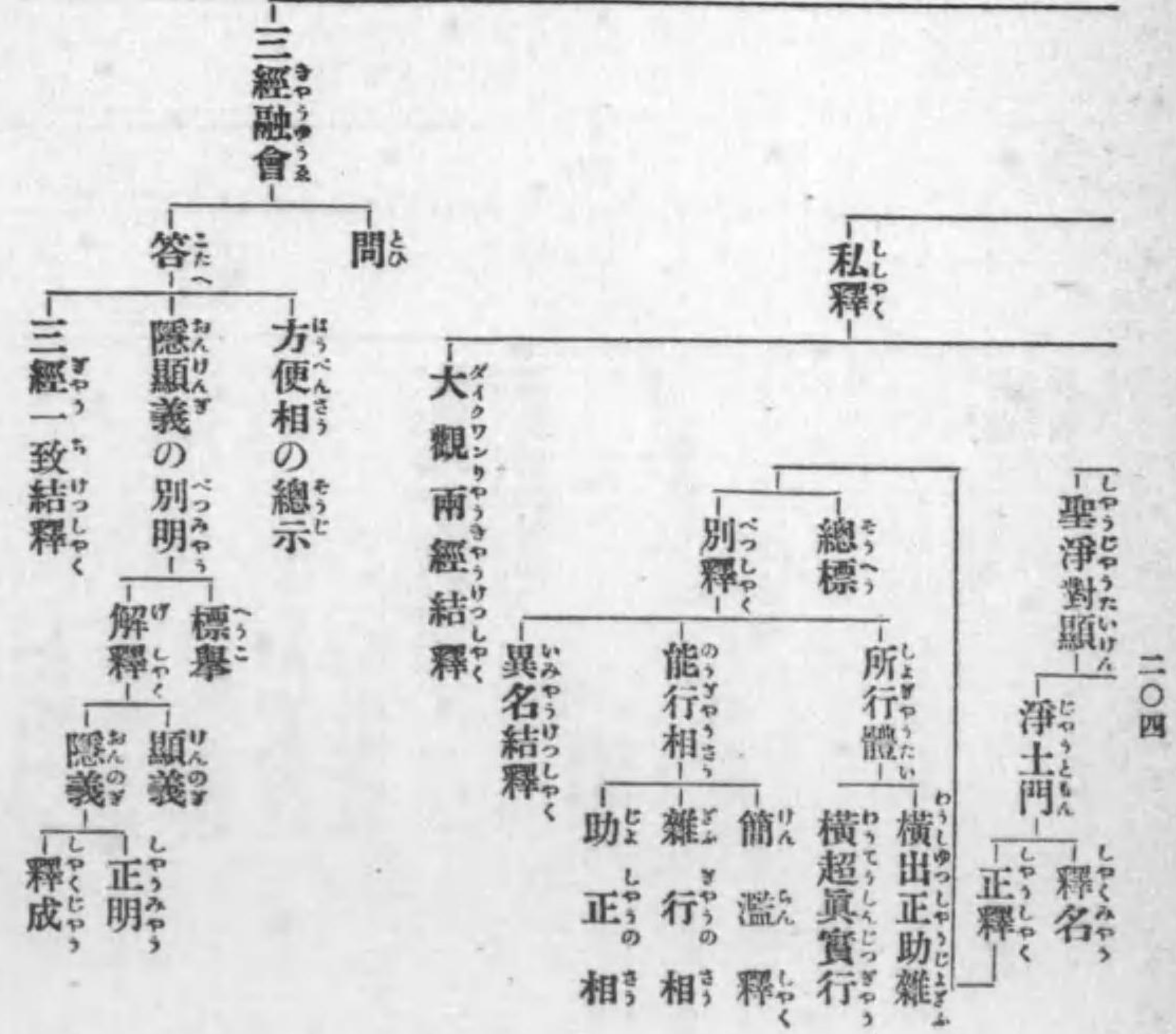
化身土卷

第一章 化身土卷の來由



教行信證講義

廣顯



第廿願開  
說「小經」  
の意を顯  
す

引文

勸信文



二道を判  
じ眞偽を  
決す

略明

總標

五說四依を擧げて眞偽を決す

聖淨二門を擧げて時機を判す

方便開示  
入眞勸發  
教益  
仰信

私釋  
悲嘆自督  
自力を誠誨  
機情の失

二道を判して  
時機を示す

時代勸決

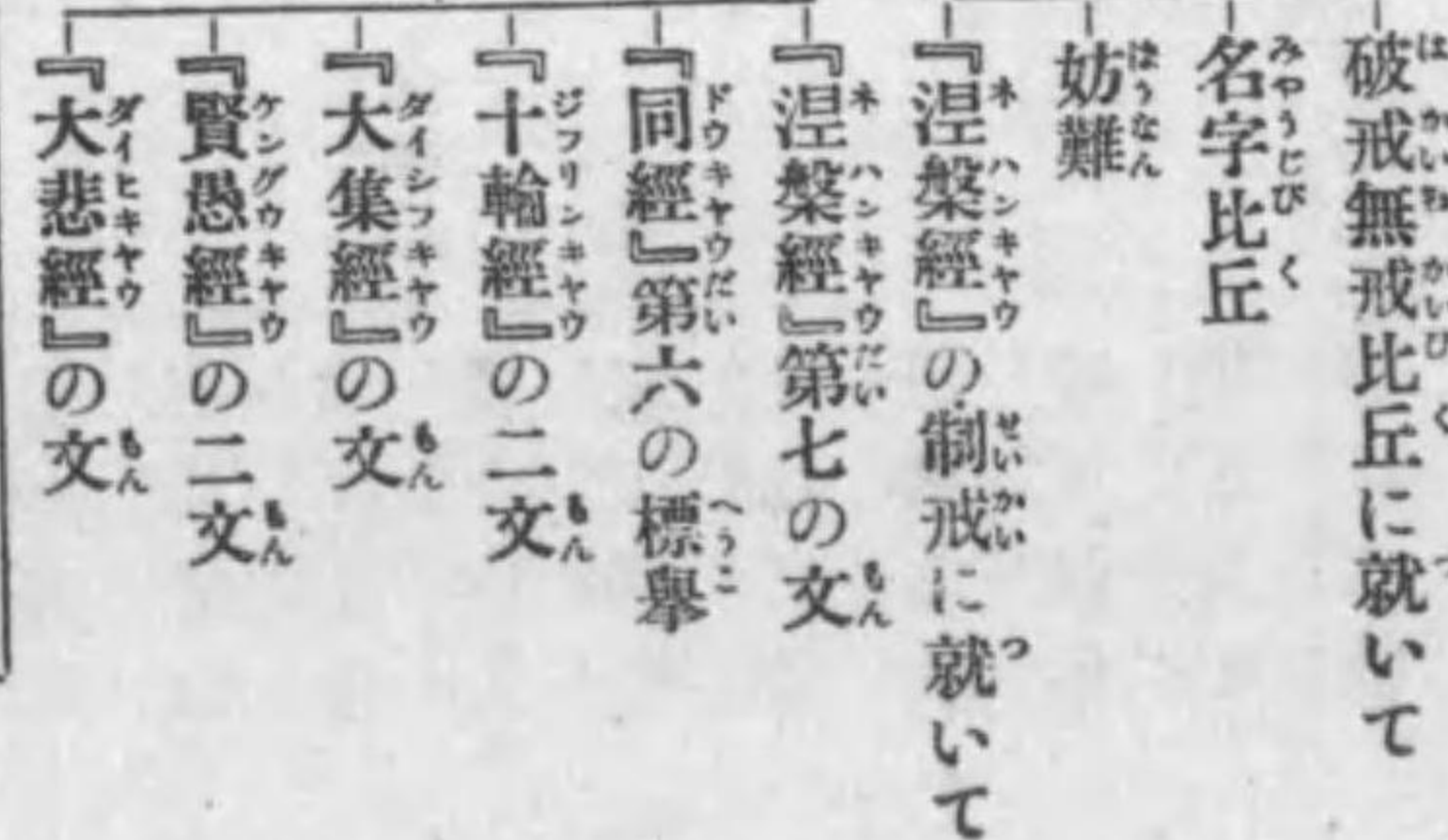
「安樂集」の時代判四文  
正明  
引文助成「灯明記」

三時決判  
破持僧事  
擧教比例

四依  
五說

引文

四重  
問答



眞偽を  
決して  
異執を  
誠む

經文

諸天王護持品

同品下

十平等  
惡鬼因

諸惡鬼神得敬品上  
離邪之益

世尊印可  
魔王生淨心

問答

世尊問

梵王答

佛說示

佛說示  
佛印可  
梵王語護  
四天閻浮別護  
宿曜天童護養  
地居四天護養  
空居四天護養  
梵王答  
世尊問

廣明

別釋

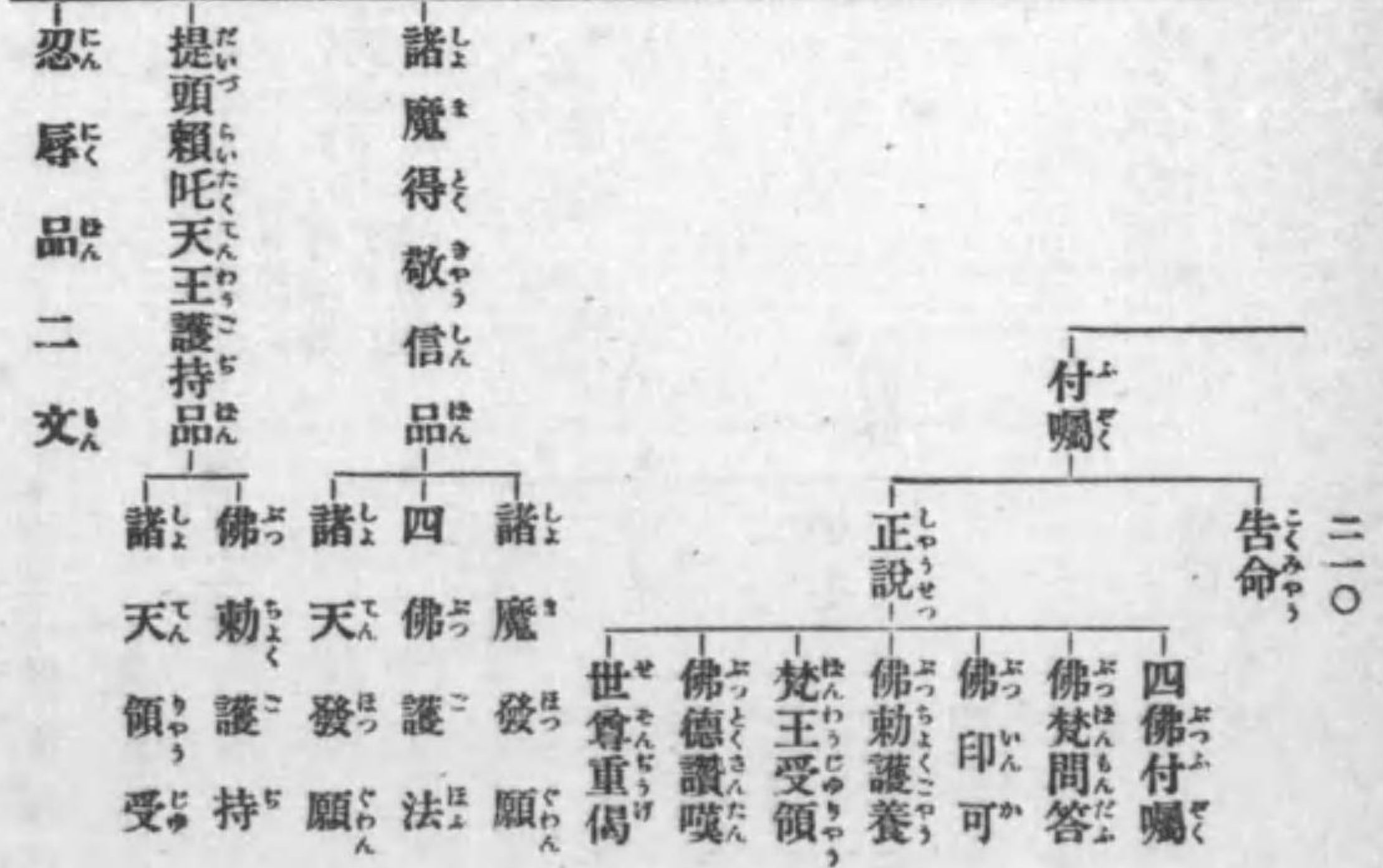
總標

涅槃經文  
般舟三昧經文

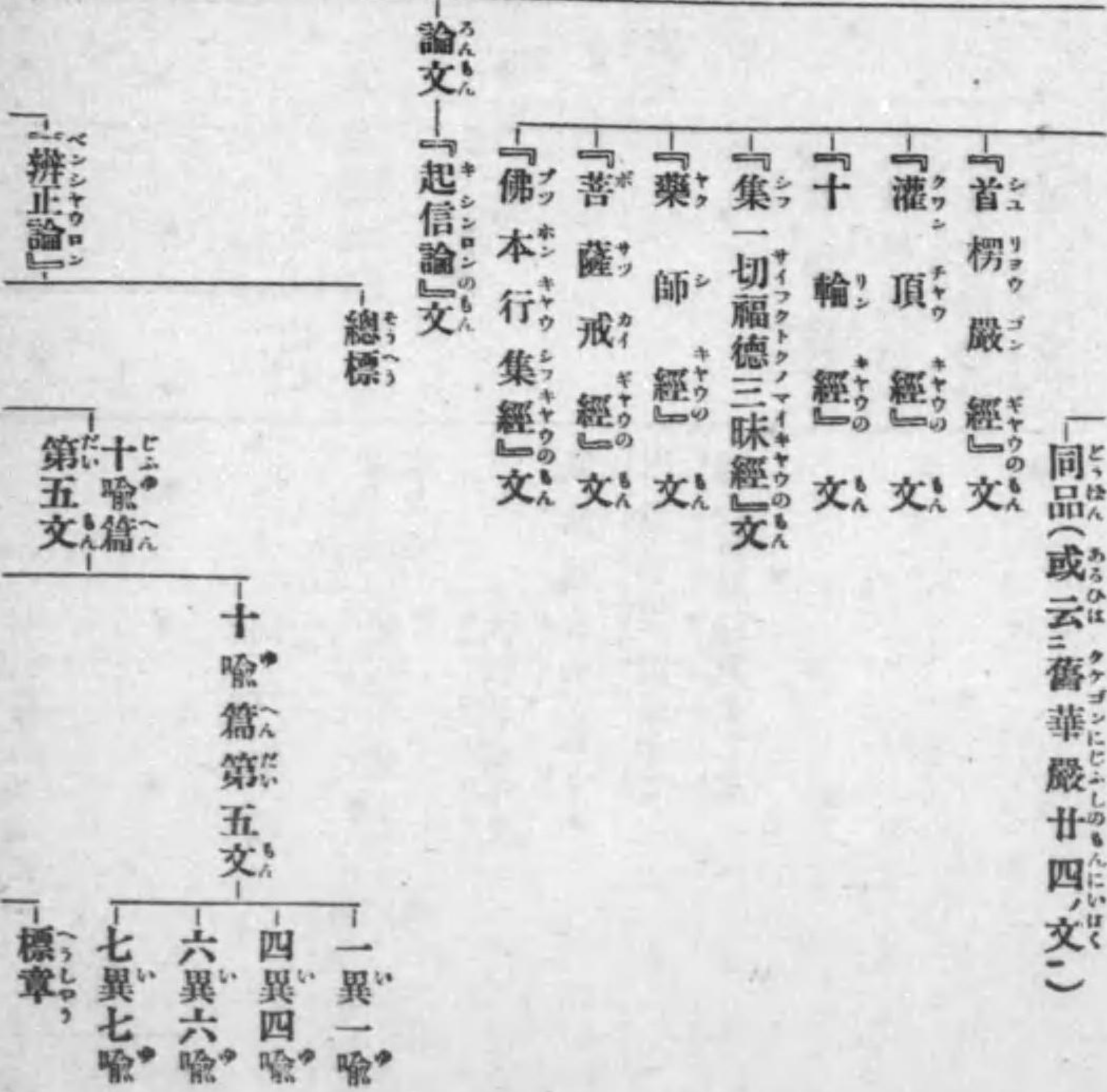
日藏經文

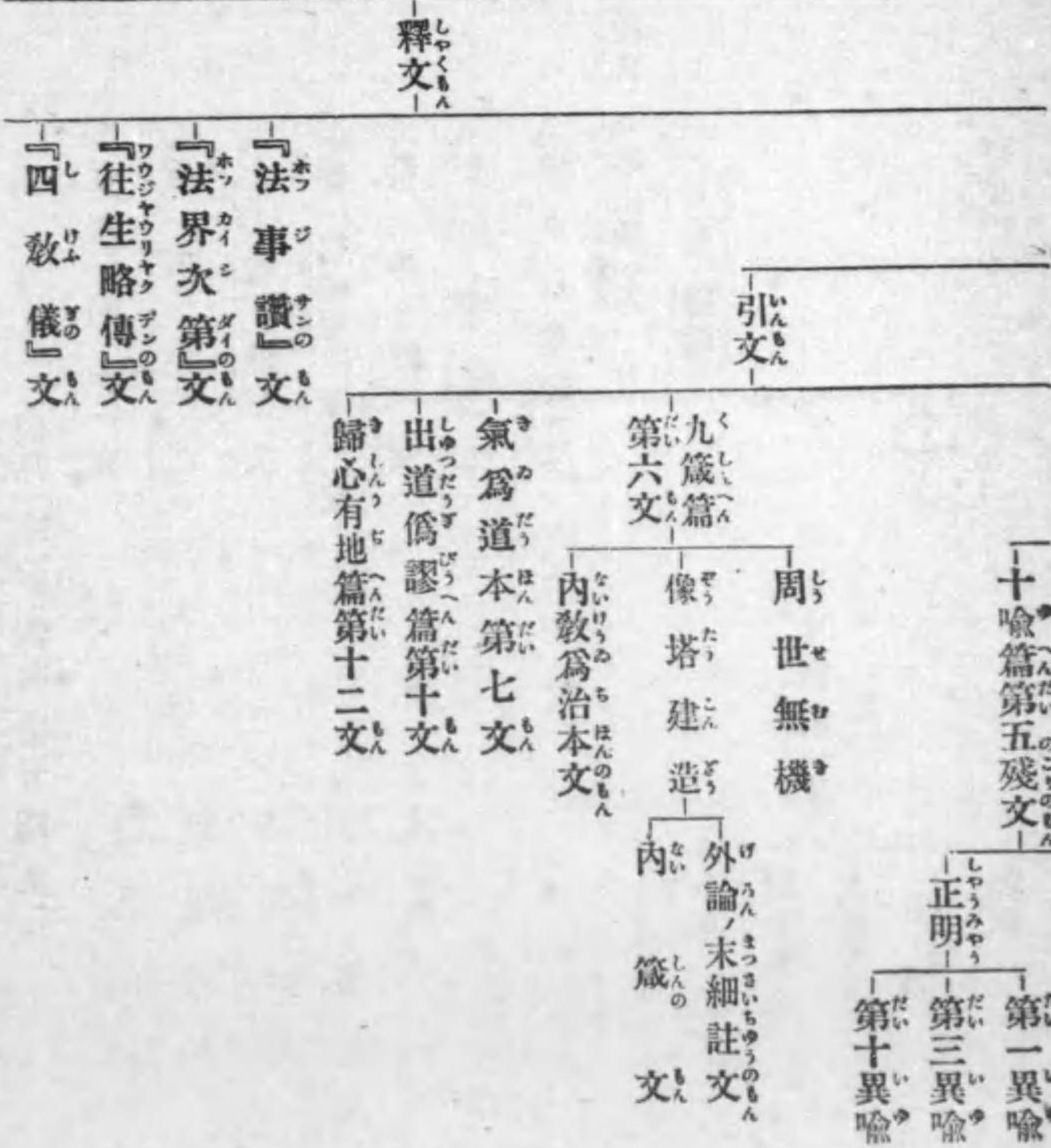
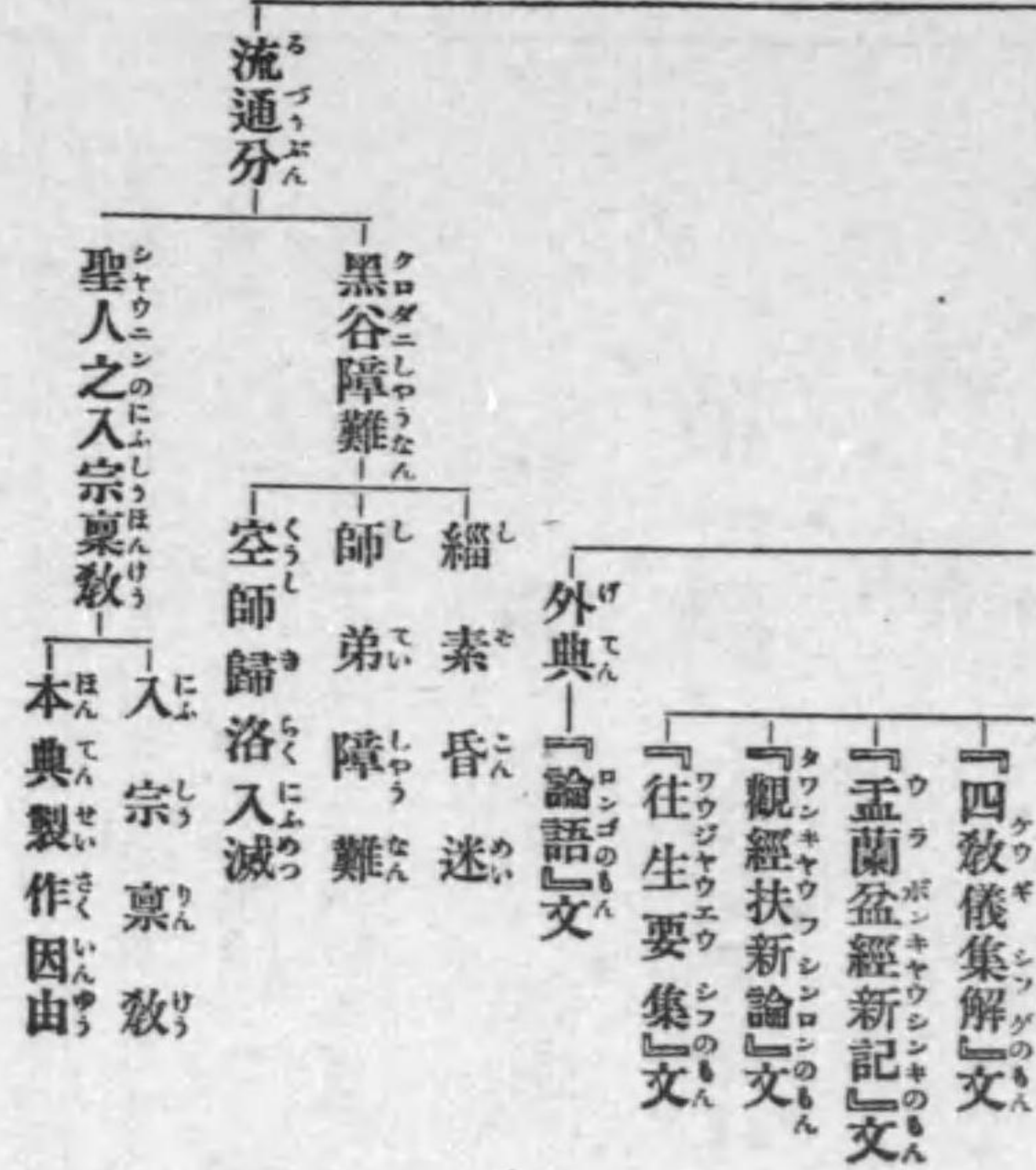
置星分時  
四天王配置  
未來記  
魔女歸佛  
魔女說偈  
眷屬發心  
魔王瞋憂  
魔女重偈  
念佛品  
魔王懼怖  
聞法得益  
觀察方軌  
魔王歸佛  
魔王說偈  
護塔品  
星宿品

「月藏經」文



引文







# 本講

## 第一編 化身化土

### 第一章 題號と選號

顯淨土方便化身土文類

愚禿釋親鸞集

【講義】 淨土眞宗の方便門たる化身化土を顯はす文類。愚禿等は上七頁を看よ。

【餘義】 『化身土卷』はたゞ題號だけをみると、顯淨土方便化身土とあるからたゞ化佛と化土とを示してある様であるが、實は前述の如く時代の全思想界の解剖であつて、委しく方便の四法を説いて、『前五卷』の眞實の四法に對してあるのである。更に云へば、方便の四法と化身土とを説いて、『前五卷』の眞實の四法と眞佛土に對してあるのである。たゞ、『前五卷』には眞實の四法を前に説いて、眞佛土を後に明し、『化身土卷』に於ては化身土を先に説いて方便の四法を後に明してある區別があるのである。

『化卷』の使命



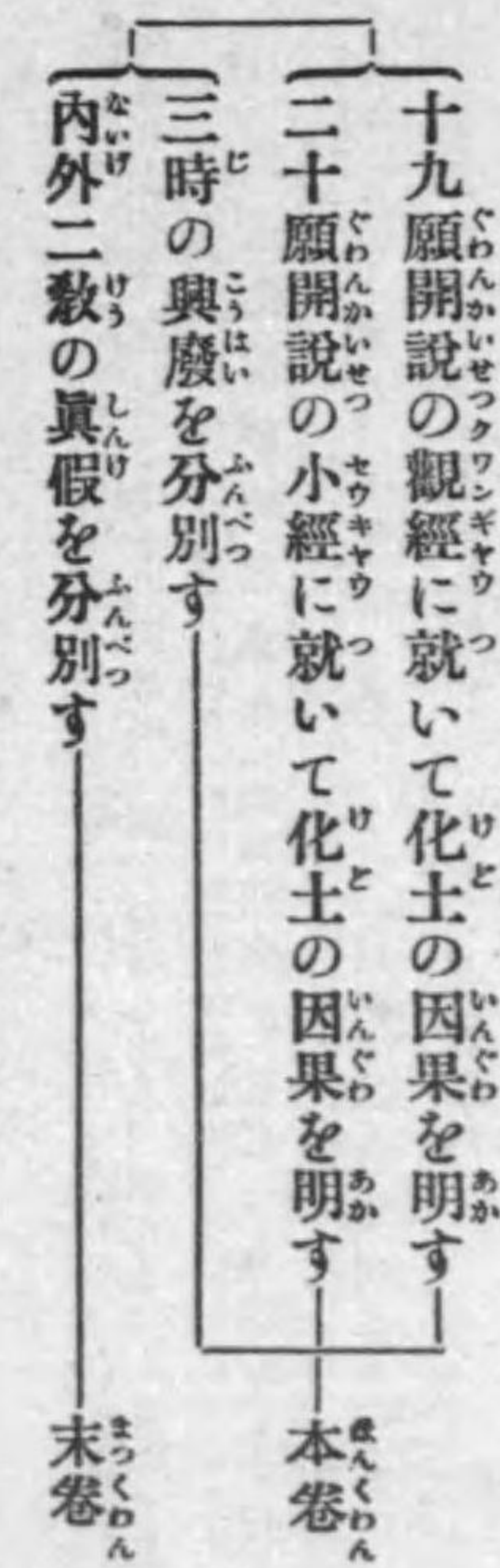
それで茲に問題が二つ起る。一は何故『化身土卷』に於ても、前五卷の所明の如く方便の四法を先きに擧げて次に化身土を後に出し給はぬか。二は、當卷の内容に方便の因果が皆示してあるのに、何故題號に化身土といふ果の方面のみを出し給うたかといふ問題である。

この理由は外ではない。前にもいふ通り『化身土卷』は『眞佛土卷』から開かれたもので『眞佛土卷』の「假之佛土在下應知」とある文を承けて、顯はれたものであるから、それで初めに化身土を明し、次に四法を説き給うたものである。第二問の題號に化身土のみを擧げ給うたのも第一には前の理由の直接に『眞佛土卷』に對する處から、第二には眞假の得失を明すに、果の化身土についてすれば、顯著であるからである。即ち因の四法について明すよりも効果が顯著であるから、それで、果の化身土を題號に擧

げ給うたのである。

眞佛土に對する名ならば、化身土よりは、假身土の方が然るべきではないかと思はれるが、この化の字を用ひ給うたところにも特殊の意味があるので、この『化身土卷』の化身は普通にいふ三身門の中の化身ではなく、報中の化である。この報中の化といふは横川の源信僧都の相承であり、それに依つて、化身土を顯はし給ふものであるから、源信僧都の報中の化の化の字を用ひ給うたものである。

四。次に、この『化身土卷』本末二卷の科段を切つて見ると、大科二段に分れ、更に四段に分れてゐて、左の様に圖示せられるのである。



### 第二章 標舉

【大意】化身化土の本願たる第十九第二十の二願を標舉し給ふ。御草本、御真本、高田本は、共に本文標願の前、表紙の裏にあり。無量壽佛觀經之意也。阿彌陀經之意也。は各願文と平行して右に並べられてある。そして御草本の其は朱書になつてゐる。本書第一卷六七頁の刊本の校合参照せられよ。

至心發願之願

邪定聚機 雙樹林下往生  
無量壽佛觀經之意也

至心廻向之願

不定聚機 難思往生  
阿彌陀經之意也

【字解】一。邪定聚機 三定聚の一。第十九願の機類を指す。正しく他力の佛意に叶ひたる第十八願の正定聚に對して、これは自力修善の機類であるから貶して邪定聚と名けられたものである。『俱舍論』第十には、聖者を正定聚と名くるに對して、五無間業を造る罪人を邪定聚としてあるが、今は隨宜轉用せられたのである。(本書第二卷七〇七頁参照)機とは縁に遇つて發動する可能性をいふ。即ち教へに薰育せられたる心の

有様を指すのである。

二。雙樹林下往生 三往生の一。第十九願自力修善の機の往生である。雙樹は沙羅(のど)雙樹にて、釋尊、拘尸那城外に入涅槃の際、この雙樹の下にせられた。即ち娑婆界の佛身(化身)入滅の象徴であるから、これをもつて化土往生を願し給ふものである。三往生の名目も『法華證』上四丁に、極樂往生を稱へられたものであるが、今之を三三の法門に轉用せられたのである。

三。不定聚機 三定聚の一。第十九願の機類を指す。第十八願の正定聚、第十九願の邪定聚の中間にありて、半自力半他力の機類であるから不定聚と仰せられた。『俱舍論』第十には、正定聚の聖者邪定聚の逆罪者に對して、凡夫を不定聚といふ。今は上のやうな意味にて、轉用せられたものである。(本書第二卷七〇七頁参照)

四。難思往生 三往生の一。第十八願の難思議往生、第十九願の雙樹林下往生に對して、第二十願の機類の往生を難思議往生といふ。法は他力念佛なれどもそれを修する機に自力を雜へるから、一字の裏返をもつて難を略し難思議往生とし給ふ。

【文科】『化身土卷』全體に説き明すべき方便の行信を誓ひ給へる本願及び其機類等を標舉し給ふ。

【講義】第十九至心發願の願は淨土の要門自力の機類の往生を誓うたものにして、即ち正所被の機は邪定聚と名け、其往生は化土の往生であるから雙樹林下往生と云ふ。そして

是れ全體は『觀無量壽經』一部の大意である。

次に第廿至心廻向の願は淨土の眞門、即ち半自力半他力の機類の往生を誓ひたるものにして、其正所被の機は不定聚と名け、其往生は難思往生といふ。そして是全體は『阿彌陀經』の大意である。

【餘義】一。茲に第十九第二十の二願が標舉せられてあるが、これに依つて、『化身土卷』全體の所明が充分に知られるのである。第十九願開説の經は『觀經』第二十願開説の經は『小經』にて、この『化身土卷』は願につけば、第十九第二十の兩願、經につけば、『觀經』『小經』の二經、機につけば、邪定聚、不定聚の二機、往生につけば雙樹林下、難思の二往生を説き明すのである。既に前五卷に説き終つた第十八願と『大經』と正定聚と難思議往生とに合して、三願三經三機三往生の三々の法門となり、これより眺むれば、當『化身土卷』は『觀經』『小經』二經の開説の疏となり前五卷と合して、『淨土三部經』の開説の疏となるのである。

それで、當『化身土卷』は前五卷に残された淨土三部經の中、『觀經』、『小經』を提げ來つて、茲にこれを開説し、三々四科の法門を以て、一見その所明を詳かに了らしめ、四

法の網格を擧げて、所説の骨法を明了ならしめ給ふのである。茲に出されたる觀小二經は方便の教である。十九二十の二願は方便の信である。雙樹林下、難思の二往生は方便の證である。而して、邪定聚、不定聚の二機は行に依つて生ずる差別の機であるから、方便の行に當るのである。この二願の標舉と細註に於て、既に四法を擧げて、一部の所明を知らしめ給ふのである。

二。第十八願は至心信樂、第十九願は至心發願、第二十願は至心廻向。信樂と發願と廻向、この二字づゝに、三願の特色が最も明了に顯はれてゐるので、又茲に全思想界の縮寫圖が明了に見られるのである。人間の思想は種々雑多に分れてゐるけれども、大別すれば三種になるものである。一は純一無雜な句こぼるゝ豊かな信である、明かに全一を見て感はない眼を有するものである。一は亂れた心を持ち、暗い眼をもつて、全一を見ることが出来ず、常に善を積んで果を得たいと望むものである。一は同じく全一を見る眼を有せず、自然法爾の理に戻つて、運心して功を得たいと望むものである。信樂を生命とするものと、發願を生命とするものと、廻向を生命とするものとである。この信樂と發願と廻向の三語は、それ／＼の機類の特性を最も明了に示すと共に、三願の眞意特色を最も精確に

示す語である。それであるから、第十八願には念佛往生の願以下五名ある中、至心信樂の願名を『信卷』に標舉し、第十九願には修習功德の願以下五名あり、第二十願には、植諸徳本の願以下四名ある中、至心發願の願、至心廻向の願の二願名を、この『化身士卷』に標舉し給うたのである。

勿論、第十九願にも廻向の義のないことはない。發願がある以上必ず廻向の心もある譯であるし、また第二十願にも、『阿彌陀經』に「應當發願」とあつて、發願の義もあるが、これは主となる處に従つて、發願と廻向に分けたものである。

三定聚に就いて

三。三定聚のことは、『教行信證講義』第二卷七〇七頁に詳細に説明してあるから、其處を見て貰ひたい。また、三往生のことは、同じく『教行信證講義』第二卷六八〇頁に出てゐるから、參照して貰ひたい。

四。因に、『愚禿鈔』上卷に三往生を擧げて、「大經宗、觀經宗、彌陀經宗」とあり、今この細註には、「觀經之意也」「阿彌陀經之意也」とあり、宗と意と使ひ分けてあるが、これは別に大した意味があるやうにも思はれない。雲樹院師は『論草』に於て、『愚禿鈔』は三經差別門に約して三往生を以て三經の宗要とし、今この『化卷』は觀小二經に隱顯を立て

三經一致門の義邊に約するから、語を柔げて意の字を用ひ給うたと曰はれてあるが、これ位に穿つて見て行つても差支はないやうである。

### 第三章 略 顯

#### 第一節 化身

謹顯化身土者佛者如無量壽佛觀經、說真身觀佛是也

【讀方】謹で化身土をあらはせば、佛といふは無量壽佛、觀經の說のごとし。真身觀の佛これなり。

【字解】一。化身土 又は化土、方便化身土といふ。衆生の機に應じて化現せる淨土。但しこゝには通常いふ所の變化土ではなく、彌陀の報土中の化土である。第十九、第二十の自力を執する機類の爲めに方便して、眞報土中に假りに化現せる佛土をいふ。即ち嬰兒を抱く胎中のやうな淨土である。

二。真身觀 觀經十六觀法の第九觀。阿彌陀佛の身相光明を觀すること。この觀法をなせば、十方一切の諸佛も觀することが出来るから、徧觀一切色身想とも名ける。第八の徧觀に對して、この觀法を真身觀といふ。

【文科】本章は化身土の大略を示されるのであるが、其中第一節に化身を顯はし給ふ。

【講義】謹んで淨土眞宗に建つる所の化身化土の何たるかを顯開せば、其佛は『觀無量壽經』に説かれたる十六觀法の第九眞身觀の佛である。即ち法性より顯現れたる報身佛ではなくして、機に應じて形を示し給へる六十萬億那由他恆河沙由旬といふ有量の方方便佛

真身觀の佛に就て

にてまします。

【餘義】一。化身とは『觀經』の眞身觀の佛であるといふこの文について疑がある。眞身觀の佛といふは、いふまでもなく、定善十三觀の中、第九の眞身觀の六十萬億那由他恆河沙由旬の佛身のことであるが、古來この佛を應化身とするか、報身とするかについて、劇しい議論があつたので、淨影、天台の諸師が、みな應化身と判せられたに對して、善導大師獨り彌陀佛を是報非化と定め、古今を階定して、一宗の宗要を確立せられたのである。これは、淨土教史の上に於て、特筆すべきことなのである。法然上人は、この善導の意を承けて、『漢語燈錄』一二十には、「佛の色身相好の功德は、謂く其身量は六十萬億那由他恆河沙由旬……是れ即ち六度萬行の修因に酬ひ、六八大願の顯現する所なり」といひ、『同』初七にも同様に六十萬億那由他恆河沙由旬の佛身を報身といつてある。然るに今我が親鸞聖人は、善導大師に乖き、諸師の謬解に従ひ、何故に、更に改めて、化身となされたのであるか。これ甚だ解し難いことではないか。六要鈔主も亦この文の下に（六要八三）この疑問を呈出してゐられるのである。

然しこの疑問は何でもない。善導大師が、彌陀如來を報身にして化身に非すと判せられ

たのは、決して、この第九真身觀の文の當相について其の所説の佛身を報身と判せられたのでなく、單に彌陀如來を報身と定められたのである。第九真身觀の文の當相はいかにしても、觀門所見の佛身であり、六十萬億那由他といふ數量があるから、化身に相違ない。我が聖人は善導大師を相承して報身は不可思議光如來、化身は第九真身觀の佛これなりと判せられたので、善導大師の定判と少しも相違してゐないのである。茲に眞身といふも、眞報身の義ではなく、第八像觀所見の佛に對して眞身と云はれてゐるのである。六要鈔主は、茲の解答に二義を出し、第一義は有數量有限佛であるから化身と判したのであるとし、第二義は眞身觀に示された眞身所共の化身を指して、眞身觀の佛これなりと判せられたのであるとなされてゐる。第一義は當然の説であり、第二義は、他宗に遠慮してなされた解答である。しかも「但し第二義穩便と稱す可し」と云はれてゐるが、存覺上人の意中も傍から見る時には茲に穩便を立て、見ねばならぬのである。これは存覺師作『四法大意』六丁を見れば上人の意底も略知れるのである。それに依つても、當時の教界の相狀と、その中に立てる眞宗の位置が讀み得らるゝのである。

來て來る。經文で見ると、この六十萬億那由他恆河沙由旬の佛身から光明を放ち、念佛衆生を攝取し給ふとあるが、佛は化身にして、衆生は他力念佛の行者といふことになる。念佛衆生を攝取し給ふは因願酬報の大悲の報身の御作用でなければならぬではないか。然るに經文では方便の化身と、眞實の衆生と喰ひ違ふことになるではないかといふ難が出て來るのである。

然しそれも少しく考へて見ると何でもないことである。『觀經』は誰も知る如く、要弘二門の説相がある。この眞身觀の文も、要弘二門から見て行かねばならぬ。もし要門の機に約すれば、この佛は觀門所見の化身であり、弘願の機に約すれば、六十萬億の數量の化身に即して不可思議光の報身佛である。それで善導大師は、『定善義』にこの文を釋する時には、釋相廢立門に依つて、六十萬億の佛身は、要門の機に約する觀門所見の化身、攝取不捨の佛は、弘願の機に約する眞報身となされてゐる。我が聖人は釋意隱顯門に依り、顯説から見れば、經文全體、要門定善の觀法にて、佛は數量ある化身、念佛衆生は觀念佛の衆生となり、隱の義から見れば、佛は不可思議光の報身、念佛衆生は稱念佛の弘願の機となると見給ふたのである。要するに常に『觀經』に對する要弘二門の見方を以てこの文に

對すれば、義意自ら明了となるのである。

### 第二節 化土

土者觀經、淨土是也。復如菩薩處胎經等說、即懈慢界是也。亦如大無量壽經說、即疑城胎宮是也。

【讀方】土といふは觀經の淨土これなり。また菩薩處胎經等の說のことし。すなはち懈慢界これなり。また大無量壽經の說のことし。すなはち疑城胎宮これなり。

【字解】一、觀經淨土 「觀無量壽經」に説かれたる淨土のこと。即ち定善十三觀に説かれた寶地寶樹、寶池、寶樓等の依報莊嚴、及び第九の眞身觀等の正報莊嚴を總稱して觀經淨土といふ。

二、菩薩處胎經 七卷、具には「菩薩從兜率天降神母胎説廣普經」といふ。天宮品、遊歩品より起塔品出經品まで凡て三十八品あり。佛一代の行化に寄せて、種々の法門を説く。

三、懈慢界 懈慢邊地ともいふ。極樂淨土の邊地にして三寶を見聞することが出来ない。眞門の自力念佛者の生る疑城胎宮に對して、之は要門自力の行者の往生する化土の稱である。

四、疑城胎宮 二十願の自力念佛の行者の往生する化土である。この疑城に生るれば三寶を見聞することが出来ないこと、恰も胎兒のやうであるから、胎生といふ。その胎生の宮殿であるから疑城胎宮といひ、單

に胎宮ともいふ。この疑城胎宮は、廿願の機類のみならず、第十九願の要門の機に往生する上にも通ずるところがある。

【文科】化身の次に化土の大略を願はし給ふ。

【講義】そして佛土は同じく「觀無量壽經」に説かれてある有相の淨土で矢張り觀門の機に顯はれた方便の淨土である。復「菩薩處胎經」に説かれたる懈慢界の淨土、及び「大無量壽經」下卷に説かれてある疑城胎宮といふは此化土である。

【餘義】一、何事でもこれを客觀的に物的にのみ觀察し研究せんとする時には、随分幾多の滑稽を生ずるものである。宗教上のことは別してさういふものであるが、今この「化卷」に説き明さるゝ化土についても、これを主觀的に精神的に讀んで行く時には、聖人の至醇な思想生活が想像せられて、不盡の興趣を呼び起し來るけれども、もし、これを客觀的に物的に見て、化土の種類とか、位置とか、方處とかを研盡せんとする時には、随分憐れむべき滑稽を生ずるのである。古來この化土について種々の議論があつた。然も、その議論が精細を極むれば極むる程、わけがわからぬものとなつて居る。この罪は、研究者の主觀がいつも、客觀的であり、物的の見方を離れることが出来ない處に負うてゐるのである。



化土については、我が聖人の文書の上にも、随分錯雜し矛盾してゐて、一寸見ても、どう區別し系統たて、見れば善いかわからないやうになつてゐる。前にもいふ通り、この化土については、特別に、主觀的精神的の見方を要求するのであるが、今は、先づ、古來先輩の研究に従つて、この化土の所明所説を整理してみよう。

二。我が祖聖人の文書の上に顯はれてゐる化土の名は數も多く又非常に錯雜してゐる。先づその名を擧げて行かう。

- (一) 『化卷』八初……………『觀經』の淨土……………『處胎經』の懈慢界……………『大經』の疑城胎宮。
- (二) 『愚禿鈔』上六……………疑城胎宮……………懈慢邊地。
- (三) 『同』下の終……………胎宮邊地……………懈慢界。
- (四) 『化卷』九十三……………邊地胎宮……………懈慢界。
- (五) 『三經文類』十一……………懈慢界……………胎宮。
- (六) 『末燈鈔』六……………懈慢邊地……………胎宮疑城。
- (七) 『疑惑和讚』……………邊地……………邊地懈慢……………胎生邊地……………邊地七寶の宮殿。
- (八) 『淨土和讚』……………邊地懈慢……………(草本左訓に邊地と懈慢とにわかち、邊地を疑惑胎

類化土の分

生邊地と呼んでゐる。

こういふ具合にいろいろに説かれてあつて、一體化土の數がどれだけあるのか、そしてその名稱は何れを正しとすべきか一寸解らないやうであるが、少しく義により文に依り精細に研べて見ると左の結果を得るのである。

A、土類無量、我が親鸞聖人も、『眞佛土卷』七五四に「良に假の佛土の業因千差なれば土も復千差なるべし、これを方便化身化土と名づく」と宣ふ如く、化土の特徴の一は、その業因の千差萬別なる點である、眞報土は同一念佛無別道故で、一平等因に依つて一平等果を得るのである。自力に執するものは差別に囚はるゝから其の化土往生の因が千差である。因が各別であるから果も亦各別である。これ實に自力迷執の輩の特色であつて、同時に方便化土の特徴である。この土類の千差無量なるを顯はして、茲に「觀經の淨土是なり」と宣うたので、『觀經』の淨土は九品にわかれ、この九品といふが、三々九品、九々八十一品と無量の品類あるを示すのである。

B、土名二種。上述の如く、化土の品類には無量あり、名は類に依りて異なりあるものであるけれども、無暗に漫りに命名すべきものでなく、それ／＼の據處あつて稱呼とな

土類無量

土名二種

るものであるから、我が聖人も慎重に化土の呼稱を取り扱ひ給ひ、土名は二種を出し給ふのである。「觀經の淨土」といふは、化土の名稱ではない。「觀經」に九品の淨土が説かれてあるからその土類の無量を示すために出し給うたものであつて、「處胎經」に依つて稱ふる懈慢界と、「大經」に依つて呼ぶ疑城胎宮とが、化土の名稱である。それであるから、「化卷」要門の下九(十三)には邊地胎宮と懈慢界の二名を出し、「三經文類」、「和讚」等、またこの二名のみを出し給ふのである。猶後に述ぶる名義の解釋を見て貰へば上の一見錯亂してゐる名稱が明かになるであらう。

〇、土體唯一。かく土類は無量であり、土名は二種であるが、土體は全く一であるのである。ひとり化土の土體が一である許りでなく、報土化土共に土體は全く一なのである。何故なれば、前にも幾度か出でたる如く、彌陀の化土は諸佛通相の化身化土でなく、所謂報中の化であるから、因願酬報の土であることはいふまでもない。それであるから、眞實報土は十二三兩願の成就であることは「眞佛土卷」に既に説き明かされたが、化土建立の願といふがない。彌陀の淨土は自受用他受用不二の眞報土であつて土體に二三あるのではないが、自力にかゝはつてゐる衆生の機根が千差であるから、その衆機に應じて暫らく

土體唯一

懈慢界

眞報土の中に方便の化身土を顯現し給ふので、それは、彌陀如來の方からいへば第十八願の外に十九、二十の兩方便願を建立し給ふ願意である。衆生の方からいへば、一眞報土の中に業因に應じて、種々の化土を感見するのである。けれども土の體を押へていへば唯一である。かく眞化の主體が一であるから、化土の土體の一であることはいふまでもない。

三。この化土の名稱の中、懈慢界といふは、源「處胎經」二十八に出で、懷感禪師、これを「群疑論」四に引き、源信和尚「往生要集」下の末十一に引用し給ふたのである。懈慢といふは字義にも出づる通り、雜行雜修の人は執心不牢固にて、その信若存若亡であるから、これを懈怠慢墮と貶しめ、其のもの、滯つて前進むことの出来ない所であるから懈慢界と稱したのである。

疑城胎宮は、「大經」の胎生、七寶宮殿といふ文を根本の據處とし、善導大師の「定善義」の「喻、所、胎」の文、及び「守護國界經」に「生於疑城五百歲受樂」とあるを取りて、親鸞聖人の名け給うた名稱である。不了佛智の疑惑の罪に依り、宮殿の中に五百歲間、三寶を見聞せずして過ぐるといふ意である。

果に依つて、報土の化生に對して胎生、外から見れば五百歳の間、三寶を見聞することが出来ず、蓮花に包まれて母胎に處るやうなものであり、胎生者自身は七寶の宮殿にゐることと觀じてゐるから、胎宮といつたものである。それで、上に出でた邊地の名は我が聖人の始終用ひ給ふ所であるが、この名はもと『大經』に出で、懈慢と胎宮の失を顯はすに用ひ給うたので、兩方に通するのである。その邊地の名義は曇鸞大師の『略論』右に二義を出して解釋し、一は不見聞三寶の故に貶して邊地といひ、二は實際、極樂淨土の邊地にあるから名けるといふのであるが、二義共に用ひて差支ない。此處らは客觀的の説相であつて、同時に主觀的な味の豊かな處である。これを以て前にいろ／＼と説かれてゐる化土の名稱を見るときはつきりして來るのである。懈慢界は、懈慢、懈慢界、懈慢邊地と説かれ、疑城胎宮は疑城胎宮、胎宮疑城、胎宮邊地、邊地胎宮、胎生邊地、邊地と説かれてゐるのである。

懈慢疑城の同異

四、扱て、化土に懈慢界と疑城胎宮の二名あることは、上に既に述べ終つたが、茲に我が聖人が、この二土を十九、廿願に配當し給ふ上に釋相が一樣でないからいろ／＼問題が起つてゐる。『三經往生文類』、丁十一『末燈鈔』九には、懈慢界を十九願、疑城胎宮を二十願

に配し、この『化卷』八には、疑城は通じて十九二十願の下に出し、懈慢は十九願に限つて出し給ひ、『疑惑和讚』、『愚禿鈔』下の終、『化卷』九丁三には兩化土兩願混雜して説き明してゐる。これをどう見て、どう解釋すれば可いかといふについて種々異論が起つてゐるのである。

然し、これは、前にもいふ様に客觀的にこう／＼と定められるものではなく、要は主觀がいか様に色味するかといふ點にかゝつてゐるものであるから、兩化土、兩願の配當も一應のものとして置かねばならぬのである。一應わけて配當すれば、懈慢といふは雜行雜修心不牢固のことであるからこれを十九願に配し、疑城の名は不了佛智の疑惑の失を顯はすものであるから、第二十願の自力疑心の念佛者に配當したものである。『三經文類』、『末燈鈔』はこの説相である。

然し乍ら、更に尅實して見れば、懈慢も不了佛智の疑惑者であり、疑城も執心不牢固の懈慢者であるから、懈慢と疑城と一應名は異なつても、諸行念佛十九二十の兩願に通することは明了である。それで『疑惑和讚』始め、『化卷』、『愚禿鈔』等、兩願に通じて兩化土を並べ給ふたものである。

以上述べたところで、我が祖聖人の所説の混亂は筋道をつけることが出来ると思ふ。然し大切な問題は、懈慢界、疑城胎宮と説かれた精神的意義を主觀的に色味するところにあるのである。

### 第四章 第十九願開説「觀經」意

【大意】本章には正しく第十九願「觀經」の意を廣述し給ふ。初め第一節に第十九願の大意として、所化の機類、二尊の能化、第十九願名を擧げ、次に其證文として第二節は經文證である。第一項因願文、第二項成就文、第三項は化身士の證文として廣く「大經」「如來會」の文を引く。進んで第三節は稱文證にして、善導、懷興、源信三師の文を擧げて本章了る。

#### 第一節 第十九願の大意

##### 第一項 所化の機類

然濁世群萌穢惡、含識乃出三九十五種之邪道、雖入半滿權實之法門、眞者甚以難實者甚以希、僞者甚以多、虛者甚以滋。

【讀方】しかるに濁世の群萌、穢惡の含識、いまし九十五種の邪道をいで、半滿權實の法門にいるといへども、眞なるものは甚たて難く、實なるものは甚たて稀なり。僞なるものは甚たておほく、虚なるものは甚たて滋し。

【字解】一。九十五種の邪道。釋尊當時の遊行者婆羅門として有名であつた六師外道（第二卷）五七頁参照）に各十五人の弟子あり合して九十となる。それに師の六師を加ふれば九十六種の外道となる。其中小乗の一派に似たるものがあるから、夫を除いて九十五種の外道となる。こゝでは一般に佛敎以外の邪道を總稱するのである。

二。半滿權實。一代佛敎を判じたる二種の敎判。半滿は半字敎（小乘敎）即ち藏敎をいふ。愚なる子に、父が半字を敎へておくやうなもので、不完全な敎といふことと滿敎（大乘敎）即ち通敎、別敎、圓敎を指す父が賢い子には滿字を敎へるやうに、完全なる釋尊の說法といふことと云ふ。權實は、權敎（實大乘の眞實敎）に入らしむる爲めの方便の敎をいふと實敎（眞實なる敎、實大乘の敎）を云ふの稱。

【文科】第十九願の所被の機類の何たるかを示し給ふ。

【講義】然るに五濁の世に汚された群萌、即ち煩惱惡業の合識は、今や諸佛の大慈に育てられて、漸く九十五種の邪道の網を脱れ出で、佛敎に敎へる所の半字敎、滿字敎、又は權敎、實敎等の法門を信受し修道するやうになつても、眞に其敎へに入る者は甚だ得難く、如實の修道者は甚だ稀である。之に反して佛徒といふは名ばかりにて其實は僞者が非常に多く、内心空虚の者が甚だ多い。

### 第二項 二尊の能化

是以釋迦牟尼佛顯三說 福德藏誘引 群生海阿彌陀如來本發誓願 普化諸有海

【讀方】こゝをもつて釋迦牟尼佛、福德藏を顯說して群生海を誘引し、阿彌陀如來、もと誓願をおこしてあらゆる諸有海を化したまふ。

【字解】一。福德藏。「觀經」に説かれたる定善、散善の諸善のこと。即ち第十九願の諸諸功德を指すのである。

【文科】上の所被の機に對して二尊の能化を示し給ふ。

【講義】釋迦牟尼佛之を憐み給ひて、眞實に福德功德を修むる法門、即ち福德藏を説き顯はして修道者の取るべき心靈の方向を指示し下され、そして廣く一切衆生を眞實門に入らしめんと誘引うて下された。然るに釋尊の此勸化の本を釋れば阿彌陀如來の第十九願である。如來は此の本願を發して、普く迷ひに沈める一切衆生を化導して下された。

【餘義】一。この福德藏といふは、『化卷』九十七の功德藏と、『行卷』三六丁の福智藏と

に對する語であつて、ついでに如く、要門、眞門、弘願の三法を顯はすものである。福德藏といふは散善三福の功德に名づけ、要門はこの三福を往生の因とするから、要門法の名となし、功德藏といふは、眞門の行者が念佛の功德を募つて往生の業因に擬するから、眞門法の名となし、福德藏といふは弘願一乗の法は福德智慧二莊嚴を圓備してゐるから弘願法に名けたものである。

茲に一つの難問がある。要門の法は散善三福ばかりではない。定善もある、定善は觀法であるから、智慧があることはいふ迄もない。しからは要門法、亦福智藏と名づくべきではないかといふのである。

然し定善はもとより觀察であり智であるはいふまでもないが、その智も未だ無漏の眞智でないから、福に攝して福德藏といふたものである。

### 第三項 第十九願名

既而有悲願名、修諸功德之願

【讀方】 既にして悲願います。諸修功德の願となづく。

【文科】 第十九願名をあげたまふ。

【講義】 かくの如く其悲願は既に建立せられて修諸功德之願と名けられてある。即ち善根功德の何たるかを知らないものゝ爲めに、善根功德を修めることを教へて下されたのである。

### 第四項 異名布列

復名、臨終現前之願、復名、現前導生之願、復名、來迎引接之願、亦可名、至心發願之願也

【讀方】 また臨終現前の願となづく。また現前導生の願となづく。また來迎引接の願となづく。また至心發願の願となづくべきなり。

【文科】 第十九願の異名列舉。

【講義】 復この本願を臨終現前之願と名ける。即ち諸の功德を修して極樂へ生れんと願ふ者の臨終の時に、阿彌陀如來が此人の目の前に現はれて來迎し給ふ本願であるからである。復、臨終の時に現はれて極樂へ導き給ふ願であるから現前導生之願とも名ける。復

臨終の時に來迎して極樂へ引接き給ふ願であるから來迎引接之願とも名ける、上の三名は如來引接の方面から名けたものであるが、かやうな來迎引接を受ける行者は、心を一つにし、眞實にして、諸功德を淨土に廻向し、之によりて往生せんことを願はなければならぬことを誓うた本願であるから至心發願之願とも名けられるのである。

【餘義】一。茲に第十九願の願名が五つ出してある。この中、前四者は諸師共許の願名、後の一名は我が聖人御已證の願名である。修諸功德願といふは、義寂、法位、憬興の諸師の用ひたるものにて、臨終現前の願は靜然、現前導生の願は智光、御廟、來迎引接の願は眞源、惠心、了惠の諸師の用ひたる願名である。

この五願名布列の次第は、この第十九願に行と信と益の三つの願事があり、修諸功德は因行について名を立て、次の三名は果益について立名し、最後の至心發願は信について立名したものである、臨終現前と現前導生と來迎引接とは全く同じ意味の願名で、前二者は願文の上から名を立て、後の來迎引接は『觀經』九品段の説相から名づけたものである。至心發願の願名はこの五名の中に最も大切なるものにて、前に述べた如く、第十八至心信樂の願、第二十至心廻向の願に對して、發願の二字を以て、第十九願の特色をはつき

第十九願  
の異名に  
就て

りと浮き出させてゐるのである。修諸功德の功德は三學六度の聖道門の因行であるが、これが淨土の因行となるは信の發願の力に依るのである。それで我が聖人は『化卷』始めにこの五願名の中、至心發願之願名を標舉し給うたのである。

第二節 經文證

第一項 因願文

第一科 『大無量壽經』の文

是以大經願言設我得佛十方衆生發菩提心修諸功德至心發願欲生我國臨壽終時假令不與大衆圍遶現其人前者不取正覺

【讀方】こゝをもて大經の願にのたまはく。たとひわれ佛を得たらんに、十方の衆生、菩提心をおこし、もろくの功德を修し、心を至し、發願して、我國に生ぜんとおもはん。壽終のときに臨んで、たとひ大衆と圍遶して、その人のまへに現ぜずといはば正覺をとらじ。

【文科】正依大經の第十九願を擧ぐ。

第四章 第十九願開說『觀經』意

【講義】いま其本願の文を擧ぐれば、『大經』第十九願にいはく、若し我佛となるであらう時、十方の一切の衆生が、證りを開きたいといふ無上道心を起し、この道心を成就せしめんが爲めに諸の功徳を修め、かくして至心をもつて願ひを發し、修めた功徳をもつて我淨土に生れんと欲ふならば、其人の壽終らんとする時に臨んで、若し觀音勢至等の大衆と、もに其人を圍繞り、其人の前に現はれて來迎せないならば、我は正覺を開かないであらう。

【餘義】一。この假令の二字について、三種の解釋がある。一は『望西疏』三に出づる「假令等者不現非實故云假令」の義で、必ずといふ意味を持たせたものである。若不生者の若と同じく誓の語となるのである。二は『六要』八丁に出づる假益を示す語と見る義である。攝取は實益、來迎は假益。來迎は彌陀の實意に非ずと雖も、諸行の機も洩したくないといふ大悲心から假益を施し給ふが來迎なりと見るのである。『六要』九丁三「佛心の光明は余の雜業行者を照さざるなり。假令の誓願良に由有る哉」といふ祖文に依り、願意から假令の二字を見て行くのである。三は不定の義で『口傳鈔』下三丁「願としてかならず迎接あらんことおほきに不定なり。されば第十九の願文にも現其人前者のうへに假令不

與とおかれたり。假令の二字をばたとひとよむべきなり。たとひといふはあらまじなり……不定のあひだ假令の二字をおかる。さもありぬべくばといへるこゝろなり」とあり。來迎の益の不定なることを示して假令の二字を置き給うたものと見る義である。今この三義を評するに、第一義の決定の義は文として一番穩當である。然し我祖の假令の誓願と仰せられ、存師が假益を顯はす假令の二字なりと見らるゝ如きは、文に執して解釋するのではなく、文意に依つて文字を左右せらるゝので、徹底的な意味はこれらの解釋の上に見らるゝのである。不定の解釋も同じく願意から見た當然の義である。

二。扱て、臨終來迎はかくして第十九願に誓はれてある。第十八願、第二十願には誓はれてゐない。要眞弘の三願の中、淨土の初門にこのあらはな得益の誓はれてゐる所で、他力引接の御覺召が明に伺はるゝ様である。

三。それならば、第十八願弘願他力の念佛行者には來迎の益はないか。善導元祖兩師は眞假二願の分別なしに、第十九願の來迎を以て、直に本願念佛の利益としてゐられるではないか。然るに何故に淨土眞宗に於ては、特別に際立てゝ不來迎を云々するのであるか。この問難は一應尤もの様であるが、然し、淨土眞宗に於て不來迎といふは、來迎がない



といふ義ではなく、『御文』の所謂「來迎までもなきなり」の意で、念佛の行者には、常に彌陀如來の攝取護念の益があり、それが引きついで臨終に及ぶので、特別に臨終の益を云爲するまでもないと云ふ意味なのである。善導大師、法然上人の來迎を仰せられしは、一面衆生誘引の意を含み、一面常照護念の引き延しと見給ふのである。だから法然上人は『漢語燈錄』二五三には、近縁の中に平生と臨終とを分ち、「二に平生とは若し人佛を念すれば阿彌陀佛無數化身化觀世音化大勢至常に來つて、この行人の所に至り、念佛の草菴隘しと雖、而も恒沙の聖衆雲の如く集る」と宣うてある。平生既に彌陀如來及び化佛菩薩の常照護念を受けてゐるのであるから、臨終の夕に來迎を期するといふ危い藝當は、他力の行者には要がない。末燈鈔の初丁の「來迎は諸行往生にあり、自力の行者なるがゆゑに、臨終といふことは諸行往生の人にいふべし。いまだ眞實の信心をえざるがゆゑなり、……眞實信心の行人は攝取不捨のゆゑに正定聚のくらゐに住す。このゆゑに臨終まつことなし、來迎たのむことなし……來迎の儀式をまたず」とあるはこの意味である。『御文』一帖目第四通の「不來迎のことも、一念發起住正定聚と沙汰せられさふらふときは、さらに來迎を期するなんとまうすこともなきなり。そのゆゑは來迎を期するなんとまうすことは諸行

の機にとりてのことなり。眞實信心の行者は、一念發起するところにて、やがて攝取不捨の光益にあづかるときは來迎までもなきなり」とはこれを相承して宣うたものである。『一念多念證文』初丁に、善導大師の「恒願一切臨終時、勝緣勝境悉現前」を釋し、臨終時をいのちのをはらんときまでと解釋し給うたのも、この意味から來てゐるのである。『尊號眞像銘文』末四丁の「またまことに尋常のときより信なからん人は日頃の稱念の功により最後臨終のとき始めて善知識の勸めによりて信心を得んとき願力に攝して往生を得るものもあるべしとなり。臨終の來迎をまつものはかくのごとくなるべし」とあるは、臨終に信の開くる人について宣ふものにて、これまた信の一念に攝取不捨の益を得、來迎までもなきことを示し給ふものである。これを要するに、眞實の不來迎といふは、來迎なくして出掛けるといふ義に非ずして、常照護念の益が臨終まで通りて往生の大益を得るものにて、この外に更に來迎を要せぬといふ意味である。この眞境に入りて始めて現在の一念に眞に安住しうるのである。

第二科 『悲華經』の文

悲華經、大施品言願、我成阿耨多羅三藐三菩提、己其餘、無量無

邊阿僧祇諸佛世界所有衆生若發阿耨多羅三藐三菩提心修諸善根欲生我界者臨終之時我當與大衆圍遶現其人前其人見我即於我前得一心歡喜以見我故離諸障礙即便捨身來生我界上已

【讀方】 悲華經の大施品にのたまはく。願はわれ阿耨多羅三藐三菩提を成ずるに、その餘の無量無邊阿僧祇の諸佛世界の所有の衆生、もし阿耨多羅三藐三菩提心をおこし、もろくの善根を修して、わが界に生ぜんとおもはんもの、臨終のとき、われまさに大衆と圍遶してその人のまへに現すべし。その人我を見て、すなはち我前にして心に歡喜をえん。我を見るを以ての故に、もろくの障礙を離れて、すなはち身をすて、我界に來生せしめん。上已

【字解】 一。悲華經 梵語 (Karunapundarikā Sūtra) 一卷。北涼の世、中印度の沙門曇無讖の譯。轉法輪品。陀羅尼品。大施品。諸菩薩本授記品。檀波羅蜜品。入定三昧門品の六品より成る。

【文科】 正依の助顯として『悲華經』の類文を引き給ふ。

【講義】 『悲化經』の大施品には左の如く説いてある。願くば我無上道心を開くであらう時には、あらゆる無量無邊阿僧祇諸佛世界の所有衆生が、無上道心を發して、諸の善根功

徳を修め、我極樂世界に往生したいと欲うならば、其人の臨終の時に、我は觀音勢至等の大衆とともに、其人を圍遶り、其人の眼前に現はれるであらう。さすれば其人が我來迎するを見て、我前に歡喜の心を起すであらう。我を見奉るが爲めに、諸の惡業煩惱の障礙を離れ、命終ると同時に穢身を捨て、我極樂世界に來り生れるであらう。

### 第二項 成就文指示

此、願成就文者即三輩文是也觀經定散九品之文是也

【讀方】 この願成就の文はすなはち三輩の文これなり。觀經の定散九品の文これなり。

【文科】 成就文をあげず、唯夫を指示し給ふ。

【講義】 上に擧げた第十九願の成就の文は『大經』下卷の初めに説いてある三輩往生の文が夫である。『觀經』で云へば定善十三觀、散善三觀の文が是に當る。即ち『觀經』一部全體に亘りて顯より見れば、この第十九願成就の文に當るのである。

### 第三項 化身土の證文

第一科 『大經』道樹講堂の文

又大經言又無量壽佛其道場樹高四百萬里其本周圍五十由旬枝葉四布二十萬里一切衆寶自然合成以月光摩尼持海輪寶衆寶之王而莊嚴之乃阿難若彼國人天見此樹者得三法忍一者音響忍二者柔順忍三者無生法忍此皆無量壽佛威神力故本願力故滿足願故明了願故堅固願故究竟願故至又講堂精舍宮殿樓觀皆七寶莊嚴自然化成復以眞珠明月摩尼衆寶以爲交露覆蓋其上內外左右有諸浴池十由旬或二十三十乃至百千由旬縱廣深淺各皆一等八功德水湛然盈滿清淨香潔味如甘露

【讀方】 又大經にのたまはく、無量壽佛のその道場樹は高四百萬里なり。そのもと周圍五十由旬なり。枝葉四に布きて二十萬里なり。一切の衆寶自然に合成せり。月光摩尼、持海輪寶、衆寶の王たるを以てしかもこれを莊嚴せり。至阿難、もし彼國の國人天、この樹を見るものは三法忍をえん。一には音響忍、二には柔順忍、三には無生法忍なり。これみな無量壽佛の威神力のゆへに、本願力のゆへに、滿足願のゆへに、明了願のゆへに、

へに、堅固願のゆへに、究竟願のゆへなり。至また講堂、精舍、宮殿、樓觀みな七寶を以て莊嚴し、自然に化成せり。また眞珠、明月摩尼、衆寶を以て交露とす。その上に覆蓋せり。内外左右にもろくの浴池あり。十由旬あるひは二十三十乃至百千由旬なり。縱廣深淺おのづかみな一等なり。八功德水湛然として盈滿せり。清淨香潔にしてあはは甘露のごとし。

【字解】 一。月光摩尼 月光と名くる摩尼寶珠のこと。摩尼は梵語(Mani)、無垢、離垢、如意珠など、譯す。龍王の腦中よりいで、衣服、飲食、財寶等を自由にいたすといふ。

二。持海輪寶 梵名、婆伽羅陀羅新迦羅々多那 (Sahasrahara-kra-nina)。この寶のいかなるものか古來知れ難しとする所である。一説に『大法炬陀羅尼經』に説ける威華寶のとであらうといふ。その説によれば、世界の最下に風輪あり、その上に火輪あり、その火輪の上に一威華寶ありて一摩尼寶の上に安住し、この二寶の威徳によりて火輪をして大地、大鐵圍山、須彌山及び大海水を燒盡さしめないのであるといふ。かやうに能く海水を持つ徳があるから、威華寶のこゝを、持海輪寶と名けるのであらうといふのである。

三。三法忍 又は三忍ともいふ。忍は忍可決定、確實に悟ること『淨影疏』には音響忍は初地より三地、柔順忍は四地より六地、無生忍は十地以上としてある。その他諸説不同である。現に角、音響忍は佛菩薩の音聲に順つて得る忍であり、柔順忍は諸法平等の理を觀じ、夫に順じて證る忍、無生法忍は諸法平等の理を體達することである。かやうな根機に應じて、忍に淺深が分れる。是が階次ある化土の相である。

【文科】 『大經』上卷の文によりて化土の相を示し給ふ。

【講義】又『大無量壽經』上卷に曰く、又無量壽佛の成道せられた道場樹は、高さ四百萬里である。其樹の根本の周圍は五十由旬もあり。枝葉は四方に布き擴がること二十萬里に及ぶ。あらゆる衆の寶が自然に集りて天功の莊嚴を極めてをる。衆寶の王たる月光珠、摩尼珠、持海輪寶のやうな寶玉が此の道場樹を鏤めてをる已上。

阿難よ、若し極樂國土に生れてある人間天上の人達が、此道場樹を見るならば、三法忍といふ三種の證りを得るであらう。一は音響忍、即ち佛菩薩の音聲によりてうる忍。二は柔順忍、諸法平等を觀じてうる忍。三は無生法忍、諸法平等の理に體達してうる忍である。是れ皆無量壽佛の果上の威神力の致す所である。この威神力は因位の本願力と相離れないから、又本願力の致す所といふべきである。此本願力の内容を開けば、あらゆる願といふ願を缺け目なく具へてゐるから満足願である。又其が明瞭してゐて虚偽を離れてあるから明了願といはれる。又如何なる煩惱と惡魔も障りとならぬ意味に於いて堅固願である。又此願は永劫の苦難にも逡巡かず、飽までも「我行精進忍終不悔」とやりおほせてあるから究竟願である。

かやうに道場樹の功德は、如來の因果力の致す所である。乃至

又講堂、精舍、宮殿、樓觀等は皆七寶をもつて莊嚴り立て、自然の天巧をもつて鏤めてある。復眞珠、明月珠、摩尼珠等の衆の寶玉をもつて交露（玉簾）を造り、それを幔幕のやうに其等の建物の上に張つて覆ひとしてある。宮殿、樓觀の内外や左右に多くの浴池がある。十由旬の大きさのもの、又は二十由旬、三十由旬、乃至百千由旬の大きなものがある。縦や廣さや深さ淺さが、其大きさに等しく四方形をなしてをる。その池には八功德水が湛へられて岸に滿ち溢れ、清淨にして底まで透き徹りて、まるで玉を溶かしたやう、香よくして味ひは甘露のやうである。

第二科 『大經』『如來會』の疑城胎宮の文

又言、其胎生者所處宮殿或百由旬或五百由旬各於其中受諸快樂如切利天上亦皆自然爾時慈氏菩薩白佛言世尊何因何緣彼國人民胎生化生佛告慈氏若有衆生以疑惑心修諸功德願生彼國不了佛智不思議智不可稱智大乘廣智無等無倫最上勝智於此諸智疑惑不信然猶信罪福修習善本願生其國此諸衆生生彼宮殿壽五百歲常不見佛不聞經法不見菩薩聲聞

聖衆、是故彼國土謂之胎生、彌勒當知彼化生者、智慧勝故其胎生者、皆無智慧、乃佛告彌勒、譬如轉輪聖王、有七寶、牢獄、種種莊嚴、張設牀帳、懸諸綵幡、若諸小王子得罪於王、輒內彼獄、中繫以金鎖、乃佛告彌勒、此諸衆生亦復如是、以疑惑佛智、故生彼宮殿、至若此衆生識其本罪、深自悔責、求離彼處、乃彌勒當知其有菩薩生疑惑者、爲失大利、抄出

【讀方】 又はいく、その胎生のものは、處するところの宮殿、あるひは百由旬あるひは五百由旬なり。各々の中にしてもろくの快樂をうくること、初利天の上のごとし。またみな自然なり。そのときに慈氏菩薩、佛にまふしてまふさく、世尊、なんの因なんの縁ありてか、彼國の人民、胎生化生なると。佛、慈氏につけたまはく、もし衆生ありて疑惑の心をもて、もろくの功徳を修して、かの國に生ぜんと願ぜん。佛智、不思議智、不可稱智、大乘廣智、無等無倫最上勝智を了せずして、この諸智において疑惑して信せず。しかもなほ罪福を信じて善本を修習して、その國に生ぜんと願ぜん。このもろくの衆生、かの宮殿に生じてのち五百歳、つれに佛をみたてまつらず、經法をきかず、菩薩聲聞聖衆をみず。このゆへにかの國土をばこれを胎生といふ。乃彌勒、まさに知るべし。かの化生の者は智慧すべたるがゆへに、その胎生の者はみな智慧なし。至佛、彌勒につけたまはく、たとへば轉輪聖王の七寶の牢獄あらんがごとし。種々に莊嚴し、牀帳を張設し、も

ろくの繒幡をかけたらん。もしもろくの小王子、罪を王に得たらんに、輒ちかの獄の中に囚れて、藥々に金鎖をもてせん。至佛、彌勒につけたまはく、このもろくの衆生、また是のごとし。佛智を疑惑するをもての故に、かの胎宮に生まれん。至もしこの衆生、その本の罪を識りて、深く自ら悔責して、かの處を離るゝことを求めん。乃彌勒、まさに知るべし。それ菩薩ありて疑惑を生ぜば、大利を失すとす。抄出 已上

【字解】 一。初利天 梵音トラーヤストリンシャーフ (Trayastisish) 三十三天と譯す。六欲天の第二。須彌山の頂にあり、城廓八萬由旬にして喜見城と名く。帝釋ここに住す。四方に峯あり、廣さ各五百由旬、各に八天あり、喜見城を加へて三十三天となる。

二。大乘廣智 佛の智慧のこと。小乘のやうに一部でなく、廣く一切の法門を智り盡す故に、大乘廣智といふ。之を妙觀察智であるといひ、又平等性智であるといふ。

三。罪福 惡業を罪といひ、善業を福といふ。惡業は必ず惡果を招いて、衆生を摧き破るから罪といひ、善業は必ず善果を招いて、衆生を富樂ならしめるから福といふ。

四。彌勒 梵音梅利耶 (Maitreya) 慈氏と譯す。釋尊滅後五十六億歳の後、閻浮提に下生成佛して、三會を開きて法輪を轉じ、說法度生したまふ佛。釋迦佛の後に此世にいて、其處を補ふべき佛であるから補處の彌勒等覺補處の菩薩ともいふ(第二卷「五二三頁に委し」)

五。轉輪聖王 梵名 阿迦羅伐鉢底羅闍 (Aksharavajris) 轉輪聖王、轉輪聖帝、略して輪王といふ。須彌四州を統御する王である。王位に即く時に感得する輪寶の種別によりて、金輪王(須彌四州を領す)銀輪

王(東南西南の三州を領す)、銅輪王(東南二州を領す)、鐵輪王(南園浮提を領す)の四別あり。輪寶を轉じて山を碎き谷を埋め、及び一切の有情を威服する故に轉輪王といふ。三十二相を具へ、人壽無量歳より八萬歳の時までにいで、其後には出世しないといふ。

六。七寶牢獄 金、銀、琉璃、頗梨、珊瑚、瑪瑙、水晶、金剛の七寶にて造りたる牢獄。

七。牀、帳 牀は寢床、帳は其寢床を覆ふ爲めに張る帳。

八。綉幡 綉に縫ひ取りした幡。

【文科】「大經」疑成胎宮の文によりて化土の相を示し給ふ。

【講義】又「大經」下卷に曰く、淨土に往生する中に胎生といふものがある。是は「正覺華化生」と異り、其居る所の宮殿は百由旬のものもあれば、又五百由旬のものもある。何れにしても其宮殿の中にありて、様々の快樂を受けることは、切利天界のやうに極めて自然である。

かやうに釋迦牟尼佛が御説きになると、彌勒菩薩が御問ひ申していふには、世尊よ、如何なる原因と助縁とありて、彼極樂國土に生れる人達の中に、胎生といふものがありまするか。佛、彌勒菩薩に仰せらるゝやうは、夫は衆生が娑婆界にある時、疑惑の心をもちながら

善い果報を求めるといふ功利的の考へから、様々の善根功德を修め、之を因として、彼極樂世界に往生しやうと願ふ爲めである。即ち眞實に佛智を信じてをらないのである。抑その佛智は凡夫聖者の智慧の及ぶ所でない不可思議の智慧、稱り知ることの出来ぬ不可稱智、大乘の見解をもつて、あらゆる俗諦萬差の事柄を知り給ふ大乘廣智、等しいものなく、倫ぶるものなき最上の勝智をいふ、其人は是等の諸智を解了らず、是等の廣大なる佛智を疑うて信せず、唯小さな凡夫の見解で因果應報を信じ、自力の小善を修して小果を獲んとし又は只管自力の善根として名號を稱へて、彼の極樂へ往生せんと願求するのである。かやうに自力の計ひを捨て佛智に溶け込むといふ自然法爾の道理を疑つてをる衆生が、彼の極樂淨土の宮殿に生れて、五百歳の間眞佛を見奉らず、即ち眞佛と一體になることが出来ず眞の經法を聞かず、眞の菩薩聲聞の方々をも見ず、唯快樂に耽りてをるばかりである。かやうに自然の大活動、大智慧を體得せず、只恍惚として母胎に處る嬰兒のやうな生活をしてをる爲めに、彼の人々の生れる國土を胎生と名けるのである。至乃

達は皆如來の智慧をもつてはをらぬのである。至乃

佛、彌勒菩薩に仰せられるやう、譬へば轉輪聖王は七寶の牢獄をもつてをる。種々に莊嚴て、光り輝く牀や帳を張設け、又様々の縫ひ取りをした幡を懸けて置くが、若し王子達が禁を破るやうなことがあると、王は直に捕へて此七寶の獄に禁固し、金の鎖をもつて繋ぐのである。至乃

佛、彌勒菩薩に告げ給ふやう、あの胎生の衆生も亦この輪王の王子のやうなもので、佛智を疑惑ひ奉つたことによりて、自業自得の道理で、極樂界中の胎宮に生れ五百歳の間精神的牢獄に禁固せられるのである。至乃されば若しこの胎生の衆生が、其根本の罪が疑惑にあることを知り、深く自ら悔いて我身の不明を責めるならば、その牢獄から免るゝことを求めるに至るであらう。至乃

夫故に彌勒よ、道を修める菩薩にして、若し疑惑を起すものがあるならば、其人は大なる利益を失ふことを知らねばならぬ。

如來會言佛告彌勒若有衆生墮於疑悔積集善根希求佛智普

徧智不思議智無等智威德智廣大智於自善根不能生信以此因緣於五百歲住宮殿中至阿逸多汝觀殊勝智者彼因廣慧力故受彼化生於蓮華中結跏趺坐汝觀下劣之輩至不能修習諸功德故無因奉事無量壽佛是諸人等皆爲昔緣疑悔所致至佛告彌勒如是如是若有隨於疑悔種種善根希求佛智乃至廣大智於自善根不能生信由開佛名起信心故雖生彼國於蓮華中不得出現彼等衆生處華胎中猶如園苑宮殿之想

【讀力】 如來會にのたまはく、佛、彌勒に告たまはく。もし衆生ありて疑悔にしたがひて善根を積集して、佛智、普徧智、不思議智、無等智、威德智、廣大智を希求せん。自の善根において信を生ずること能はず、この因緣をもて五百歳において宮殿のなかに住せん。至阿逸多、なんぢ殊勝智の者を觀するに、彼は廣慧の力に由るが故に、かの化生を蓮華の中に受て結跏趺坐せん。汝、下劣の輩を觀するに、至もろゝの功徳を修習すること能はず、かるがゆへに因なくして無量壽佛に奉事せん。このもろゝの人等はみな昔、疑悔に緣りて致すところなればなり。至佛、彌勒につげたまはく、是の如く、是の如し。もし疑悔にしたがひてもろゝの善根を種て、佛智乃至廣大智を希求することあらん。自らの善根において信を生ずることあたはず。佛の名を聞くによりて、信心を起すがゆへに、かの國に生ずといへども、蓮華の中にして出現することを得ず。かれらの

衆生華胎のなかに處すること、ななし園苑宮殿の想のごとし。要を抄す

【字解】一。阿逸多 彌勒の姓、梵語アヂタ(Ājita)。「彌勒上生經」具には「佛說觀彌勒菩薩上生兜率天經」には、彌勒、姓は阿逸多、南印度の婆羅門であつたが、兜率に生れて内院に說法しつゝあり云々とあり。二。結跏趺坐 全跏趺坐、本跏趺坐ともいふ。左の趾を右の股の上におき、右の趾を左の股の上におく坐相。

三。下劣之輩 佛智を疑惑する人、即ち自力修善の機類を指す。

【支科】『如來會』の文によりて化土の相を示し給ふ。

【講義】『無量壽如來會』に言く、佛、彌勒菩薩に告げ給ふやう、若し衆生にして疑悔の煩惱に墮ち込みながらその疑の根を切らずして、自力の善根功徳を積み集め、そして佛智即ち一切に徧滿する普徧智、不可思議の佛智、等なき智慧、威神極みなき智慧、廣く俗諦を知り給ふ廣大智を得んことを求め、又は自ら善本徳本の名號を信することが出來ないならば、この佛智疑惑の因縁によりて、五百歳の閻宮殿の中に閉ぢ込められるであらう。乃至彌勒よ、汝はあの信心の因によりて生れたる殊勝の佛智を我智慧とせる人々を観るであらうが、彼等は如來の廣大なる智慧力によりて、正覺の華の中に生れ、その中に結跏趺坐

してゐるであらう。然るに汝は又下劣の輩、即ち胎生の人達を観るであらう乃至彼等は疑惑の心をもつた爲めに、諸の功徳を修めても、それが眞の功徳とならなかつた。即ち諸の功徳を修めることが出來なかつたのである。かやうに信するといふ正因がなくして、無量壽佛に奉事き奉つたのである。是等の人達は、皆宿世に於いて佛智を疑惑した罪によりてかやうな精神的牢獄に入るに至つたのである。乃至

佛、彌勒菩薩に告げ給ふやう、實にこの通りである。若し疑惑に墮ち込みながら、諸の自力の善根を積んで、それをもつて不可思の佛智、廣大なる佛智を得んことを求めるのは天に向つて梯子を掛けるやうなものである。此人々は又善根の本たる所の名號を稱へてもその名號の眞意義を信することが出來ず、唯その佛の名號を聞くことによりて、自力の信心を起す爲めに、彼の極樂淨土に往生しても、而も如來の正覺の蓮華の中に、出現れることが出來ず、華の中に包まれて、恰も母胎に處するが如く、恢廓廣大なる樂土を知らず只華の中にありて、園苑や宮殿の中に在る心地してゐるのである。乃至

第三科 『大經』『如來會』の不可稱計の文

大經言諸小行菩薩及修習少功徳者不可稱計皆當往生



又言況餘菩薩由少善根生彼國者不可稱計上巳

【讀方】大經にのたまはく、もろくのの小行の菩薩、および少功徳を修習するもの稱計すべからず。みなまきに往生すべし。またいはく、いはんや餘の菩薩、少善根によりて彼國に生ずるもの稱計すべからず。上巳

【字解】小行菩薩、通常の解釋に依れば、十信退位の菩薩を指すのであるが、こゝでは諸行諸善を修して化土に生るゝ行者を指す。

【文科】「大經」「如來會」の文によりて化土の往生者を示し給ふ。

【講義】「大經」下卷に言く、自力の善根を修める修道者、及び自力の功徳を修習する人達は、擧げて數へることが出来ない程多いが、是等の人も彌陀の淨土へ往生するに相違ない。是れ即ち不信疑惑の往生にして、化土胎生の人達である。

又、「如來會」に仰せらるゝやう、況んや其外の修道者にして、自力の小善根をもつて彼極樂淨土へ往生する者は擧げて稱計することは出来ない程多い。是等は皆不了佛智の輩にして、宮殿に生れるのである。

第三節 釋文證

第一項 善導大師の釋文

光明寺釋云含華未出或生邊界或墮宮胎

【讀方】光明寺の釋にのたまはく、華に含れて未だ出でず。あるひは邊界に生じ、あるひは宮胎に墮す。上巳

【文科】「定善義」の文によりて化土の往生を示し給ふ。

【講義】光明寺の善導大師の『定善義』の釋に云く、或者は淨土に生れて華に含まれて未だその中を出づることが出来ないといふ説かれ、或は又或者は淨土の邊鄙邊地懈慢界に生ると云ひ、又或者は胎中の如き宮殿なる疑城胎宮に生ると貶しめて説いてある。

第二項 憬興師の釋文

憬興師云由疑佛智雖生彼國而在邊地不被聖化事若胎生宜之重捨上巳

【讀方】憬興師のいはく、佛智を疑ふによりて彼國に生れて、しかも邊地にありといへども、聖化の事を被らず。もし胎生せばよろしくこれを重く捨つべし。上巳

【文科】『述文讀』の文によりて疑心自力の往生を説きて之を誡諭し給ふ。

【講義】憬興師の著『述文讀』下に云く、不思議の佛智を疑ひ奉つた罪によりて、彼の彌陀の淨土に生れても、邊地に貶しめられて、自由無障礙なる利他の大行を預ることが出来ぬ。夫であるから若し胎生するならば、深く自ら省察して、疑惑を捨つるが宜しい。

### 第三項 源信和尚の釋文

#### 第一科 引文

首楞嚴院、要集引感禪師、釋云問菩薩處胎經、第二說、西方去此閻浮提、十二億那由他、有懈慢界、乃發意衆生欲生阿彌陀佛國、者皆深著懈慢國土、不能前進、生阿彌陀佛國、億千萬衆、時有二一人、能生阿彌陀佛國、云云、以此經、准難可得生、答群疑論、引善導和尚、前文、而釋此難、又自助成云、此經下文、言何以故、皆由懈慢、執心不牢、固是知難修之者、爲執心不牢之人、故生懈慢國也、若不雜修、專行此業、此即執心牢固、定生極樂國、乃又報淨土生者

極少化淨土中生者、不少故、經別說實不相遠也、已上略出

【讀方】首楞嚴院の要集に、感禪師の釋をひきていばく、問、菩薩處胎經の第二にとかく、西方この閻浮提をさること十二億那由他に懈慢界あり。乃至意をおこせる衆生、阿彌陀佛の國に生ぜんと欲ふもの、皆ふかく懈慢國土に著して、前で阿彌陀佛の國に生ずることあたはず。億千萬衆、ときに一人ありてよく阿彌陀佛の國に生ずと云云、この經をもて、准難するに生ずることを得べきや。答、群疑論に善導和尚のさきの文をひきて、しかもこの難を釋して又みづから助成していばく、この經の下に文にいばく、何を以ての故に、みな懈慢によりて執心牢固ならずと、こゝにしんぬ、難修のものは執心不牢の人となす。ゆへに懈慢國に生ず。もし難修せずしてもばらこの業を行せば、これすなはち執心牢固にして、さだめて極樂に生ぜん。乃また報の淨土に生ずるものは極めて少なし、化の淨土に生ずるものは少からず。かゝるがゆへに、經の別說、實に相違せざるなり。已上略抄

【字解】一、首楞嚴院 比叡山横川谷の中堂。天長六年、慈覺大師の草創。源信和尚がこゝに居られしより、今は源信和尚の別名とす。

二、感禪師釋 懷感禪師の釋、即ち『釋淨土群疑論』七卷をいふ。禪師は紀元七世紀の人。支那長安、千福寺に住せられた。初めは法相宗であつたが、後、善導大師に謁して淨土の要義に通入し、當に阿彌陀佛を念ぜられた。寂年かく。

【文科】『要集』の文によりて懈慢界を顯示し給ふ。

【講義】 横川の首楞嚴院の主、源信和尚の『往生要集』下末に、懷感禪師の『群疑論』四の釋を引いて云ふには、問ふ、『菩薩處胎經』第二に、此閻浮提を西の方へ去ること十二億那由他の佛國を過ぎて懈慢界がある。乃至初め菩提心を發して阿彌陀佛の淨土へ往生せんと欲うた者が、皆この懈慢國の快樂に耽溺つて、彌陀の淨土へ前進むことが出來ない。億千萬といふ多くの人の中に僅に一人ありて能く阿彌陀佛の極樂國土に生れると説いてある。

今この經說に依りて見るに、彌陀の淨土へ往生することは容易のことではない。この難問をどうして解釋することが出来るか。

答ふ、『群疑論』にこの文(要集)の前に引いた善導和尚の『往生禮讚』前序の文、即ち專修を捨て、雜業を修むるものは、本願に相應せないから、百人の中に希に一二の往生である等を引いて、其難問を解釋し、又感師自ら善導の釋を助釋して云ふには、此『菩薩處胎經』の次下の文には「何故に多くの願生者が此懈慢界に退墮するのかと云へば、皆が怠惰にして心に堅く執るべき善の信心が堅固でないからである。夫であるから雜修の者と云ふのは、心に確信なく牢固せない怠惰であることが知られる。夫故に此懈慢界に滯つて

彌陀の淨土に往生することが出來ないのである。されば餘の行業に心を移す所の雜修を捨て、専ら此淨土の行業を修めるならば、即ち是れ信心堅固の人で、此人ならば必ず極樂淨土に往生するに相違ないのである。乃至『同論』に眞實報土に往生する人は非常に少く、化土に往生する人は少くないのである。故に『處胎經』に億千萬の衆中僅に一人の往生を説いてあつても、別に三經の經說と衝突はせないのである。

第二科 私釋

爾者夫按楞嚴和尚解義念佛證據門中第十八願者顯開別願中之別願觀經定散諸機者勸勵極重惡人唯稱彌陀也濁世道俗善自思量己能也應知

【讀方】 しかればそれ楞嚴の和尚の解義を按ずるに、念佛證據門のなかに、第十八の願は別願のなかの別願なりと顯開したまへり。觀經の定散の諸機は、極重惡人唯稱彌陀と勸勵したまへり。濁世の道俗よく自おのれが能を思量せよ。しるべし。

【文科】 源信和尚の文によりて方便を捨て、眞實に入れと私釋を施し給ふ一段である。

【講義】 それであるから彼の楞嚴院の源信和尚の解義を考へて見るに、『往生要集』下本

念佛證據門の中に、彌陀の第十八願は別願中の別願であるといはれてある。夫は彌陀の四十八願は諸佛の通途の本願に比較して特殊の本願であるが、其四十八願の中にも第十八願は畫龍の点睛ともいふべきものにて、此願が正しく彌陀の本意を圓現はしてをるから別願中の別願であると、此願の内容を顯開されたことである。

又『觀經』に廣く説かれてある定善散善の機類は、抑も何を意味するのであるかと云へば、定善を修むることも出來ず。散善を行することも出來ずして、而も自ら是等の善を修するに價する者であると思ひ謬つてゐる極惡深重の衆生をして、是等の定散二善の試金石によりて、其無能無知を自覺せしめ、唯本願を信じ名號を稱へしめんと勸勵まして下されたものに外ならぬことである。是等の解義によりても、彼善導大師の仰せられたやうに、濁世に生れた出家の人も在家の人も、眞面目に各自の能力を反省せられよと云ふことを、よくよく考へて見なければならぬ。

【餘義】この私釋段の爾者といふは、何處を承けて來たものかといふについて古來異説があるが、『化卷』の初めから以下をすつと承けて來たものと見るが至當である。我が聖人の御覺召を伺ふに、上來説き明し來れるが如く、彌陀如來に方便の第十九願あり、釋迦如

來は『觀經』に定散兩門を開いて、諸機を化益し給うたが、これ畢竟、方便誘引の教門である。横川の源信僧都も第十八願は別願中の別願であると宣うてある。又、極重惡人無他方便唯稱彌陀得生極樂と勸め給うて在ます。されば方便要門の法に滯らず。彌陀如來の別願中の別願たる眞實弘願の法に歸命して、眞實報土に往生せねばならぬ。又『觀經』には表に定散の諸機について、定散兩善を勸めてあるけれども、實を尅すれば、すべて是れ極重の惡人である。されば彌陀の名號を稱念して淨土往生を得る外はないといふ意である。これで『化卷』始めの「是を以て稱迦牟尼佛、福德藏を顯説して、群生海を誘引し阿彌陀如來本と誓願を發して普く諸有海を化し給ふ」にかつきりと當るのである。釋迦牟尼佛福德藏を顯説し給ふも、實は極重惡人無他方便唯稱彌陀の弘願法を説かんがためであり、阿彌陀如來の誓願を發し給ふも別願中の別願第十八願を以て衆生を救はんためであるといふことになるのである。中間に引用せられてゐる經文釋文はこの證明となるのである。

別願中の別願の文は、『往生要集』下本二十念佛證據門十文の中第三文である。別願中の別願といふ意味は無論、諸佛には總願別願といふがあり、四十八願は彌陀如來の別願で

あるが、第十八願はその別願中の別願といふことである。六要鈔主はこの外に、諸善萬行の中、念佛一門を撰で取り給ふは一重の別願、念佛の中に觀念と稱念とある中、稱念を撰び給ふは二重の別願であると云ふ義を立てられた。別に差支ある義でないから二者共に依用すべきであると思ふ。

「極重惡人無他方便」の文は念佛證據門十文の中第四文である。この文は『要集』では、觀經下々品の意を述べたるものとなつてゐて、定散の諸機に冠らすべきものではないのであるが、我が聖人がこの文を引用して、『觀經』定散の諸機は極重の惡人他の方便なければ唯彌陀を稱念せねばならぬと見給ふたので、茲にも聖人の醇乎たる宗教的態度を見ることが出来る。即ち聖人から見れば、下々品の念佛はすべて定散の諸機に蒙らしむべきもので、定散の機類は一往善機と云はれるけれども、徹底的にいへばすべて極重の惡人であるといふのである。我が聖人はいつもものゝ表面を見ないで、眞を徹見し給ふのである。定散の機といふは表相である假相である。眞なる相は、本願正所被の極重惡人なのである。

### 第五章 問答廣釋

【大意】 以上化身土の略示と引文を終つたから、こゝに方便化身の眞意義を説示せんが爲めに、問答を設け、釋文を引いて、廣釋せらる。

第一節に大觀兩經の相違を融會せんが爲めに第一項第二項に亘りて隱顯の釋義を施し、第三項には廣く善導師の釋文を引用して是を證明し、更に曇鸞道綽の祖文を引いて之を釋成せられた。

第二節には、進んで三經に亘りて論じ、第一項に三經隱顯、第二項に『觀經』隱顯を釋し、第三項に廣く機相を述べ、引文し文釋し給ふ。

第三節には聖淨二門を對論し、第一項聖道門、第二第三項に亘りて淨土門を詳釋し、所行の體として横出横超を述べ、能行の相として雜行、助正等を釋成せらる。

第四節には、大觀兩經を結釋し。

第五節には、三經の相違を融會せんが爲めに問答を設け、第一項は問、第二項は其方便相を總答し、第三項には隱顯義を別答して、細に三科に亘りて釋成し、第四項には三經一致を結釋し給ふ。重さ千鈞である。

### 第一節 大觀兩經の融會

### 第一項 問

問大本三心與觀經三心一異云何

【讀方】 問、大本の三心と觀經の三心と一異いかんぞ。

【文科】 初めて大觀兩經の異同を問ふ。

【講義】 問ふ、『大經』に説かれてある至心、信樂、欲生の三心と『觀經』に説かれてある至誠心、深心、廻向發願心の三心とは、同一であるか、又は異つてゐるのであるか。

### 第二項 隱顯略答

#### 第一科 標舉

答依釋家之意按無量壽佛觀經三者有顯彰隱密義

【讀方】 答、釋家の意によりて無量壽佛觀經を按ずれば、顯彰隱密の義あり。

【文科】 上の問に對して『觀經』に隱顯あるを標舉せらる。

【講義】 答ふ、『無量壽佛觀經』を解釋せられた善導大師の御意見に依りて本經を考へ

て見るに、本經には顯の義と彰隱密の義の二面の意義がある。即ち一文に表裏の二義があるのである。彰は蔭から顯はすこと、隱は顯に對して文の幽意を示し、密は如來の密義のこと。三字熟して顯義に對す。即ち經文の裏面を流ること、大地を流るゝ水の如くに、不盡の法水を送らせてゐるといふのである。

#### 第二科 隱顯釋義

言顯者即顯定散諸善開三輩三心然二善三福非報土真因諸機三心自利各別而非利他一心如來異方便忻慕淨土善根是此經之意即是顯義也

言彰者彰如來弘願演暢利他通入一心緣達多闍世惡逆彰釋迦微咲素懷因章提別選正意開闡彌陀大悲本願斯乃此經隱彰義也

【讀方】 顯といふはすなはち定散諸善をあらはし。三輩三心をひらく。しかるに二善三福は報土の真因にあらず。諸機の三心は自利各別にしてしかも利他の一心にあらず。如來の異方便忻慕淨土の善根なり。これはこの經のこゝろなり。すなはちこれ顯の義なり。

彰といふは如來の弘願をあらはし、利他通入の一心を演暢す。遠多聞世の惡逆によりて、釋迦、微咲の業懷をあらはし、章提、別選の正意によりて、彌陀大悲の本願を開闡す。これすなはちこの經の隱彰の義なり。

【字解】一。三輩 「大經」下卷に説かれたる三種の往生者。上輩、中輩、下輩。これは定散諸機各別の勝劣を示すものである。この三輩の各々を更に三等に分つたものが「觀經」の散善九品の機類である。

【文科】 廣く「觀經」の隱彰を釋成し給ふ一段。

【講義】 其中經の顯の義といふは、行の方面から云へば定善、散善の諸善萬行を顯はしであり、信の方面から云へば、上中下の三輩の機類に通ずる自力の三心を開説してあるのが夫である。「觀經」一部を表面から見れば、この自力の信行の外はない。然るに定善散善の二善、そして其中の散善の内容たる三福九品の善根は、眞實報土に往生する眞因ではない。是等定散諸善を修める機類は、夫々根機が様々に分れてをるから、其起す所の三心も各自の能力に應じて異つてゐる自力の三心であつて、如來廻向の絕對他力の一心でない。相對有限の信である。即ち如來が特に方便を垂れ給ひて、自力修善に係つてゐる人々をして、淨土を忻慕せしめ給ふ方便の善根に過ぎないのである。されば本經一部の顯説は、他力の三心に引入せしめんが爲めの方便たる定散二善であることが知られるのである。

經の隱彰といふは、本經は大經と同じく阿彌陀如來の第十八願の正意を彰はし、人々をして他力廻向の一心に通入せしむることを演暢されたもので、諸機各別の三心ではなくして、如來廻向の一心を開説せられた經典であるといふのである。

即ち提婆達多の教團に對する反逆、阿闍世太子の父王に對する惡逆が興法の縁となりて釋尊は始めて出世の本懷を説くべき時期至れりと満足の微笑を彰はし給ひ、又我子の惡逆によりて圍圍に幽閉せられた章提希夫人は、之が求道の動機となりて釋尊の説法を冀ひ奉り、遂に如來の威神力によりて、廣大なる諸佛の國々の中より、特に安樂世界を選ぶに至つたことが正因となりて、彌陀如來のやるせなき大悲の本願が、本經に於いて開説せらるゝに至つたのである。此が本經の隱彰の實義である。

【餘義】 一。曾て述べたるが如く「教行信證」六軸は「淨土三部經」の註釋書である。「三部經」の深旨を開説して、他力本願を讃仰する書である。然らばその「三部經」は要として何を説き明す經典であるか。

いふまでもなく、弘願一乘法を宣説するものである。それ故、我祖は「信卷」別序に「廣く三經の光澤を蒙つて特に一心の華文を開く」と宣うた。「信卷」に於て、既に充分「大經」

の眞意を開詮し給うた我が聖人は、茲に至つて、『觀經』の中心思想を闡明し、自己の信仰を披瀝し給はねばならぬ。況んや當『化卷』に來つて、次上の結釋に於て、第十八願を別願中の別願と讃仰し、『大經』所説の彌陀如來の眞實法を示し給へることなれば、是非進んで『觀經』の眞意を説き給はねばならぬ。且つ『觀經』は第十九願開説の經典にして、一見『大經』と法門を異にするものであるから、茲に問答を設けて、大觀二經の同異如何を研盡し給ふのである。

茲に注意すべきことは、この大切なる問答が、その端緒を信に開いてゐることである。

『大經』の三信と『觀經』の三心と一異如何と問題を起して、『觀經』の潜在的精神を説明し、『觀經』の見方を一變せしめ給ふことである。この大切なる問題を信に起し給ふあたりが、最も宗教的なる所以で、我々の一番味はねばならぬ點である。『化卷』九十六及び『略文類』丁十六には

三經の大綱、顯彰隱密の義ありと雖も、信心を彰して能入となす

と宣うた。信は宗教の眼睛で、宗教の死活は一にこの信にかゝつてゐるからである。

扱て、茲に問答を設けて『觀經』の精神を研べられた結果はどうなつたか。『觀經』には

隱顯の二面あつて、もし顯の義に依れば、定散二善三輩三心を説く經典にて、『大經』と眞假の差別をなすけれども、もし、隱彰の意を開けば、弘願他力を宣説する經典にて、『大經』と全く同一であるといふ結論に達したのである。

二。然らばその隱顯といふはいかなることか。この隱顯の見方は誰が始めてあるか。以下このことに關する事項を少しく研究して見やう。

隱顯の意味を了解するには、廢立といふ名目の意味と合せ味ふ時にはつきりするものである。

廢立といふことは、一經典の中に二法を並べ説いてその一法を貶し捨て、他の一法を取り立てることである。隱顯といふことは、一經典に全く一法しか説いてないが、その一法が、顯面には堂々と顯了に説いてあるに拘らず、裏から返して見ると全く別種の法となつてゐることである。喩へば「田舎は厭だ東京は善い」といへば廢立の説法であり、親が子供を叱る時に「お前は悪い奴だ」といふ語は表面から見れば悪々しいが裏から見れば涙のこもつた慈愛の語であるから隱顯の説法である。

今經典の上で云うて見ると、『大經』の三輩段には、出家するとか戒律を持つとか、寺塔



を建てるとかいふ諸功德の修行と、一向専念無量壽佛の念佛とが並べ説いてある。これを元祖法然上人は、『選擇集』の三輩章に、

諸行を廢して念佛に歸せしめんがために、而も諸行を説く

とか、また、

諸行は廢のために説く、念佛は立のために説く

とも解釋なされた。これはもとをいへば、善導大師の『觀經疏』の釋相から窺がつて申されたのであるが、これが廢立である。

次に隱顯の義はどうかといふに、『觀經』は一部全體定散二善十六觀法を顯了に説いた經典であるが、而も、これを裏から見ると、釋尊教主の意、全く他力弘願の法を説くにあつて、『觀經』一部全體彌陀如來の弘願を彰してある。それで『觀經』は一經兩義の經典であつて、表には定散一善を説き、裏には他力弘願を説いてあるのである。これが隱顯の説法である。

三。これで廢立と隱顯との名目の意義は明になつたことと信するが、茲に問題が起る。元祖法然上人は『觀經』一經を廢立の經説と見てゐられる。善導大師の『觀經疏』も廢立

善導元祖  
と我聖人  
の見解

で見得るらしい。何故なら善導大師は『散善義』に

上より來、定散兩門の益を説と雖も、佛の本願に望むれば、意、衆生をして一向に専ら彌陀佛名を稱せしむるにあり。

と申されてある。これは『觀經』の正宗分に、定散二善を説いてあるのに、流通分に至つて「この語を持つてといふは、無量壽佛の名を持つてとなり」と稱南無阿彌陀佛の一法を讚へてある所から見込まれた解釋で、法然上人は正しくこの解釋に依つて、定散諸善は廢のために説き、念佛は立のために説くと斷定せられたのである。然る時は、善導法然兩祖は『觀經』を廢立の説法と見てゐられるに對して、我聖人は何故にこの解釋を捨て、隱顯の説法といふ異説を立てられたのであるか。

この問題は頗る興味ある問題であつて、私共から見ると、茲に我が聖人の上に一段の進歩があることを認め得るのである。この『觀經』に對する善導法然兩祖と、我が聖人の態度はいつも出て來る例の兩祖が願に眞假を立てず一願建立門で行かれるから、第十九願の臨終現前の益も第十八願念佛所得の利益とせられる如く、『觀經』を以て第十九願開設の經と見ず、從つて、『觀經』一部、念佛の勝れたるを顯はさんがために諸行を説いて而もこれ

を廢し、念佛を立てたる經典と見られ、我が聖人は、五願別開して、願に眞假を立てられるから『觀經』は表面飽くまでも第十九願開説の方便經であつて、而も、その裏面を探ぐれば、方便經その儘大悲眞實の弘願法を説く經典と見給うたものである。

然しかくはいふもの、善導大師に全く隱顯釋がなかつたのではない。我が聖人も、この隱顯の釋をなされるに就いて、「釋家(善導)の意に依つて無量壽佛觀經を按ずれば顯彰隱密の義あり」と宣ひ、善導大師は諸師に對する對抗の必要上、釋し振りの當相では、廢立釋に出で、隨所の文に隱彰の實義を開いて佛の正意稱南無阿彌陀佛にあるを顯はし、定散二善は弘願に通入の方便にして、定善は以て念佛三昧に入るを益とし、散善九品は善惡の機品を示して、九品共に一念佛に歸入すべきを教ゆるものと解釋なされたのである。何故なれば諸師は『觀經』の顯文に執着して定散の二善に惑うてゐるから、大師その諸師の執着する顯文その儘を取つて、見よかくの如く弘願他力の意が説かれてあるでないかと教へ給ふたのである。然し大師の解釋の意底を探ぐる時には、隱顯釋に依り給ひ、『觀經』の當相を第十九願開説の經とし、定散にもそれく得益あり、下々品の念佛も萬行隨一の念佛にして、法然上人の所謂諸行の分齋にあるもの、『觀經』一經顯文に依ればすべて定散

教、その裏をくれば、一經の始終隱には弘願念佛を説くものとなし給ふたのである。大師はこれを流通の念佛付屬の文から振り返つて見給うたのである。それで大師の釋文の中には、同一の文を要門に依つて釋し、弘願に依つて釋し、一文兩義の釋文があるのである。古來これを善導大師の釋相廢立、釋意隱顯といふてゐる。我が聖人は、この大師の釋意隱顯に依つて『觀經』の隱顯釋を立て給ふたから、今茲に「釋家の意に依つて」と宣うたのである。然しかく大師の微意を探ぐり知り給ふたは我が聖人の卓見であつて、明白に隱顯を以て『觀經』を釋し給うたも我が祖聖人を以て始めとするから、廢立釋から出で、隱顯釋に入り『觀經』に一段の精彩を加へ給うた功は當然我が祖のものである。隱顯釋は實に他宗に談せざる淨土眞宗獨特の深妙の解釋法である。

三。こういふ具合に『觀經』に隱顯釋を加へ給うたは、我が聖人の功であるが、こういふ解釋の類例は外にもある。一例を舉ぐれば、『俱舍』の頌に顯密兩宗を立て、顯には有部宗の宗義を明し、隱密には經量部の宗義を主とするといふが如き、又密家に於て淺略、深秘の兩釋を用ゆるが如きはこの隱顯に近き釋體である。

隱顯の二字は『散善義』の後序其他に出でゐるが、こういふ穿鑿は無用である。

隠顯の義據も、古來、『玄義分』序題門の「娑婆の化主その請に因るが故に、即ち廣く淨土の要門を開き、安樂の能人は別意の弘願を顯彰す」といふ文、及び同宗旨門の「今此の『觀經』は即ち觀佛三昧を以て宗と爲す、亦た念佛三昧を以て宗と爲す」といふ文であるといふてゐる。勿論これらの文は、我が聖人がこの隠顯釋の下に引用し給うてゐる所から見れば、聖人の眼光を鋭からしめたものではあるが、前にもいふ通り、聖人は深く善導大師の解釋の意底を徹見し給うたので、何の文に依り給うたなどいふことは必要のないことと思ふ。

四。次にこの隠彰顯密の四字を解するに異説がある。一二を擧ぐると、(一)には、顯彰隱密の四字を分つて三義とする。謂く顯の義、彰の義、隱密の義である。顯は文面に分明に顯はれてゐること、彰とは錐が袋を破つてその鋭先を見せてゐる如く、雲に隠るゝ龍が爪牙をちら／＼雲の間から出してゐるやうな事、隱密は錐の體、龍體が隠れて表面に見えないことを解するのである。これに更に隱密の二字を分けて解するものもある。その時は、密は隱す意志といふ風に見えるのである。即ち雲間の龍といふ一軸の畫にして見ると、雲は顯である、彰は雲間にちら／＼見える頭面爪牙である。隱は隠るゝ體である。密は畫

工の意匠であるといふ風に見るのである。これは西派にて多く依用する説である。(二)は大まかに顯と彰隱密との二つに解釋するので、顯は文面顯了に顯はれてゐること、彰隱密は隱微に著はるゝ義で、親が子供を叱る時に、その惡々しげな語の中に、何處となく慈愛が溢れて見ゆることである。これは重に東派にて依用する説である。私共は大ざつばな二分解釋法が何となく床しいやうに思はれる。

五。扱て、もとへもどつて、この隠顯の解釋は『三部經』全體に通ずるかといふに、『觀經』にこうして明かにこの隠顯の兩義があり、『阿彌陀經』もこの『觀經』に準じて見ると隠顯の兩面があるが、『大經』は純粹な眞實教であるから、隠顯の兩面がない。勿論先きにも出せし如く、三輩段の如き、諸功德の修行は説いてあるが、これは所廢のための所説で、廢立こそあれ、隠顯はない。全く弘願他力の眞實法である。然らば『化卷』九、『略本』に「三經の大綱、顯彰隱密の義ありと雖も、信心を彰して能入となす」といひ、『御傳鈔』下巻平太郎の段に「すなはち『三經』に隠顯ありと雖も、文といひ義といひ、ともに明なるをや」とありて、『大經』にも隠顯あるらしいのはどうかといふに、これは『三經』を大體の上からいつたので、細かにいへば『觀經』と『小經』に隠顯があるといふのである。

猶この隱顯については、細かく面倒な議論もあるけれども、筋道だけは以上で盡きてゐると信ずるから、煩しい議論は一切省いて仕舞うたのである。

是以經言教我觀於清淨業處、言清淨業處者則是本願成就、報土也、言教我思惟者即方便也、言教我正受者即金剛真心也、言諦觀彼國淨業成者、應觀知本願成就、盡十方無礙光如來也、言廣說衆譬、則十三觀是也、言汝是凡夫心想羸劣、則是彰爲惡人往生機也、言諸佛如來有異方便、則是定散諸善顯爲方便之教也、言以佛力故見彼國土、斯乃顯他力之意也、言若佛滅後諸衆生等、即是未來衆生顯爲往生正機也、言若有合者名爲羸想、是顯定觀難成也、言於現身中得念佛三昧、即是顯定觀成就之益、以獲念佛三昧爲觀、益即以觀門爲方便之教也、言發三種心即便往生、又言復有三種衆生當得往生、依此等文、就三輩有三種三心、復有二種往生。

【讀經】こゝを以て經には教我觀於清淨業處といへり。清淨業處といふは、すなはちこれ本願成就の報土なり。教我思惟といふは、すなはち方便なり。教我正受といふは、すなはち金剛の真心なり。諦觀彼國淨業成者といへり。本願成就の盡十方無礙光如來を觀知すべしとなり。廣說衆譬といへり。すなはち十三觀これなり。汝是凡夫心想羸劣といへり。すなはちこれ惡人往生の機たるをあらはす。諸佛如來有異方便といへり。すなはちこれ定散の諸善は、方便の教たることをあらはす。以佛力故見彼國土といへり。これすなはち他力の意をあらはす。若佛滅後諸衆生等といへり。すなはちこれ未來の衆生往生の正機たることをあらはす。若有合者名爲羸想といへり。これ定觀成じがたきことをあらはす。於現身中得念佛三昧といへり。すなはちこれ定觀成就の益は、念佛三昧なるをもて觀の益とすることをあらはす。すなはち觀門をもて方便の教とせるなり。發三種心即便往生といへり。また復有三種衆生當得往生といへり。これらの文によるに、三輩について三種の三心あり。また二種の往生あり。

【字解】一。十三觀 「觀經」に説かれたる定善十三觀をいふ。日想觀、水想觀、地想觀、寶樹觀、寶池觀、寶樓觀、華座觀、像觀、眞身觀、觀音觀、勢至觀、普觀、雜想觀。

二。三種心 「觀經」の三心。至誠心、深心、廻向發願心。

【文科】「觀經」の隱影を證明せんが爲め要文を擧げて其意義を述べ給ふ一段。

【講義】 夫故に 上述の義を證據立る爲めに、左に經文を引いて、其意義を解釋するで

あらう。

韋提希夫人が、「我に清淨業處を觀せ教めたまへ」といふたが、其清淨業處といふのは、彌陀の本願によりて成就つた眞實報土のことである。韋提は實に眞實報土に往生することを願うたのである。

次に「我に思惟を教へたまへ」と申したのは即ち方便である。思惟は定善十三觀である。釋尊此願ひによりて定善を説かれたのである。

「我に正受を教へたまへ」は他力金剛の信心である。即ち正しく金剛心を獲得することを教へ玉へといふことである。

「諦に彼國の淨業成じたまへるを觀すべし」とは、因位の誓願によりて成就したまへる盡十方無礙光如來を觀せよといふことである。即ち彌陀如來を信じ奉れといふことである。

「廣く衆々の譬を説かん」といふのは、定善十三觀の方便説を指す。

「汝は是れ凡夫、心想羸劣」といふは、本願の目的たる惡人往生の實機を示されたものである。即ち韋提一人を指されたのではなく、廣く本願の正機たる一切衆生そのものを示さ

れたものである。

「諸佛如來は異の方便あり」といふは、定散二善は眞實信心に入らしむるの方便教であることを顯開されたものである。

「佛力を以ての故に、彼國土を見る」といふは、如來の他力を顯はしてゐるのである。

「若し佛滅後の諸の衆生等」と韋提の申し上げたことは、即ち未來濁惡の衆生が、淨土往生の正機であることを顯はされたものである。

以上は序分であるが、進んで正宗分の第八像觀の終りの文「若合する有れば名けて羸想と爲す」とあるは、定善の觀法の成じ難いことを示されたものである。即ち行者が觀法の際、定中に聞く所の妙法が、出定後、經説に合はなければ妄想であるし、合つても龜想をもつて極樂を見るに過ぎないといふのであるから、之によりても定善の觀法の困難なることが知られる譯である。

尙ほ第八像觀の次の文に「現身中に念佛三昧を得」といふのは、定善の觀法が成就したら如何なる利益を得るかと云へば、畢竟念佛三昧を得るの益に外ならぬことを示されたものである。

更に散善の下、上品上生の初めに「三種の心を發せば即便往生す」とある文、並に「復三種の衆生ありて、當に往生を得べし」等の文に依りて考ふるに、散善の上中下三輩の機即ち九品の機類に通じて、三種の三心、即ち定善の三心、散善の三心、弘願他力の三心があることが解る。そして復其往生にも三種ありて、定散二種の三心を起す人は便往生即ち化士の往生であり、弘願他力の三心を發す人は、即往生すなはち眞實報土の往生であることが知られるのである。

【餘義】一。茲に『觀經』の顯彰隱密の義をあらはすに當り、『觀經』の序分から九文、正宗分から四文、合せて十三文を引用し給ふ。前にもいふ通り、隱顯釋は一經に兩面を見るものにて、一面よりすれば、第十九願開説の定散教となり、一面よりすれば純他力弘願教となるのである。既に一經全體兩義となるのであるから、文々も亦兩義の隱顯となるのである。即ち茲に引用せられた十三文は顯文の當相は定散教に關し、その隠れたる處に弘願の意を闡明してゐるのである。

- (一) 清淨業處。顯には諸佛の淨土、隱には彌陀の淨土。
- (二) 教我思惟。思惟は顯には定善十三觀に入る方便、隱には淨土方便の修行、即ち定

散二善。

- (三) 教我正受。正受は顯には定善十三觀、隱には他力金剛の信心。
- (四) 諦觀彼國淨業成者。顯には淨土の依正二報を觀すること、隱には本願成就の彌陀如來を觀知すること。
- (五) 廣説衆譬。顯には定善十三觀のこと、隱にはその十三觀の弘願の方便たる意味を顯はす。
- (六) 汝是凡夫心想羸劣。顯には韋提夫人が定善の觀法に堪へざる機根なること、隱には惡人が本願正所被の機たることを示す。
- (七) 諸佛方便有異方便。顯文からいふと、定善の觀門が極樂淨土を見る方便たることを示し、隱からいふと、廣く定散の諸善が弘願に通入する方便なること。
- (八) 以佛力故見彼國土。顯文でいふと、釋尊の力に依つて光臺に淨土を見ること、隱からいふと、彌陀の佛力に依つて淨土に往生して彼の國土を見ること。
- (九) 若佛滅後諸衆生等。顯文では、韋提夫人が未來の衆生のために安樂淨土を觀する法を教へ給へと願ふこととなり、隱相では、未來の衆生が往生の正機なるを示す。

(一〇) 若有合者名爲麤相。顯では所觀の境が經說に合すれば麤相と名くるといふ義(像觀は假觀であるから麤觀といふ)にして、隱では定觀の成し難きことを示すもの。

(一一) 於現身中得念佛三昧。顯文では像觀成就すれば、現身に眞身觀の利益を獲ること、從つて、念佛三昧といふは觀佛三昧となるのである。隱では定觀成就して得る益は口稱の念佛三昧なることを示すこととなる。

(一二) 發三種心即便往生。顯文では至誠心等の自利の三心を發せばすなはち往生を得るといふ。隱では利他の三信を發せば報土往生を得るといふ。

(一三) 復有三種衆生當得往生。顯文でいふと三種衆生といふは、慈心不殺等、讀誦大乘、修行六念の三種にて、隱では定機と散機と利他一乘の機の三種の衆生のことである。それで前の文と今の文とを合せて見ると、三種の衆生に三種の三心(自力(定と散)と他力)があり。從つて即往生と便往生と當得往生の三種の往生があるといふことになるのである。

茲に注意すべきことは、この即便往生は即往生便往生の二種をわから給ふ語據であるけれども、我が祖は、この文から直に、二往生を開き給うたものではない。前に述べたる

如く『觀經』は一經全體隱顯の二義にわかれ、從つて一文一句にも隱顯の二義あるからこの即便往生も、顯の義に依れば、即便の二字共に化土の往生となり、隱の義から見れば、二字共に報土の往生となるのである。たゞ我祖は、この『觀經』の即便往生の語を『大經』に對照し、十八願成就の眞土の往生には即得往生の語あり。十九願成就の化土の往生には便於七寶華中自然化生の語あるところから、二種の往生をひらき給うたものである。

第三科 結文

良知此乃此經有顯彰隱密之義二經三心將談一異應善思量也大經觀經依顯義一異依彰義一也可知

【讀方】 良に知りぬ、これいましこの經に顯彰隱密の義あることを。二經の三心まさに一異を談せんとす。よく思量すべきなり。大經觀經、顯の義によれば異なり。彰の義によれば一なり。しるべし。

【文科】 隱顯の結釋。

【講義】 以上の文證に依りて見れば、此『觀經』には顯說と彰隱密說の二義あることが、明に知られることである。問ひに應じて斯の如く大觀二經の三心の同不同を辨じたいものであるが、此處をどうぞ間違はずに思量へて頂きたい。即ち『大經』『觀經』は、顯の義

に依れば眞實と方便に分れてをるが、彰の義によれば兩經ともに弘願眞實の一法を明してゐるのである。

### 第三項 引文

#### 第一科 善導大師の釋文

爾者光明寺和尚云然娑婆化主因其請故即廣開淨土之要門。安樂能人顯彰別意之弘願其要門者即此觀經定散二門是也。定即息慮以凝心散即廢惡以修善廻此二行求願往生也言弘願者如三大經說。

【讀方】 しかれば光明寺の和尚のたまはく、しかるに娑婆の化主、その請によるが故に、即ちひろく淨土の要門をひらき、安樂の能人、別意の弘願を顯彰す。その要門といふは、すなはちこの觀經の定散二門、これなり。定はすなはち慮をやめてもて心を凝す。散はすなはち惡を廢してもて善を修す。この二行を廻して往生を求願せよとなり。弘願といふは大經の說のごとし。

【字解】 一。娑婆化主。娑婆世界の教化主。大聖釋尊のこと。

二。安樂能人。安樂淨土に在して、能く衆生を教化する能力ある人の義。即ち阿彌陀如來を指す。

【文科】 『玄義分』序題門の文によりて淨土の要門弘願を明し給ふ。

【講義】 されば光明寺の和尚善導大師は、『玄義分』の序題門に、然るに娑婆世界の教化主釋尊は、韋提希夫人の請願を因縁として、廣く弘願他力の方便門たる淨土の要門を開説したまひ、安樂淨土の能人（自在人）即ち彌陀如來は、定散二善の外なる弘願他力の三心を顯彰はされた。

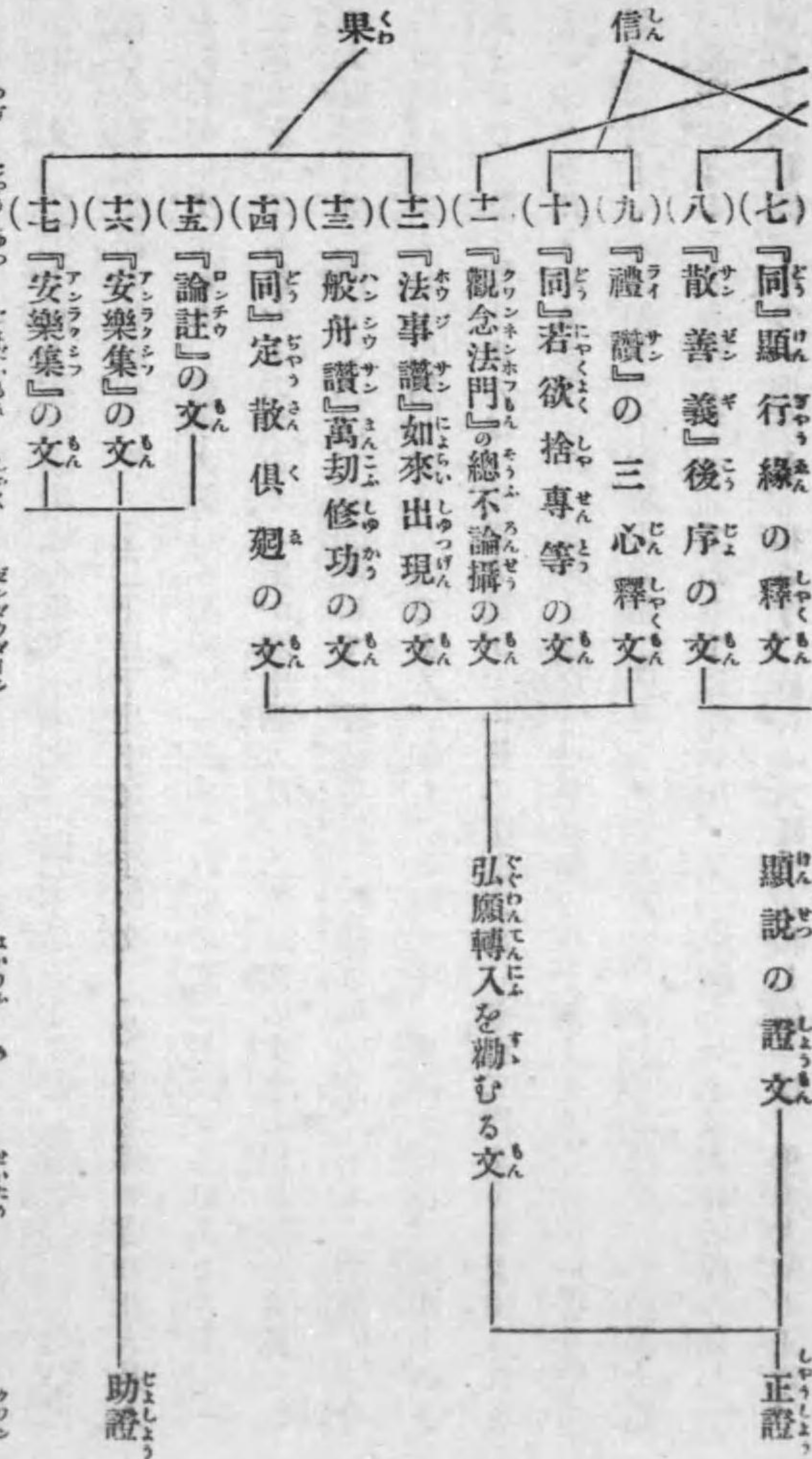
かやうに本經には一文兩義を含んでゐるのであるが、其中要門といふのは、定善散善の二門を指す。定といふのは、危難な思慮分別をやめて、心を一つに專注することにて、坐禪觀法等が夫である。散はかやうに冥想思惟等は出来ないが、その散亂の心をもつて惡を廢めて善を修めることをいふ。此等二種の行によりて得たる功德善根を廻向して、往生を求願ふものを要門と名ける。

弘願といふのは、大經に説いてある通りで、即ち第十八願の他力の信行を指すのみであるが、是は本經にありては、隱彰の實義である。

【餘義】 一。上に『觀經』の中から、十三文を引いて、『觀經』に隱顯あることを證した



つたから、今次いで、善導、曇鸞、道綽の三祖の釋文十七を引き、『觀經』に隱顯兩面を見しは、善導大師より相承したる旨を顯はし給ふのである。それで善導大師の釋文十四は正證にして、曇鸞、道綽兩師の三釋文は助證である。それ故に善導、曇鸞、道綽の順序で引用し給うたのである。善導大師の十四の釋文の中、本疏の文八、具疏の文六あり、本疏の八文中、初の三文は正しく隱顯の證にて、餘の二十六文は顯說の證、具疏の六文は、弘願に轉入せしめんため結勸の意にて引用し給ふのである。かくこの光明大師の十四文を以て『觀經』に隱顯兩面あることを證しなから、猶これに加へて、この十四文を以て要門方便の四法を示し給ふのである。便宜のため、これを圖示すれば。



二。次に上出の序題文の釋は、善導大師にありては、廢立に見るが正當であつて、『觀經』一經の上に廢立のために、要弘二門の説かれあるを釋された文である。即ち釋迦如來は韋提夫人の請に依りて、定善を説き、更に散善一門を説き給うた、この定散二法門を今

茲に「娑婆化主廣開淨土之要門」といひ、一經の隨所に弘願法の散說せられてゐるのを、  
 「安樂能人顯彰別意之弘願」と云はれたものである。この弘願の顯彰せられてゐる文は、『漢  
 語燈錄』二廿三には七文拾うてある。(一)第九觀光明遍照の文、(二)十二觀無量壽佛化  
 身無數の文、(三)下品上生智者復教合掌叉手の文、(四)下品上生化佛稱讚行者の文、(五)  
 下品中生聽聞彌陀功德往生の文、(六)下品下生十念往生の文、(七)若念佛者當知此人是人  
 中分陀利華の文である。善導大師は『觀經』一部中これらの文の散說せられるを見、一  
 經に廢立を立てられたものである。處が我祖聖人は、この一文の文字の用ひ方から見、  
 善導大師の要弘二門といふは、隱顯說にて、顯說要門、隱說弘願の意であると看破し、今  
 茲に隱顯の證文として引用し給うたのである。即ちこの釋文中、廣開といひ、顯彰といひ  
 即此といひ、如大經とあるは、善導大師が、一經の隱顯方面に要弘二門ありと見給うたも  
 のといふべきだといふのである。廣開と顯彰とは猶適切の度を缺くから今説明の勞を取ら  
 ぬが、「要門といふは即ち此の觀經の定散二門是也」の用語は、正しく『觀經』の顯說全體  
 が、要門法なることを宣ふを示してゐるではないか。又「弘願といふは大經の説の如し」  
 といつて、『觀經』中の一個所をも指さず。直に『大經』を指し給うは、善導大師の正意、

『觀經』の一部顯說是要門法にして、隱說に弘願法ありと見給うにあること明かではないか。  
 弘願は『大經』に顯了に説いてあれども、『觀經』には表面に説いてないから『大經』の説  
 の如し」と譲り給うたのである。これが善導大師の釋相廢立、釋意隱顯たることを見込む  
 根據となるのである。それでこの釋文は正しく隱顯の證文となるのである。

又云、今此、觀經、即以觀佛三昧爲宗、亦以念佛三昧爲宗、一心廻  
 願往生淨土爲體、言教之大小者、問曰、此經二藏之中、何藏攝二  
 教之中、何教收答曰、今此觀經、菩薩藏收頓教攝。

【讀方】 又のたまはく、いまこの觀經はすなはち觀佛三昧をもて宗とす。また念佛三昧を宗とす。一心に  
 廻願して、淨土に往生するを體とす。教の大小と云ふは、問ていはく、この經は二藏の中にはいづれの藏に  
 か攝する。二教の中にはいづれの教にかをさむるや。答へていはく、いまこの觀經は菩薩藏にをさむ。頓教の  
 攝なり。

【字解】 一。菩薩藏 二藏の一。聲聞藏の對。大乘菩薩の修因證果の法を教ふる教の稱。  
 二。頓教 二教の一。漸教の對。修行の階級を経ずして速に證果をうる教。利益を受くることの速が

なる方面よりいふ。

【文科】『玄義分』宗旨門の文によりて念觀兩宗を明し給ふ。

【講義】又『玄義分』に曰く、今此『觀經』は、定善觀たる觀佛三昧をもつて宗要とする。即ち教説の如く心を一つにして阿彌陀佛を觀するの骨目である。是は顯説の上であるが、隱彰から云へば念佛三昧を宗要とする。即ち他力の信心不離の稱名をもつて一經の骨目とするのである。

そして一心に廻向發願して淨土に往生することが一經の主質である。かやうに念觀兩宗は一心廻願往生淨土の一到に結歸するのであるが、是にも其内容は二種あることは明かなことである。即ち一心廻願は觀佛に對しては自力の願生心、念佛に對しては他力廻向の願生心であり、又往生淨土は、觀佛には化土、念佛には報土である。

次に此『觀經』は大小乗の何れであるかといふに就いて問を起していふ、此經は聲聞藏菩薩藏の二藏の中には何の教説に攝するか、頓教、漸教の二教の中には何れに收められるか。答ふ、今この『觀經』は、大乘菩薩藏の中に收められ、そして二教の中では、頓極頓速の教であるから頓教に收められるのである。

【餘義】一。この念觀兩宗の文も、釋相から見れば、廢立にて、釋意から見れば隱顯となるのである。

即ち釋相から見れば、觀佛三昧、念佛三昧共に『觀經』の顯文に依つて立つるところにて、觀佛三昧は要門定散の法、念佛三昧は弘願の法である。觀佛といふは無量壽佛を觀することにて『觀經』一部に廣く説かれたる定散十六觀を攝するのである。この中定善十三觀は正觀、散善九品は相從して觀と名けるのである。次に念佛といふは『觀經』の顯説に顯はれたる念佛である。かく善導大師が、一經に兩宗あるを見給うたのは、流通の文に、一方には「此經名觀無量壽佛觀世音菩薩大勢至菩薩」とあり、一方には「若念佛者當知之人是人中芬陀利華」とあるより、この流通を一經正宗分に冠らしめて一經兩宗ありと判せられたのである。

次に釋意から見て行く時には、隱顯の一經兩宗となる。我が聖人の今茲に御引用なされたはこの見方であつて、この時には、觀佛三昧は顯説の方便、念佛三昧は隱彰の實義である。この觀佛三昧といふ中には、廣く定散十六觀を攝し、下々品の稱名までもこの中に收めるのである。故に經文には下下品の最後に「是名下輩生想名第十六觀」と結んであ

る。一生造惡の凡夫、十聲の稱名に依つて往生を得る想(觀想)をなすが、觀佛の相である。隱彰の實義たる念佛三昧が弘願他力の念佛たるはいふまでもないことである。然らばかく善導大師の釋意が隱顯の兩宗にあるは、いかにして知ることを得るかといふに、これもこの一文中の文字の使ひ方に依つてその一端が知れる。即ち、茲に兩三昧を擧ぐるに就いて、即ち觀佛三昧を以て宗となす。亦念佛三昧を以て宗となすといつてある。この即と亦の二字、即は經文に親しきを示し、亦は傍及の意味である。經文の顯說に顯はれたる觀佛三昧に即の字を用ひ、隱彰の念佛三昧に亦の字を用ひ給うたことが暗々の裡に會得することが出来るのである。勿論釋相廢立の兩三昧の時も即亦の二字に意味はある。觀佛三昧は所廢とはいひ經文の當意にして廣く說かれてあるから即の字を用ひ、念佛三昧は所立とはいひ、所々に散說せられ經文の當意でないから亦の字を用ひたものである。又かく善導の釋意隱顯說にあるを知るも、實をいへばかくの如き區々たる一二字の使ひ方に依るのではなく、何處となくさう見るより外なからしむものがあるのである。今茲に兩宗を立て給うたことなども、その隱顯說を見ざるを得ざる一因由となるもので、宗といふは獨尊、統接、歸趣の義あり(六要八十七)、所立の念佛には立宗すべきも、所廢の定散には

立宗すべきものではない。既に兩宗を立てたるからには、廢立の外に別の意がなければならぬのである。別意とは外にはない。一經に隱顯兩面を見ることである。

二。かく、善導大師は、一經に兩宗を立てながら、體は、一心廻願往生淨土の一體となされてある。何故一體とせられたかといふに、觀佛三昧といひ、念佛三昧といひ、歸するところは、衆生をして淨土に往生せしむるより外ないからである。それでこの「一心廻願往生淨土爲體」の文は、一文兩義として解釋せねばならぬ、觀佛三昧爲宗の時、一心とは定散諸機各別の自力の一心、廻願とは廻向發願、定散二善を廻向して往生を願ふことである。淨土は方便化土、往生は雙樹林下往生である。又念佛三昧爲宗の時、一心とは弘願他力の一心、廻願とは思をめぐらして願往生心を發起すること、淨土は眞實報土、往生は難思議往生である。

それから、「觀經」の教相を判する文を引くは、「觀經」に隱顯兩宗あるけれども、究極する所、弘願念佛を實義とする旨を顯はすのである。菩薩藏といひ、頓教といふ。頓教一乘海といへば我が聖人のいつもの所判の如く弘願他力の念佛の外ないからである。

又云又言如是指法定散兩門也是即定辭機行必益此明如來所說言無錯謬故名如是  
又言如者如衆生意也隨心所樂佛即度之機教相應復稱爲是故言如是

又言如是者欲明如來所說說漸如漸說頓如頓說相如相說空如空說人法如人法說天法如天法說小如小說大如大說凡如凡說聖如聖說因如因說果如果說苦如苦說樂如樂說遠如遠說近如近說同如同說別如別說淨如淨說穢如穢說一切法千差萬別如來觀知歷歷了然隨心起行各益不同業果法然衆無錯失又稱爲是故言如是

【讀方】 又いはく、また如是といふは即ちこれ法なます。定散兩門なり。是すなはち定むることばなり。機行すればかならず益す。これ如來の所說のみこと、錯謬なきことなあかす。かるがゆへに如是となづく。  
また如といふは衆生のこゝろのことし。心の所樂にしたがひて佛すなはち之を度したまふ。機教相應せるなまた稱して是とす。かるがゆへに如是といふ。

また如是といふは、如來の所說を明さんと欲す漸々と漸のごとし、頓々と頓のごとし、相々とくこと相のごとし、空々とくこと空のごとし、人法々とくこと人法のごとし、天法々とくこと天法のごとし、小々とくこと小のごとし、大々とくこと大のごとし、凡々とくこと凡のごとし、聖々とくこと聖のごとし、因々とくこと因のごとし、果々とくこと果のごとし、苦々とくこと苦のごとし、樂々とくこと樂のごとし、遠々とくこと遠のごとし、近々とくこと近のごとし、同々とくこと同のごとし、別々とくこと別のごとし、淨々とくこと淨のごとし、穢々とくこと穢のごとし、一切の法々とくこと千差萬別なり。如來の觀智歷々了然として、心にしたがひて行なたて、おのゝ益すること同からず、業果法然としてすべて錯失なし。また稱して是とす。かるがゆへに如是といふ。  
【文科】 『序分義』證信序の文によりて「如是」の三義を明し給ふ。

【講義】 又『序分義』に曰く、此『觀經』の初めに「如是」というてあるのは、即ち一經に廣說せられてある定善、散善の法門を指すのである。もと此「如是」といふのは決定の言辭である。此場合で云へば、教を受くる機の方で實修すれば必ず眞實の利益があるといふのである。即ち如來の説かれた言説には決して錯謬がないといふことを明かにする爲めに「如是」と云はれたのである。

又「如」といふのは衆生の意の通りといふ意味である。如來は衆生の心を察して、其所樂に隨つて化益を施し給ふ。これを「如」といふ。此は如來の教を主としていふたのである。

る。次に機の方に就いて云へば、如來の教へが衆生に感應して道せ求めるといふ所樂となるので、この所樂が起ると同時に如來の化益が機に實現せらるゝのであるから、かやうに衆生の機と如來の教とが函蓋相合ふやうにピッタリと相應するのを復稱して「是」となす。如是といふはかやうな意味である。

又「如是」といふは、様々の様式によりて説かれたる如來の教法を指すのである。漸教を説くには實の如く漸數の何たるかを説き、頓教を説くには實の如く頓教を説き、諸法の相を説くには如實に相を説き、諸法の空を説くには如實に空を説き、諸法を人と法とに分けて説く時には、實の如く人法の何たるかを説き、天上界へ生るゝ法を説くには實の如く天上の法を説き、小乗を説くには小乗、大乘を説くには大乘、凡夫の何たるかを説くには實の如く凡夫を説き、聖者を説く時には聖者、諸法の因を説くには實の如く因の何たるかを説き、諸法の果を説くには實の如く果を説き、其他、苦樂、遠近、同別、淨穢等の一切法をそれ／＼其法に随つて千差萬別に説き明し給ふ。かやうに如來の一切諸法を觀察して實の如く知り給ふ智慧は、掌を觀るが如く歴々と解了して蘊す所なく、御心の儘に化他の行をなし、其機に随つて化益も亦不同である。かやうに、如來の活動と及び其効果は法理整然と

して一絲も亂れず、少しも錯失がない。この如來の如實の教説を指して「如是」といふのである。

又云、從欲生彼國者下至三名爲淨業已來正明勸修三福之行、此明一切衆生機有二種一者定二者散若依定行即攝生不盡是以如來方便顯開三福以應散動根機

【讀方】 またいはく、欲生彼國者より名爲淨業にいたるのかたは、まさしく三福の行を勸修することを明す。これは一切衆生の機に二種あることをあかす。一には定、二には散なり。もし定行によればすなはち生を攝するに盡す。こゝをもて如來方便して三福を顯開して、もて散動の根機に應じたまへり。

【字解】 一。三福 「觀經」序分に於いて、釋尊が三世諸佛の淨業として示されたる散善の行業。福とは善業をいふ。世間、出世間の善業を三種に分類して三福と稱す。

世福 — 孝養父母、奉事師長、慈心不殺、修十善業。  
三福 — 戒福 — 受持三歸、具足衆戒、不犯威儀。  
行福 — 發菩提心、深信因果、讀誦大乘、勸進行者。

【文科】 「序文義」顯行緣の文によりて散善開說の聖意を顯はし給ふ。

【講義】 又「序分義」に云く、「觀經」序分の「彼國に生せんと欲する者は、當に三福を修

すべし」等から下「此の如き三事を淨業となす」までの間は、正しく釋尊が孝養父母等の三福の行を修めることを勸められたのである。此教説によりて考ふるに、一切衆生の機類は大凡二種に分たれることが明示されてある。一は定善の機、二は散善の機である。若し定善の行丈では一切衆生を盡してはをらぬ。即ち此教行に洩れる散善の機類があるから、如來はこゝに方便を垂れ給ひ、心を一に凝すことの出来ない散亂危動の機類の爲めに、此三福散善の法、即ち廢惡修善の行を顯開いて、其機を攝め取り給うたものである。

又云、又眞實有二種一者自利眞實二者利他眞實言自利眞實者復有二種一者眞實心中制捨自他諸惡及穢國等行住坐臥想下同一切菩薩制捨諸惡我亦如是也二者眞實心中勤修自他凡聖等善

眞實心中口業讚嘆彼阿彌陀佛及依正二報又眞實心中口業毀厭三界六道等自他依正二報苦惡之事亦讚嘆一切衆生三業所爲善若非善業者敬而遠之亦不隨喜也又眞實心中身業

合掌禮敬四事等供養彼阿彌陀佛及依正二報又眞實心中身業輕慢厭捨此生死三界等自他依正二報又眞實心中意業思想觀察憶念彼阿彌陀佛及依正二報如現目前又眞實心中意業輕賤厭捨此生死三界等自他依正二報

又決定深信釋迦佛說此觀經三福九品定散二善證讚彼佛依正二報使人忻慕

又深信深信者決定建立自心順教修行永除疑錯不爲一切別解別行異學異見異執之所退失傾動也

次就立信者然行有二種一者正行二者雜行言正行者專依往生經行行者是名正行何者是也一心專讀誦此觀經彌陀經無量壽經等一心專意思觀觀察憶念彼國二報莊嚴若禮即一心專禮彼佛若口稱即一心專稱彼佛若讚嘆供養即一心專讚嘆供養是名爲正

又就此正中復有二種一者一心專念彌陀名號行住坐臥不問

時節、久近、念念、不捨者、是名、正定之業、順彼、佛願、故若依、禮誦等、即名、爲助業、

除、此、正助二行、已外、自餘、諸善、悉名、雜行、

若修、前、正助二行、心常、親近、憶念、不斷、名、爲無間、也若行、後、雜行、即心、常間斷、雖可、廻向、得生、衆名、疎雜之行、也故、名、深心、

三者、廻向發願、心言、廻向發願、心者、過去、及以、今生、身口、意業、所修、世出世、善根、及隨、喜他、一切、凡聖、身口、意業、所修、世出世、善根、以此、自他所修、善根、悉皆、眞實、深信、心中、廻向願、生彼國、故名、廻向發願、心、也

【讀方】 又のたまはく、また眞實に二種あり。一には自利眞實、二には利他眞實なり。自利眞實といふはまた二種あり。一には眞實心の中に、自他の諸惡および穢國等を制捨して、行往坐臥に一切菩薩の諸惡を制捨するに、同じく我も亦かくの如くせんと想ふ。二つには眞實心の中に自他凡聖等の善を勤修す。

眞實心の中の口業に、かの阿彌陀佛および依正二報を讃嘆す。また眞實心の中の口業に、三界六道等の自他の依正二報の苦惡の事を毀厭す。また一切衆生の三業所爲の善を讃嘆す。もし善業にあらずば、敬んでしかも之

を違かれ。また隨喜せされ。また眞實心の中の身業に、合掌し禮敬し四事等をして、かの阿彌陀佛および依正二報を供養す。また眞實心の中の身業に、この生死三界等の自他の依正二報を輕慢し厭捨す。また眞實心の中の意業に、この阿彌陀佛および依正二報を思想し觀察し憶念して、目のまへに現することくす。また眞實心の中の意業に、この生死三界等の自他の依正二報を輕慢し厭捨す。乃

また決定してふかく釋迦佛、この觀經の三福九品定散二善をときて、かの佛の依正二報を讃嘆して人をして祈慕せしむと信す。至乃

また深心は深信なりといふは、決定して自身を建立して、教に順じて修行し。ながく疑錯をのぞきて一切の別解別行異學異見異執のために退失傾動せられざるなり。至乃

つきに行について信をたつといふは、しかるに行に二種あり。一には正行、二には雜行なり。正行といふは、もはら往生經の行によりて行するものはこれを正行となづく。何者がこれや。一心にもはらこの觀經、彌陀經、无量壽經等を讀誦する。一心にかの國の二報莊嚴を專注し思想し觀察し憶念する。もし讀するにはすなはち一心に専らかの佛を禮する。もし口に稱するには、すなはち一心に専らかの佛を稱する。もし讃嘆供養するには、すなはち一心に專讃嘆供養する。是を名て正とす。

またこの正の中についてまた二種あり。一には一心に専ら彌陀の名號を念じて、行住坐臥に時節の久近をとはす、念々にすてざるもの、これを正定の業となづく。かの佛の願に順するかゆへに。もし禮誦等によるをば即ちなづけて助業とす。



この正助二行をのぞきて已外、自餘の諸善をばことごとく雜行となづく。  
もしさきの正助二行を修するは、心づれに親近して憶念たえず。なづけて无間とす。もしのちの雜行を行  
するは、すなはち心づれに間斷す。廻向して生ずることを得べしといへども、すべて躑躅の行となづくるなり  
かるがゆへに深心となづく。

三には廻向發願心、廻向發願心といふは、過去および今生の身口意業に修するところの世出世の善根お  
よび他の一切の凡聖の身口意業に修するところの世出世の善根を隨喜して、この自他所修の善根をもて、ことごと  
くみな眞實の深信の中に廻向して、かの國に生ぜんを願す。かるがゆへに廻向發願心となづくるなり。

【字解】一。凡聖 凡夫、聖者、

二。依正二報 依報(山河、大地、衣服、飲食等凡て有情の所依となる果報をいふ)と、正報(衆生の肉體、  
精神をいふ。これ自分の業因によりて與へられた正しい果報であるからである)の稱。

三。四事 衣服、飲食、臥具、湯藥、古の佛弟子はこの四事をもつて身體を養うたのである。

四。三福九品 『觀經』に説かれたる往生淨土の散善の行である。『同經』序分には三福(上三〇四頁を見  
よ)をとぎ、正宗分には九品をとく。三福は正因、九品は正行、三福は淺深の次第、九品は勝劣の次第で  
ある。一往配屬すれば

行福——上三品  
戒福——中上、中中の二品

一。世福——中下品

として下三品は三福なき惡人である。

五。定散二善 定善(慮を息め、心を凝して觀想すること。即ち觀法によりてうる善)。散善(惡を  
やめて善を修めること。即ち上の三福を修めること)

【文科】『散善義』三心釋の文によりて自力の三心を顯示し給ふ一段。

【講義】又『散善義』に云く、又この眞實といふことに就いて二種ある。一は自利眞實、  
二は利他眞實、第一の自利眞實に就いて、復二種に分れる。一は厭離の方面にして、即ち  
誠實の心をもつて自己の身口意の惡業、及び穢れた此世界に執着する心を制捨て、又他人  
の身口意の惡業には隱喜せず、そして行住坐臥にも、あ的一切の大乘の修道者が諸の惡  
業を制捨るやうに、自分も亦其通りにしたいと思ふことである。二は欣求の方面にして、  
即ち誠實の心をもつて自己と他人即ち凡夫聖者等の一切の善根を懃修めることである。  
此厭欣の一對は二雙四重判に就いては豎出の自利眞實にして、即ち聖道門權教に當るの  
である。

上の一對は厭離を先とし、欣求を後にしてあるが、以下の三對は淨土門中の方便たる横出の自利眞實を明したもので、欣求を先とし厭離を後にし身口意の三業について述べてある。

即ち眞實心をもつて口業に彼阿彌陀如來及び極樂淨土の依報正報を讚嘆し、又眞實心をもつて口業に三界、六道に亘りて自己と及び他人(正報)並びに自他の業によりて受けてをる果報(依報)の苦痛や罪惡を厭ひ毀り、亦一切衆生の身口意の三業になす所の善根を讚嘆へ若し苟も善業でないものならば、敬遠主義をとて、近よらず隨喜せないことをいふのである。

又身業については、眞實心をもつて掌を合せ、阿彌陀佛を敬禮し奉り、衣服、飲食臥具、湯藥の四事をもつて如來及び極樂淨土の依報正報を供養し奉ること、又眞實心から身業に引きつけて、此三界生死の巷、即ち自己と及び他人の依報正報の果報を輕慢め、厭捨るをいふのである。

又意業には誠實に阿彌陀如來及び極樂淨土の依正二報を思想へ觀察し、深く心に思ひ取りて、宛然目前に現はるゝ如くし、又意業には誠實に此三界生死の巷、即ち自己及び他人

の依報正報の果報を輕賤め厭捨つることである。至乃

又心を決定て、釋迦牟尼佛は此『觀經』に於いて、三福九品の散善と並びに定善十三觀を説いて、彼彌陀如來の極樂淨土の依報正報の功德莊嚴を證明し讚嘆して、有縁の人々をして淨土を忻慕はしめ給ふといふことを深く信することである。

又第七深心に就いて云へば、抑この深信は、自ら奮ひ立つて勇猛精進に決定心を起すことである。即ち如來の教説に順ひて行を修め、どこどこ迄も我心中の疑錯を除いて、淨土門中の雜行者たる別解別行の人々や、聖道門中の雜行者たる異學異見の人々の爲めに自分の決定心を傾動されたり退失せられることがないやうになるのである。至乃

次に行に就いて信を立てるといふは、其行に二種あり、一は正行、二は雜行である。正行といふは、淨土の正行といふ意味にして、二心なく淨土往生の經典たる三部經に説く所の行によりて實修するを正行といふのである。然らば其正行とは如何なるもの

であるか。

一には讀誦、一心に餘念を雜へず此『觀經』『彌陀經』『無量壽經』の三部經を讀誦すること。

二には觀察、一心に彼極樂淨土の依報正報の莊嚴に意を專注し、思想を凝し、はつきりと觀察へ、よく心に銘記して忘れないこと。即ち淨土の二十九種莊嚴を觀察すること。

三には禮拜、若し禮拜する時には、即ち二心なく専ら彌陀如來を敬禮し奉ること。

四には稱名、若し口に佛名を稱へる時には、二心なく専ら南無阿彌陀佛の御名を稱ふること。

五には讚嘆供養、若し讚嘆供養する時には、即ち二心なく専ら阿彌陀佛を讚嘆供養し奉ること。

是を名けて五正行となすのである。

又この五正行は二つに分かれる。一には心一つにして専ら彌陀の名號を稱へ、行住坐臥にも廢せず、時間の長短に關せず、一念一刹那も止めることなく、常に稱名相續する

を名けて正定の業となす。即ち是が淨土に往生する正しき業因であるといふのである。何故かと云へば、この稱名の一行は、彼彌陀如來の王本願たる第十八願の御思召に順應してゐるからである。

然るに若し禮拜、讀誦等の他の四行に依るならば、夫は第四の稱名正業の爲めの助業である。

此正業と助業の二行を除いて、外の様々の諸善萬行は、悉く一括して雜行と名ける。

故に若し前に述べた正業助業の五正行を修めるならば、其人の心は常に如來の心に親しく接近し奉り、そして御心を憶念ひ奉ることが斷へることはない。之を名けて無間修といふのである。然るに若しも後に擧げた純粹に淨土の行でない所の不純な雜行を修めるならば、其人の心はいつも如來の御心と離れ、心は常に餘念に遮られて間斷するのである。元より是等の善根も淨土へ廻向して往生することが出来るけれども、衆て一括して彌陀の本願には疎い行と名ける。

以上は第七深心に就いて述べたのである。

『觀經』三心の第三は廻向發願心である。この廻向發願心といふのは、行者がその修むる所の善根功德を淨土に廻向する心である。即ち過去より今生に亘りて、自ら身口意の三業に修めた所の世間有漏の善根、及び出世間無漏の善根と、並びに他のあらゆる凡夫や聖者達が身口意の三業に修めた所の有漏無漏の善根に隨喜することによりてうる所の功德と、是等自他に修めて得たるあらゆる善根功德を擧げて、眞實なる第二深心の中に攝めて、それを淨土に廻向け、それを因として彼極樂世界に往生せんと願ふのである。是を廻向發願心と名けるのである。

【餘義】一。この三心釋の文は顯說の證文として引き給ふものであつて、又要門自力の信を明すのである、もとこの善導大師の三心釋は、『觀經』一部定散二善と弘願の念佛に通じて釋し給ふたものであるから三心は諸行と念佛に通ずるのである。それであるから、我が聖人も、この三心釋の文に、自利の三心と利他の三心とを分別して、『信卷』に略する所は『化卷』に引き、『化卷』に略する所は『信卷』に引き、或は兩卷に合せ引き、出沒自在に引用し給ふてある。

三心釋の文

在に引用し給ふてある。

二。それで茲に、『眞實』に二種あり、一には自利眞實、二には利他眞實」と標してあるが自利眞實の分だけ引用して利他眞實は『信卷』に引き給ふたのである。

三。この自利眞實を釋する中、復有二種とあるが、この二種といふは何を指すかといふに、次に一者二者とあるものを指すと見るが、文に近いやうであるが、それでは次の三業に約する釋文の所屬が知れ難くなる。我が聖人は『愚禿鈔』下丁右以下に、この解釋法を教へて、「復有二種」の下へ、「一者厭離眞實、二者欣求眞實」の句を入れ、「一者眞實心中」から「自他凡聖等善」までを厭離眞實、「眞實心中口業」以下を欣求眞實として解釋なされてある。厭離眞實といふは厭離を先とし、欣求を後にする聖道門自力權教の眞實のこと。欣求眞實とは、欣求を先とし厭離を後にする淨土門要門の眞實のことである。即ち豎出の眞實と横出の眞實のことである。この御指南に依つてこの文を解釋して行かねばならぬ。

又云、定善、示觀、緣、又云、散善、顯、行、緣、又云、淨土之要難、逢、文抄

【讀方】 又いはく、定善は觀をせしめず緣なり。又いはく、散善は行をあらはす緣なり。又いはく、淨土の

要あひがたし。出抄

【文科】「序分義」示觀緣の文、「同上」顯行緣の文、「散善義」後序の文によりて、定散二善等の眞意を明し給ふ。

【講義】又「序分義」に云く、定善十三觀廣いけれども、約るところ觀の何たるかを示さんが爲めの方便である。即ち其「觀」とは他力の信心である。言を換へて云へば眞實信心に入らしめんが爲めの方便として廣く定善を説かれたといふのである。

又同じく「序分義」に云く、散善三觀は約るところ他力念佛の一行を顯はさんが爲めの方便として説かれたものである。

又「散善義」に云く、淨土の眞實門たる弘願に入る爲めの要道たる定散二善の要門に逢ひ奉りて、之を實修することは罕なことである。故に若し此法に逢ひ奉るならば喜んで奉行せられよ。それは方便教なれども、一路直ちに弘願の大道に通じてをるから、必ず行者を導いて眞如の門に入らしむるであらう。

【餘義】一。定善示觀緣、散善顯行緣といふは『觀經』序分七緣の中の二緣である。序分の説相は散善顯行緣、定善示觀緣の次第であるが、今は正宗分が、定善散善の説相であ

示觀緣と顯行緣と

るから、その説相に依つて次第したものである。

この二文の解釋は善導大師の疏文にあつては、「序分にあつて正宗分に説くべき定善觀の端緒を開くこと、無量壽佛が依正二報を觀するが佛力なるを示す緣由」「序分にあつて正宗分に説くべき散善九品の端緒を開くこと、三福九品の散行が往生の業因なるを顯はす緣由」といふことであるが、今御引用の上からいふと、「定善は觀を示す緣なり」「散善は行を顯はす緣なり」と讀むべきである。「定善示觀緣也」を解釋してみると『觀經』一經の顯文に定善十三觀を説くは釋尊の方便であつて、これを以て他力往生の觀を示す緣由とするといふ意味になる。この他力往生の觀といふは、他力往生の觀知、即ち他力往生の信心のことである。私を助けて下さるは阿彌陀如來であると信知することである。「一念多念證文」に觀佛本願力の觀を解釋して、「觀は願力をこゝろにかへみるとうます。またしるといふことゝるなり」とあるが、この觀の字の意味である。次に「散善顯行緣也」といふは『觀經』の顯文に散善三福九品を説くは、釋尊の方便にて、他力往生の行を示す爲めの緣由といふ意味である。

又云如觀經、說先具三心、必得往生、何等爲三、一者至誠心、所謂身業、禮拜、彼佛、口業、讚嘆、稱揚、彼佛、意業、專念、觀察、彼佛、凡起三業、必須真實、故名至誠心、至三者、廻向發願心、所作一切善根、悉皆廻願往生、故名廻向發願心、具此三心、必得生也、若少一心、即不得生、如觀經、具說、應知、又菩薩已免生死、所作善法、廻求佛果、即是自利、教化衆生、盡未來際、即是利他、然今時衆生、悉爲煩惱、繫縛、未免惡道、生死等苦、隨緣起行、一切善根、具速廻願往生、阿彌陀佛、國到彼國、已更無所畏、如上、四修自然、任運、自利、利他、無不具足、應知

【讀方】 又はいく、觀經の觀のことし。まづ三心を具してかならず往生をう。何等をか三とする、一には至誠心、いはゆる身業に於て佛を禮拜し、口業に於て佛を讚嘆し稱揚し、意業に於て佛を專念し觀察す。凡そ三業を起すに、かならず真實を須るがゆへに至誠心となづく。(乃至)三には廻向發願心、所作の一切の善根、ことごとくみな廻して往生を願す。かるがゆへに廻向發願心となづく、この三心を具してかならず生ずることを得。もし一心少めればかならず生ずることをえず。觀經に具にとくがごとし。しるべし。(乃至)菩薩は

すでに生死をまわかれて所作の善法、廻して佛果をもとむ。すなはちこれ自利なり。衆生を教化して未來際をつくす。すなはちこれ利他なり。然に今の時の衆生、ことごとく煩惱のために繫縛せられて、いまだ惡道生死等の苦をまわかれず。緣に隨ひて行を起して、一切の善根具に速に廻して、阿彌陀佛の國に往生せんと願ぜん。かの國に到り已りて、更に長るところ無けん。上の如の四修、自然任運にして自利々他具足せざることなし。しるべし。

【字解】 一。四修 佛道修行を四種に分てるもの。これに聖道、淨土の二類あり。今は淨土の四修である。第一、恭敬修 佛及び一切の聖者を恭敬すること。第二、無餘修 専ら阿彌陀佛名を稱して、又彌陀佛及び聖衆を禮讃して餘業を交へざること。三、無間修 恭敬、禮拜、稱名、讚嘆、憶念等をなすに、常に心々相續して念を隔てず、時を隔てず、清淨にして餘念を交へざること。四、長時修 一生涯を通じて修むることを誓ひ、決して中止しないこと。

【文科】 「禮讚」前序の文によりて自力の三心を明し給ふ。  
 【講義】 又『往生禮讚』の文に云く、『觀經』に説かれてあるやうに、先づ三心を具足するならば、必ず間違ひなく淨土に往生することが出来るのである。その三心とは如何なるものであるか。

一は至誠心、身業に彼阿彌陀佛を禮拜し、口業には彼佛の威神功徳を讚嘆稱揚へ、意業

には専ら阿彌陀佛を念じ奉り、觀察へ奉り、凡そ彼御佛に對し奉りて身口意の三業に起す所は、必ず誠實にして虚偽を離れてをる故に至誠心と名けるのである。乃

三には廻向發願心、自ら修めた所の一切善根功德は、悉く皆如來の方に捧げ奉り、夫を因として極樂に往生せんと願ふ、是を廻向發願心と名けるのである。即ち如來に對する至誠心は必ず此願求の心を具へてをるのである。廻向發願心は至誠心の活躍したものである。

こゝには第二の深心を略してあるが、この『觀經』の自力の三心を具足すれば、化土に往生することは疑ない。けれども若し眞實の一心即ち他力廻向の信心を缺くならば眞實報土の往生は出來ないことである。それは『觀經』に具に説いてある。『觀經』の當相には表はれてをらぬやうであるが、眼を一經の幽意に注いで、其隱説を見るならば、自力他力の信心によりて報土化土の果を得ることは委しく説示してあるのである。至乃

又大乘菩薩の自行化他を案するに、菩薩は其修行の力によりて、既に生死輪廻に迷ふことはなくなつてゐる。そして作す所の善根功德をもつて正覺の果を得んことを求める。夫は即ち自力である。而も之と同時に一切衆生に化益を施し未來際を盡して終ることはない。

是は即ち利他である。菩薩は實に此自力々他の行によりて佛果を證するのである。

然るに當今の衆生は、悉く煩惱惡業の爲めに繫縛られて生死の三惡道を免れ出でることが出來ずにある。夫であるから上根の菩薩の後を追ふことは出來ない。唯速かに縁に隨ひ自己の能力に應じたる定散の行を勵み、それによりて得る所の一切の善根を悉く阿彌陀如來に捧げ奉り、そして極樂淨土に往生せんことを願ふに若くはない、一度彼淨土に生れるならば、もう外魔惡業等の凡てに就いて畏るゝことは要らぬ。上に述べた無餘修、長時修等の四修の行は、努力をまたずして自然に滞りなく、實現せられ、自力々他の大行は自ら行者に具足せられる。是は極樂淨土の土徳の然らしむる所である。

又云若欲捨專修雜業者、百時希得一二千時、希得五三何、以故乃由雜緣亂動、失正念、故與佛本願不相應、故與教相違、故不順佛語、故係念不相續、故憶想間斷、故廻願不懇重、眞實故貪瞋諸見、煩惱來間斷、故無有慚愧、懺悔心故懺悔有三品、至上中下上品懺悔者、身毛孔、中血流、眼中血、流出者、名上品懺悔、中品懺悔者

偏身熱汗從毛孔出眼中血流者名中品懺悔下品懺悔者偏身  
 徹熱眼中淚出者名下品懺悔此等三品雖有差別是久種解脫  
 分善根一人致使下今生敬重人不惜身命乃至小罪若懺即能徹  
 心徹隨能如此懺者不問久近所有重障皆頓滅盡若不如此縱  
 使日夜十二時急走終是無益若不作者應知雖不能流淚流血  
 等但能真心徹到者即與上同也

【讀方】 又はいく、もし専を捨て、雜業を修せんとする者は、百はとぎにまれに一二を得、千はとぎにまれに  
 五三を得、何をもての故に。いまし雜緣亂動して、正念を失するによるがゆへに。佛の本願と相應せざるがゆ  
 へに。教と相違せるがゆへに。佛語に順ぜざるがゆへに。保念相續せざるがゆへに。憶想間斷するがゆへに。廻  
 願怒重眞實ならざるがゆへに。貪瞋諸見の煩惱きたりて間斷するがゆへに。慚愧懺悔の心あることなきがゆへに  
 懺悔に三品あり。(乃至)上中下なり。上品の懺悔といふは、身の毛孔の中より血ながれ、眼の中より血出るも  
 のを上品の懺悔となづく。中品の懺悔といふは、偏身に熱き汗、毛孔より出で、眼の中より血ながるゝものを  
 中品の懺悔となづく。下品の懺悔といふは、偏身にとほり熱くして眼の中より涙いづるものを下品の懺悔とな  
 づく。これらの三品差別ありといへども、これ久く解脫分の善根を種みたる人なり。今生に法を教ひ人を重  
 くして身命をおします。乃至小罪もし懺すれば、即ちよく心體にとほりて、能かくの如く懺すれば、久近を

とほす所有の重障の頓に滅盡せしむることを致す。若かくの如くせざれば、たとひ日夜十二時に念に走れども  
 つひに益なし。差ひて作さるる者は應に知るべし、流淚流血等にあたはずと雖もたゞよく真心徹到する者はすな  
 はち上とおなじ。上已

【字解】 一、雜業 雜行の意、即ち五種の正行を除いたる餘の功德善根のこと。但しこゝでは雜行の  
 外に、五正行中の正定業たる第四の念佛を除いて、他の誹謗、觀察、禮拜、讚嘆の助業をも含む。

二、正念 他力信心のこと。

三、保念 念を四方に係ける意、一心専念のこと。

四、真心徹到 真心は誠の心、浮いた心でなしに深く心に徹到すること。中心から命懸けに懺悔すること。

【文科】 『禮讚』の文によりて雜修の失を判じ給ふ。

【講義】 又『往生禮讚』に云く、若し淨土往生の正因たる專修稱名の一行を捨て、助  
 業や雜行を修めるならば、百人の中に僅に二人、千人の中僅に五人か三人位しか往生す  
 ることが出来ぬであらう。但し其丈の人が往生することが出来るのは、元より化土の往生  
 である。眞實報土ならば千中無一、萬不一生である。眞實報土へは廻向の信行によりての  
 外は決して往生することを得ない。



何故かと云へば、是等の雜業を修める人達は、力弱い不確實な自力に依りてゐるのであるから、第一に外界から亂れ来る様々の刺撃が惡縁となつて、信心を得せしめない。第二に此自力の雜業は彌陀の本願に叶うてはをらない。第三に釋迦如來の出世の本意たる教と相違してゐる。第四に十方諸佛の證誠讚嘆の御語に順うてはをらぬ。第五に自力の行であるから一心に淨土を念することが相續せない。第六に如來を常に憶念ひ奉ることが間斷になる、第七に如來に向ひ奉りて廻向發願して願生する念が慇懃でなく、亦誠實でなく、常に疎々しい、

以上第五より第七までは親疎に就いて述べたのである。

第八に自力の雜業を修める時には、貪欲、瞋恚等の三毒の煩惱、並びに様々の惡邪見が障りをなして、修道の心を間斷にする。第九に是等自力の修道者には慚愧の心、懺悔の念がない。是が甚だしい修道の妨げである。

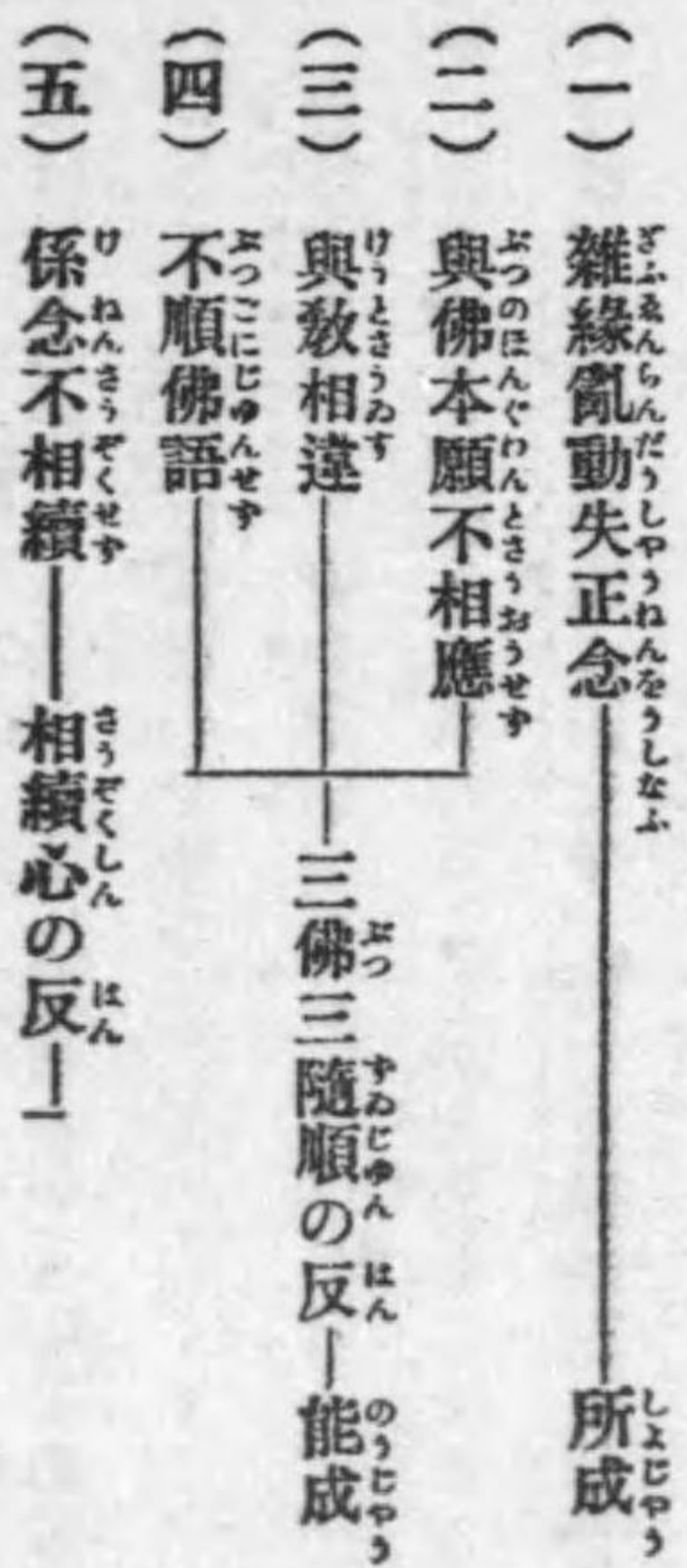
懺悔について三種あり至即ち上中下に分つ。上品の懺悔とは身體中の毛孔から血を流し眼の中から血涙を流す。かやうな熾烈なる懺悔が上品の懺悔である。中品の懺悔とは、偏身の毛孔から熱い汗を絞り、眼の中から血涙を流す懺悔。下品の懺悔とは、偏身が内外を

徹してほてり、眼から熱涙を流す懺悔をいふのである。是等の三品の懺悔に差別はあるが何れにしても宿世に菩提心を發した其善根によりて、今生に法を敬ふ心篤く、又僧を重んじ、佛法僧の爲めに身命を惜まないやうになり、至小罪でも懺悔する時には、上の如く心髓に徹るやうな深みに觸れることが出来るのである。夫であるから能くかやうに懺悔するならば、時間の長短に關せず、所有重罪は霜の朝日に消ゆるやうに、速に滅盡して仕舞うのである。若しかやうな熾烈なる懺悔に依らなければ、縱使日夜十二時即ち晝夜休むことなく、頭燃を拂ふやうに氣を焦ちて奔り廻つても、畢竟何も益する所はない。併しそれかと云うて、急奔急作の行を全くせないならば、是れ亦何の得る所もないことは言ふまでもない。

但し涙を流し、血を流すやうな熾烈なる三品の懺悔はせずとも、但よく如來の眞實心に徹入し、佛凡一體の妙境に達するならば、上の三品の懺悔に等しいのである。即ち眞心徹到する人は金剛心の人であるからである。

【餘義】一。善導大師『往生禮讚』に雜修の十三失を擧げ給ふ中、今はその九失を出し給ふのである。残りの四失はこの下眞門の處に出し給うてある。かく九失と四失とを、要

門と眞門との下に分つて出し給うたのは、九失は雑修雑心の失、四失は専修雑心の失である。雑修といふは法の失、雑心は機の失にて、眞門には機の失あれども、法の失なく、要門には法の失もあり機の失もあるから、雑修雑心の失たる九失をこの要門の下に出し、専修雑心の失たる四失を眞門の下に出し給うたのである。雑修といふは雑行と同じ意味であつて、雑行が行體に就いて名けられるに反して、雑修は機に就いて名けられる相違があるだけである。しかしかく九失と四失と要門と眞門にわかつのは、所謂據勝爲論で、要門には雑修の失あり。眞門には雑修の失がないから暫らく九失と四失とを分つたので、尅實して論ずれば、要門眞門共に十三失あるのである。



(六) 憶想間斷 ———— 一心の反 ———— 失正念を開く

(七) 廻顧不感重眞實 ———— 淳心の反 ————

(八) 貪瞋諸見煩惱來間斷 ———— 外障 ———— 雜縁亂動を開く

(九) 無有慚愧懺悔心 ———— 内障 ———— 雜縁亂動を開く

これを攝むれば、前四失となり、第一の失は所成、第二三四失は能成である。即ちこの二三四失は序の如く、三佛三隨順の相反で、この三不隨順は本願不相應の一に治まり、本願と相應せないから、雑縁亂動して正念を失するのである。『和讃』には、これを「本願相應せざるゆへ、雑縁きたりみだるなり。信心亂失するゆへに、正念うすとはのべたまふ」と宣うてる。

次の五失は第五第六第七は『論註』の淳一相續の三信の相反で、信心亂失のすがたである。第八第九は前者は外障後者は内障であつて、雑縁亂動のすがたを顯はしたものである。それでこの九失はつむれば前の四失となり、この四失の關係は所成能成となるのである。

又云總不論照攝餘雜業行者

【讀方】 又はいく、すべて餘の雜業の行者を照攝すといふことを論ず。

【文科】 『觀念法門』觀念緣の文によりて、佛光雜業者を攝取せずと標し給ふ。

【講義】 又『觀念法門』に云く、彌陀如來の攝取の心光は、唯念佛の行者を照護し給ふので、其餘の雜行を修し、雜修をこのむ輩を攝取し照護し給ふことはないのである。

又云如來出現於五濁隨宜方便化群萌或說多聞而得度或說少解證三明或教福慧雙除障或教禪念坐思量種種法門皆解脫

【讀方】 又はいく、如來五濁に出現して、宜きにしたがひて方便して群萌を化したまふ。或は多聞にしてしかも得度すと云き、或は少く解りて三明を證すと云く。あるひは福慧ならべて障を除くと教へ、あるひは禪念して坐して思量せよとなしふ。種々の法門みな解脫す。

【字解】 一。群萌 衆生に同じ。雜草の芽を生ずるやうに、迷界に群り生ずる故にいふ。

二。福慧 福德と智慧、六波羅蜜のと。布施、持戒、忍辱、精進、禪定、般若の前五は福、後の智慧は慧である。

【文科】 『法華證』如來出現の文によりて、佛一代の攝化方便を述べ給ふ。

【講義】 又『法華證』下に云く、釋迦如來この五濁惡世に出現になつて、機の宜しきに應じて、方便を巡らし群萌を化益し給ふ、或は如來の教説を多く聞いて生死を度脱すると説かれた。即ち是は聲聞教である。或は少しく法門を解了して三明を證るとも説かれた。それは緣覺教である。或は亦大乘菩薩の法を説いて、福德（六度中の前の五）と智慧（六度中の後の一）雙へ行して煩惱障、所知障を除くとも説かれた。以上は三乗教にして教であるが、更に又禪を説かれ、坐禪して深く己心を思量へよと教へられた。是等の教禪の様法の法門は、教の如く修行すれば皆夫によりて解脫することが出来るのである。

又云萬劫修功實難續一時煩惱百千問若待娑婆證法忍六道恒沙劫未期門門不同名漸教萬劫苦行證無生畢命爲期專念佛須臾命斷佛迎將一食之時尙有間如何萬劫不貪瞋貪瞋障受二人天一路三惡四越內安身

【讀方】 又はいく、萬劫に功を修せんこと實に續がたし。一時に煩惱百千問。もし娑婆にして法忍を證せんことをまたば、六道にして恒沙劫にもいまだ期あらず。門々異なるを漸教となづく。萬劫苦行して無生を證す。畢命を期としてもほら念佛すべし。須臾に命斷すれば佛迎へ將ます。一食の時なを問あり。いかん

ぞ萬劫に食喫せざらん。食喫は人天をうくる路を降ふ。三惡四趣の内に身を安す。要を抄す

【字解】一。萬劫。一萬遍の劫波。聖道門には十信の凡夫位に一萬劫を経なければ、初住不退位に入ること出来ない。故にこゝに萬劫といふは、聖道門の十信一萬劫を指すのである。

二。法忍。無生法忍のこと。不生不滅の眞如法性を認知して安住決定する位、七地以上十地の位をいふ。或は初地不退位、又は初住不退位をいふ。

三。三惡四趣。三惡は三惡道。地獄道、餓鬼道、畜生道のこと。四趣は四惡趣。上の三惡道より修羅道を開きたるもの。趣は趣き住むの意。

【文科】『般舟讚』の文によりて、捨聖歸淨を勧め給ふ。

【講義】又『般舟讚』に云く、通途の佛道修行する時は、十信の位に一萬劫を経過して初住の不退位に入ると稱せられてある。然るにこの萬劫の間修行の功を積み、少しも退墮せずして繼續してゆくといふことは容易のことではない。一時の間でも百千種の煩惱が群り起つて、修道心を散々に破るではないか。されば若し此娑婆界に於いて不退の位を證することを待つならば、六道を經巡りて恆沙無量の劫波を經ても、出離の時期はないであらう。

良や教の門戸を異にしてゐるものを漸教と名ける。是れ皆な方便教であるからである。

この教へによれば、萬劫の長い間、苦行の功を積みて不退無生の位を證るといふ。かやうな歷劫迂回の聖道門に滯つてはならぬ。

即ち聖道方便の教を脱れて、淨土眞實の法門に入るが宜しい。命のある間専ら念佛するならば、命終の時如來は必ず來迎し給ひ、須臾にして淨土へ往生せしめ給ふのである。是といふも外ではない。若し聖道の難行を修することになれば、萬劫の長い間にどうして貪欲、瞋恚の煩惱を起さないで済まうか。然るに是等の煩惱は、證りを妨げるよりも、もつと低い人間天上の果報を受けることさへ障りをなして、地獄、餓鬼、畜生の三惡道（之に修羅を加へて四惡趣）の中に其身を置くでないか。

又云定散俱廻入寶國。即是如來、異方便。韋提。即是女人、相貪瞋具足、凡夫位上已。

【讀方】又いはく、定散ともに廻して寶國にいれ。即ちこれ如來の異の方便なり。韋提はすなはちこれ女人の相、貪瞋具足の凡夫の位なり。上已。

【字解】一。韋提。韋提希(Vaidhi)夫人。摩竭陀國王頻婆娑羅王の妃。北の隣國毘舍離(Vesali)國主チエー

タカ(Comely)王の娘である。毘舍離女と呼ばれ、思惟、勝身等と譯せらる。頻王が其子阿闍世の爲めに幽閉せられ、韋提希も亦監禁の身となるや、深く人生の悲痛を感じ、釋尊に説法を請ひ奉つたので、釋尊は爲めに「觀無量壽經」を説かれた。

【文科】『般舟讚』定散俱迴の文によりて、自力の定散心をすて、他力に歸せよと勸め、實機を指示し給ふ。

【講義】又『般舟讚』に云く、淨土の方便たる定善心も散善心も俱に翻して本願の正意に歸し、眞實報土の往生を遂げよ。是ぞ釋迦如來が特異に開説せられたる方便にして即ち是れ弘願他力の正意である。

見よ、『觀經』の正所被の機として、又本經興起の代表者たる韋提希夫人は、正しき一個の女性として、貪欲、瞋恚、愚痴の煩惱に繫縛せられてゐる罪業の凡人でないか。この定散の二善を修し兼ねる彼女は、正しく他力念佛の一道によりて生死を脱れることが出来たのである。上巳

第二科 曇鸞大師の釋文

論註曰有二種功德相一者從有漏心生不順法性所謂凡夫人天諸善人天果報若因若果皆是顛倒皆是虛偽故名不實功德

上巳

【讀方】論の註にいはいく、二種の功德の相あり。一には有漏の心より生じ法性に順せず。いはゆる凡夫人天の諸善、人天の果報、もしは因もしは果みなこれ顛倒す。みなこれ虚偽なり。かるがゆへに不實の功德となづく。上巳

【字解】一。有漏心 漏は漏泄の義、煩惱のこと。自他の煩惱を増長せしむる煩惱心のこと。凡夫の心を指す。

【文科】『論註』の文によりて有漏心所生の功德を貶し給ふ。

【講義】『淨土論註』上に云く、功德相に二種ある。一には煩惱心から生れた功德である。是は迷妄から起つたものであるから眞如法性の理に叶うてはをらぬ。所謂天上、人間の迷ひの凡夫が修めた諸善及び是等の善によりて得る所の果報をいふ。是等迷ひの因果は眞實の因果と比ぶれば、皆顛倒である。皆一括にして虚偽である。夫であるから是等を眞實功德とは名けず、不實功德と名けるのである。

一般人は是等有漏の功德に執着して、眞實功德相を知らずにをる。暫く是等の不實の功德を翻して眞實功德相に轉入せねばならぬ。

第三科 道綽禪師の釋文

安樂集云引大集經月藏分言我末法時中億億衆生起行修道未有一人得者當今末法是五濁惡世唯有淨土一門可通入路又云未滿一萬劫已來恒未免火宅顛倒墜故名用功至重獲報僞也上巳

【讀方】安樂集に、大集經の月藏分をひきていはく、わが末法の時の億々の衆生、行をおこし道を修せん、いまだ一人として得るものあらじと。當今は末法これ五濁惡世なり。たゞ淨土の一門のみありて通入すべき路なり。又いはく、いまだ一萬劫に滿たざるのかたは、恒にいまだ火宅をまぬかれず。顛倒墜するがゆへに、おのゝ功を用ゐることは至りておしく、報をうることは僞なり。上巳

【字解】一。大集經月藏分 『大集經』は具には『大方等大集經』(Mahāvairocana-sūtra)六十卷。北涼の天竺三藏曇無讖等の譯。月藏分は、最後の須彌藏分の次上にあリ、月幢神呪品より法滅盡品に至る二十品を含む。又月藏分は獨立して『大方等大集經』と稱せられ、隋の天竺三藏、那連提黎耶舍に譯せらる。覺王波旬詣佛所品乃至法盡品等二十品あり。此下の文は五ヶの五百年の取意の文である。

【文科】『安樂集』によりて末世の機教を顯示し給ふ。

【講義】道綽禪師は其著『安樂集』上に『大方等大集經』月藏分の文を取意して、かやうに仰せられてある。

釋尊宣給く、我末法の時節に及んでは、億々の衆生が修行を勵み、道に進んでも、未だ一人も證りを得るものはないであらう。

此經說に就いて考へて見るに、當今は末法萬年の初期に屬し、世は五濁に穢されてをる通途の自力の修行では釋尊の前もつて説かれたやうに、成佛得道は望みの斷へたことである。唯こゝに他力易行の大道たる淨土の法門丈が、凡夫直入の近路として、一切衆生の爲めに其門戸を開いてをるのである。

又『安樂集』下に云く。十信の位の間一萬劫を経過せない間は、どうしても生死の火宅を免れることは出来ない。此間の長遠なる修道の間は、常に魔縁、魔障に妨げられて修行を退墮し、生死海中に落ちこんで漂蕩はされる。是が聖道門の至難なる點である。即ち斯道に進む人々は、自力の努力を注ぐこと極めて重いにも係らず、其獲る所の果報は虚僞顛倒の生死の苦果である。故に我々は第一に此踏出しに就いて、充分なる思慮を須るねばならぬ。

第二節 私釋の二三(經通顯)

第一項 三經隱顯

然今據大本超發眞實方便之願、亦觀經顯彰方便眞實之教、小本唯開眞門、無方便之善、是以三經眞實、選擇本願、爲宗也、復三經方便、即是修諸善根、爲要也。

【讀方】然にいま大本によるに眞實方便の願を超發す。また觀經には方便眞實の教を顯彰す。小本にはたゞ眞門をひらきて方便の善なし。こゝをもつて三經の眞實は選擇本願を宗とするなり。また三經の方便はすなはちこれ諸の善根を修するを要とするなり。

【字解】一。大本 『大無量壽經』のこと。正依の三經の中、此經は廣く淨土因果を明すにより、『阿彌陀經』の略明に對して大本と稱す。

二。小本 『阿彌陀經』のこと。『大無量壽經』の廣説に對して、『本經』には簡潔に淨土の因果を説く故に小本といふ。

三。眞門 要、眞、弘三門の一。『阿彌陀經』の願説に示されたる自力念佛の教をいふ。これ第二十願成就の法にて、機は自力であるが、法は他力眞實の名號であるから、第十九願成就の諸行往生の方便眞門たる要門に對して眞門と名く。されど第十八願の純他力の法門に對すれば、尙ほ方便門たるを免れることは出來ぬ。

【文科】三經について、隱顯の義を釋し、その眞實を明示したまふ。

【講義】然るに今『大經』によれば、そこには弘願他力を説かれたる眞實の第十八願と並に修諸功德等を説かれたる方便の第十九願、第二十願を超發され、明かに眞實と方便の相を示された。亦『觀經』には、表には方便の定散二善を説き、其裏面に弘願眞實の一法を説かれた。然るに『阿彌陀經』には唯自力念佛の眞門の一法を説いて、定散二善等の方便の教を説かれてない。

夫故に今是等三經に亘りて考へて見るに、三經の眞實とする所は、如來選擇の本願たる他力の行信をもつて宗要とするのである。是は彌陀如來の願意であつて、三經に一貫した根本精神である。この三經の眞實に對して、三經の方便とする所は、定善散善等の一切の善根功德を修することを宗要とするのである。

【餘義】一、先きに『觀經』の隱顯兩面ある旨を大體の上から申し來つて、その證として、善導、曇鸞、道綽の十七個の釋文を引用せしに依り、今この私釋に來つて、正しく『觀經』一經に隱顯兩面あるを釋成し給ふのである。抑『觀經』にかくの如く隱顯兩面あるは、もと、『大經』所説の彌陀の本願に、眞實方便の兩願あるに依り、釋迦如來、その

本願の覺召に依り、善巧方便して、方便の願を一經に開説し給うたからである。それで今この私釋に於ては、先づ初めに『大經』に眞實方便の願を超發すといひ、次に『觀經』を出し、『小經』をも並べ出し、三經對辨して、然る後に正しく『觀經』の隱顯の義を示し、三經の宗とする所は隱彰の他力信心にありと釋成し給ふのである。文中の眞實方便の願といふは、いふまでもなく、十八願と十九、廿願のことである。方便眞實の願といふは、『觀經』一經の顯説と隱彰のことである。『大經』は顯露に眞實を説いた經典であるから、眞實を先きに出して眞實方便の願といひ『觀經』は顯説方便の經典であるから、方便を先きに出して、方便眞實之教といつたものである。『小經』に方便之善なしといふは、『小經』は教頓機漸といひ、法は他力念佛の眞實の法なれども、機が自力の漸機ゆへに、方便眞門の教となるのであつて、法には方便なきことを示すのである。

それで、以上述べ來つたところを歸納し約言すれば、大觀小三經の眞實は第十八選擇本願を宗とするのである。『大經』第十八願の所説と、觀小二經の隱彰の實義とは全然一致して、茲に三經一致となるのである。然し『觀經』には顯に方便を説き、『小經』また顯説眞門方便にて、『大經』の十九二十の方便の願に應ずれば、三經の方便の一面は修諸善根を

要とするのである。

## 第二項 『觀經』隱顯

### 第一科 方便門

依此按方便之願有假有眞亦有行有信願者即是臨終現前之願也行者即是修諸功德之善也信者即是至心發願欲生之心也

【讀方】これによりて方便の願を案するに、假あり眞あり、また行あり信あり、願といふは即ち臨終現前の願なり。行といふは即ちこれ修諸功德の善なり。信といふはすなはちこれ至心發願欲生の心なり。

【文科】『觀經』隱顯の中初めに方便の行信を標し給ふ。

【字解】此見解に立ちて方便を説き給へる第十九願そのものを考へて見るに、此願の中に權假方便と眞實とがある。即ち願の表面を見れば方便の諸善を修めることを説いてあるが、是を説かれた如來の幽意は、初めに此等の諸善をもつて衆生を誘引し欣慕せしめ、そして遂に是等方便を方便と知らしめて眞實の弘願に轉入せしめんと眞實の御意が動いて



あるのである。

亦この方便の願には、行と信とがある。その願とは第十九願臨終現前之願である。その願に誓はせられた行は、定散二善等の諸の功德善根を修めることをいふ。又信は至心、發願、欲生の自力の信である。即ち至心をもつて修むる所の善根を廻向して往生淨土を願求する心をいふ。是れ第十九願方便の行信である。

【餘義】一「方便の願を案するに假あり眞あり」といふ文について、「樹心録」には二通の解釋法が擧げてある。一は方便の願といふを第十九、第二十の兩願と見て、方便の願に、第十九の假門と、第二十の眞門があるといふ見方である。これは下にいふが如く願に隱顯を立つるを嫌つて、こゝにいふ解釋をしたものであるけれども、その解釋としては適當でない。何故なれば、次下に「願といふは臨終現前之願也」とあり、明かに、この方便の願といふを第十九願のこと、制約してあるからである。それで『六要』九十一の「方便眞門の願に眞實あり方便あり」とあるに相對するのである。第二の解釋は、假眞を方便と眞實とに解し、第十九願には修諸功德の方便と弘願の眞實があるといふのである。願に眞假があるというて、これを直に隱顯と解し、本願に隱顯があるといふのではない。隱顯は釋

假方便の眞

尊の教説に關して立てたもので、願についていふべきものでない。第十九願は修諸功德の方便を誓うたものであるが、阿彌陀如來の願を立て給うた意趣から伺ふときには、この願を以て衆生を導いて弘願他力に入らしめるためであるから、第十九願の本意第十八願にあるを眞というたものである。それで、今この願に假有り眞有るといふを承けて、「有假」に對して、「顯開淨土之要門方便權假」といひ、「有眞」に對して、「亦此經有眞實斯乃開金剛眞心欲顯攝取不捨」と宣うたものである。

依此願之行信顯開淨土之要門方便權假從此要門出正助雜  
三行就此正助中有專修有雜修就機有二種一者定機二者散  
機也又有二種三心亦有二種往生二種三心者一者定三心二  
者散三心定散心者即自利各別心也二種往生者一者即往生  
二者便往生便往生者即是胎生邊地雙樹林下往生也即往生  
者即是報土化生也

【讀方】この願の行信によりて淨土の要門、方便權假を顯開す。この要門より正助雜の三行をいだせり。

この正助の中について専修あり雜修あり。機について二種あり。一には定機、二には散機なり。また二種の三心あり。また二種の往生あり。二種の三心といふは、一には定の三心、二には散の三心なり。定散の心はすなはち自力各別の心なり。二種の往生といふは、一には即往生、二には假往生なり。假往生といふは、すなはちこれ胎生邊地雙樹林下の往生なり。即往生といふは、すなはちこれ報土化生なり。

【字解】一。要門 要門弘三門の一。彌陀の第十九願成就の法にて、『觀無量壽經』に顯說せられたる定散自力の教をいふ。是等の定散自力の諸行は、弘願の要法に轉入する門戸であるから要門と稱せられるのである。

二。胎生邊地 懈慢界の稱。第十九願要門自力の行者の生るゝ化土をいふ。上二二八頁、懈慢界、疑城胎宮を看よ。

三。雙樹林下往生 第十九願自力修善の往生である。上二一九頁をみよ。

【文科】 方便門の中淨土の要門を詳述し給ふ。

【講義】 此第十九願の行信に依りて、釋迦如來は淨土の要門（弘願眞實に入る爲めの要道）即ち弘願眞實の爲めには方便であり權假である所の教を顯開された。そして此要門から正行助行雜行の三行を開き出された。

一正——五正行（讀誦、觀察、禮拜、稱名、讚嘆供養）

一助——前三後一（第四の稱名を除いた他の四正行）

此正助二行を正しく實修する上に於いて、専修と雜修の二つがある。即ち是等の一行を専修すると、二行三行を兼修するとの相違である。専修といふ名はあれども、此の場合には弘願他力でないことは無論である。

又此正助二行を修める機類に就いては、定善の機と散善の機の二種ある。

又是を信の上から觀察すれば、二種の三心となる。そして其の結果より見れば二種の往生がある。二種の三心とは定善の機の起す所の定の三心即ち冥想的な禪定的な三心、並に散善の機の起す所の散の三心である。此定散二善の機類の三心といふのは、即ち自力の機類に不同があるから、種々無量に相異なる三心である。次に二種の往生とは、即往生と假往生で、後者は胎生邊地の往生、即ち化土の往生で、之を三往生から云へば第十九願の雙樹林下往生である。前者は眞實報土の往生にして、正覺の華より化生する第十八願の往生である。

【餘義】 一。この願の行信に依つて淨土の要門方便權假を顯開す」といふは、正しく釋尊が『觀經』を説き給ふことを示すのである。「この要門より正助雜三行を出す」といふは、

『觀經』一部に説き明されたる行體を出し給ふのである。これまで主として善導大師の釋文を引用して來たから、今も正助雜といふ善導大師の名目を藉りて行體を出し給ふのである。しかし善導大師の常に用ひ給ふ正雜二行と云はず、特に正助雜三行といふは、善導大師に依つて、この名目を用ひながら、猶その釋義に至つては、多少大師のそれと異なるところあるを示し給ふのである。今茲にその異なる所を述べて見やう。

二、『觀經』の正宗分に定散二善正雜二行の説いてあることはいふまでもない。正行といふは開けば讀誦、觀察、禮拜、稱名、讚嘆供養の五正行である。合すれば正定業（第一四）助業（前三後一）の二業である。これを開門五種、合門二種と呼んでゐる。この開門五種の時は、五正行の中觀察と稱名を以て主體とし、讀誦は觀察の加行、禮拜は稱名の加行、讚嘆供養は觀察と稱名に通ずる等流の正行である。それで『觀經』の正宗分は觀佛三昧と念佛三昧を兩宗とするのである。かくの如く開いて五種とする時には、觀佛念佛兩宗あるが、しかもこの中猶觀佛三昧を主とするものにして共に要門に屬する。合して正助二業とする時は、附屬の文の念佛の一行こそ彌陀の本願なるが故に、餘行を廢してこの念佛を附屬し給ふ廢立の位から見るものにて、弘願に屬するのである。これが今家淨土

正行、助業、雜業

眞宗にて五正行を扱かふ時の法相である。

ところが、善導大師は、五正行を『觀經』の正宗分の顯説に就いて立て、觀察の觀佛三昧を要門とし、稱名の念佛三昧を弘願となし給ふのである。これが我が聖人の御指南と異なる點である。我が聖人は、前にいふ通り、開門五種の時はすべて要門に屬するものとなし給ふのである。それで今茲に、「この要門より正助雜三行を出す」と宣ふのである。我が聖人の御考からして見ると、『觀經』一部の法門は、『選擇集』末丁に善導大師の『疏』に依つて、定散と念佛の二行を説くものとなされる如く、正宗分には定散二善を説き、流通分には念佛の一行を説き給ふものとなされるのである。その定散二善といふは、語を換へて言へば、正雜二行であり、正雜二行といふは『觀經』一部顯説の法門を總攝する要門自力の行である。試にこれを『觀經』の文についていへば、五正行の讀誦といふは、經文を讀誦して、淨土の依正二報の相を知り、觀察の加行とするものである。觀察は、經説に従つて修定し、淨土の莊嚴を観することである。それでこの讀誦と觀察の二行は定善十三觀に於て立てるものである。次に散善九品の中上中六品には大小世間の諸善を説いてあるが、これは雜行である。次に下三品の合掌叉手は禮拜、稱南無阿彌陀佛は稱名である。第五の

正行讚嘆供養は、稱名と觀察に通ずる等流の正行である。かくの如く見來る時には、この五正行中の稱名は弘願他力の念佛に非ずして、散善に攝められる念佛である。十九願開説の經典たる『觀經』顯説の要門自力の念佛である。それで、我が聖人は「この要門より正助雜三行を出す」と宣うたものである。勿論先きにもいふ如く正助と合する合門二種の時は弘願他力の念佛となるので、今茲に「要門より正助雜三行を出す」といふ用語は不穩當の様であるが、この正助は正助二業の正助ではなく、下(六要九十二)に出體し給ふ如く、正とは五種正行、助とは他力念佛の外の四種五種六種の助正兼行を指したので正行、助行、雜行の正助雜の三行といつたのである。(茲に稱名を除いてと曰はず名號を除いてといひ、名號の二字を出したのは他力の稱名の意味である。又茲に四種とあるは五正行の中稱名を除いての四種の意であるが、高田本には五種とある。この時は助正兼行の稱名が自力の稱名であるから他力の稱名以外の五種の兼行といふ意味である)それで、茲では正助雜三行と云つても、善導大師の正雜二行の意味であるが、只善導大師の釋義と多少異點あるを示して、正雜二行と云はず、正助雜三行と宣ふたものである。五正行を合して、稱名を正定業とし、前三後一を助業とするは、流通の廢立より立て

たる合門であつて、この時は、弘願他力の行となるのである。

釋迦は要門ひらきつ、(序分の定善示 觀緣、散善顯行緣のこゝろ)

定散諸機をこしらへて (正宗分のこゝろ、要門の正雜二行)

正雜二行方便し

ひとへに専修をすゝめしむ (流通分のこゝろ、弘願の一向専修)

この一首の『和讃』に依つて、我が聖人の見給うた『觀經』の一部の大綱を知るべきである。

三。それで、この五正行の中の念佛の扱ひについて、善導法然兩祖と、我祖聖人と異なる點が出て來る。善導法然兩祖は、念佛に自力他力隱顯をわけ給はず、眞身觀の念佛も、下三品の念佛も皆、弘願の念佛となされてある。上二九五頁に引いた『漢語燈錄』三十三に『觀經』の念佛の文を拾ひ集め給うたのに依つても這般の消息は知れるのである。兩祖からすると、要門は定散二善、弘願は念佛と定められたのである。處か、我祖はこの大判門から更に細判して、經に隱顯を立て、念佛に自力他力をわから、『觀經』所説の念佛は、顯説からすれば、自力要門の念佛、諸行の中に攝まる萬行隨一の念佛、隱彰の實義からすれば

弘願他力の念佛となされるのである。このことについては上二七六頁以下隠顯と廢立を説いた餘義を參照して貰ひたい。

第三科 眞實門

亦此經有眞實斯乃開金剛眞心欲顯攝取不捨然者濁世能化釋迦善逝宣說至心信樂之願心報土眞因信樂爲正故也是以大經言信樂如來誓願疑蓋無雜故言信也觀經說深心對諸機淺信故言深也小本言一心二行無雜故言一也復就一心有深有淺深者利他眞實之心是也淺者定散自利之心是也

【讀方】 またこの經に眞實あり。これすなはち金剛の眞心をひらきて、攝取不捨をあらはさんとす。しかれば濁世能化の釋迦善逝、至心信樂の願心を宣説したまふ。報土眞因は信樂を正とするが故なり。こゝを以て大經には信樂といへり。如來の誓願疑蓋まじはることなし。かるがゆへに信とのたまへるなり。觀經には深心とてけり。諸機の淺信に對せるがゆへに深といへるなり。小本には一心とのたまへり。二行雜はることなきがゆへに一と言へるなり。また一心について深あり淺あり。深といふは利他眞實の心これなり。淺といふは定散自利の心これなり。

【文科】『觀經』の眞實門を明し給ふ一段。

【講義】 亦此『觀經』は方便の定散二善ばかりを説かれたのではなくして、眞實の誓願が説かれてある。それは乃ち他力廻向の金剛の眞心の何たるかを開説して、如來の攝取不捨の理りを顯はさんが爲めである。されば五濁惡世に出現せられた教主釋迦牟尼善逝尊は『大經』第十八願たる至心信樂の願心を宣説き下されたのである。この如來の願心が凡夫に實現れた所が他力金剛の信心である。この如來廻向の信なればこそ、報土往生の眞因となる。即ち廻向の信樂が正しく報土の眞因なのである。夫故に『大經』に信樂を誓はれたので、如來の誓願を信じて疑ひの雜はることのないのを信といふのである。この計ひを離れて本願を信する心が、廻向の佛心の顯現したものである。是を『觀經』には深心と説いてある。如來の深遠なる御心といふことを表はしたので、機類の不同によりて眞實の異るといふ自力の淺薄なる信心に對して「深」と仰せられたものである。『阿彌陀經』には、是を一心と説かれた。弘願念佛の一行を專修する外に餘行の雜はることがないからである。故に一と仰せられた。復この一心に就いて深淺の相違がある。深とは、凡夫自力の淺薄な一心ではなく、如來他力の眞實心をいひ、淺とは、定善散善を修する自力心を指すのである。

第三項 機相廣述

第一科 引文

依<sub>レ</sub>宗師意云<sub>レ</sub>依<sub>レ</sub>心起<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>勝行門餘<sub>レ</sub>八萬四千漸頓則各稱<sub>レ</sub>所宜<sub>レ</sub>隨<sub>レ</sub>緣者則皆蒙<sub>レ</sub>解脫<sub>上</sub>

【讀方】宗師のこゝろによるに、心によりて勝行をおこせり。門八萬四千にあまれり。漸頓すなはちおのゝ所宜にかなうて、縁に隨ふもの則みな解脫をかうふるといへり。

【文科】機相を述ぶる中、初めに總説。

【講義】上述の如く、『本經』に於いては眞實方便の様々の教説があるが、此點に關する善導大師の見解を窺ふに、如來は廣く衆生の根機を知めて様々の勝れた修行の様式を御説き下された。それであるから教の門戸が八萬四千といふ多きに達したのである。歷劫迂廻と長い修道を経て證りを開く漸教、又は一念の立に頓悟する頓教、何れにしても、各の根機に相應する所を選び、其良縁に隨うて實修するならば、皆生死を解脱して證りに至ることが出来る」と仰せられてある。

第二科 正明

然常沒凡愚定心難<sub>レ</sub>息慮凝心故散心難<sub>レ</sub>行廢惡修善故是以立相住心尙難<sub>レ</sub>成故言<sub>レ</sub>縱<sub>レ</sub>盡<sub>レ</sub>三千年壽<sub>レ</sub>法眼未曾<sub>レ</sub>開<sub>上</sub>何況無相離念誠難<sub>レ</sub>獲故言<sub>レ</sub>如來懸知<sub>レ</sub>末代罪濁凡夫立<sub>レ</sub>相住<sub>レ</sub>心尙不能<sub>レ</sub>得<sub>上</sub>何況離<sub>レ</sub>相而求<sub>レ</sub>事者如<sub>レ</sub>似無<sub>レ</sub>術通<sub>レ</sub>人居<sub>レ</sub>空立<sub>レ</sub>舍也

【讀方】ししかるに常没の凡愚、定心修しがたし、息慮凝心のゆへに、散心行じがたし、廢惡修善のゆへに、こゝをもて立相住心なを成じがたし。かるがゆへに縱<sub>レ</sub>三千年の壽をつくすとも法眼いまだ曾ひらけじといへり。何いはんや無相離念まことに獲がたし。かるがゆへに如來、懸に末代罪濁の凡夫を知しめして、立相住心なほ得ることあたはじ、何にいはんや相を離れてしかも事なもとめんば、術通なき人の空に居して舍をたてんがごとしといへり。

【字解】一。立相住心 「觀經」に説く所の觀法をいふ。即ち事觀にして、立相は指方立相にて、四方に方處を定め、佛の相好を觀じて、心を一處に止むる觀法のこと。

二。無相離念 上の事觀に對す。理觀のこと。相好光明等の事を觀せず、疎雜の念慮を離れて、實相無相の眞如實相を觀すること。

【文科】正しく末代凡夫の機相を述べ給ふ。

【講義】然るに過去遠々の昔から、常に生死海に浮沈して出離の便もない愚な凡夫は、中々もつて定善の心を修めることは出来ない。夫は散り亂れる心慮を息めて一境に心を専注するといふ至難なことに属するからである。又散善の心を實の如く行ずることも容易の業ではない。夫は悪に浸つてゐる心の悪を廢して善を修めるといふ困難をもつてゐるからである。是は吾等のやうな惡凡夫に取りては、ちやうど水に入つて濕ないことを求めるやうなものである、それであるから『觀經』に説かれてゐる所の淨土の相を立て、心を止住せしむる立相住心の觀法を修するといふことさへ仕遂げることは出来ない。即ち『定善義』にもあるやうに、「縦ひ千年の壽命があつても眞理を見るの智慧眼を開くといふことは未だ曾てないことである」と申されてゐる。かやうに有相の觀法さへ出来ないとするならば、況んや客觀的には相を離れ、主觀的には能觀の念を離れた空寂な智慧を獲るといふやうなことに就いては、どうして吾等凡夫の能くする所であらうか。

夫故に『定善義』には釋迦如來悉に末世の罪に穢れた吾等凡人の根機を知しめされて、方便の相を立て、心を一境に専注する觀法さへ出來難い、まして此相を離れて空寂の智慧を求むる無相離念の證を獲ることは、神通を有たない人が、空にをつて舍を建てやうとす

るやうなものであると、仰せられてゐる。

第三科 文釋

言三門餘者門者即八萬四千假門也餘者則本願一乘海也

【讀方】門餘といふは、門ばすなほち八萬四千の假門なり。餘ばすなほち本願一乘海なり。

【文科】第二科の説を證せんが爲めに、上に所引の『玄義分』の「門餘八萬四千」の文を解釋し給ふ。

【講義】上に擧げた、『玄義分』の文に「門餘」云々とあるが、其「門」といふのは釋迦如來御一代の間に説かれたる八萬四千の法門をいふ。是等の法門は云はゞ月を待つ間の手づさみといふ程のもので、眞の出世の本懷の教を説く迄の方便假門の教へである。如來は是等聖道八萬四千の方便教をもつて衆生の心田を耕し、そのよく純熟するをまつて眞實教を説かんとしたまふのである。

「餘」といふは、是等の聖道の諸法門以外といふ意味で、則ち他力眞實の本願、大乘無上の法門のことである。

第三節 私釋の二(聖淨對顯)

### 第一項 聖道門

凡就一代教於此界中入聖得果名聖道門云難行道就此門中有大小漸頓一乘二乘三乘權實顯密豎出豎超則是自力利他教化地方便權門之道路也

【讀方】おほよそ一代の教について、この界の中にして入聖得果するを聖道門となづく。難行道といへり。この門のなかについて大小、漸頓、(一)一乘、(二)二乘、(三)三乘、(四)權實、(五)顯密、(六)豎出、(七)豎超あり。すなはち、これ自力利他教化地方便權門の道路なり。

【字解】一。漸頓 漸教と頓教。漸教とは、文字言語によりて漸次に證果をうることを教へるもの、或は誘引的に小大乘の順序によりて教へるもの、又は修行階級を経て漸次に證果の益をうる教を指す。何れにしても漸次に證果を獲る教を指す。

頓教とは、文字言語を離れて直に絶對の眞如を説く教へ、又は小大乘の順序をとらず、初めより大乘一佛乘を説く教へ、又は修行の階級を経ずして直に證果をうる教法を指す。何れにしても頓極に證果を得ることを示す教法を總稱す。

二。一乘 一佛乘のこと。權大乘は、三乘(聲聞、緣覺、菩薩)各別の法を立てるが、一乘教は一切

衆生をして平等に悉く成佛せしむる法をたつ。ちやうど一の車をもつて萬人を乗載するやうなものである。故に一乘といふ。

三。二乘 聲聞乘と緣覺乘をいふ。又は聲聞乘と菩薩乘、或は大乗と小乘等の稱。一佛平等の教法ではなく、二乘差別の教法である。

四。三乘 聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘の稱、或は之を大乘(菩薩乘)、中乘(緣覺乘)、小乘(聲聞乘)ともいふ。かやうに各自が自己に適する教に連載せられて迷ひを出づる故に三乘教といふ。

五。權實 權は權教、即ち方便の教、實は實教、即ち眞實の教をいふ。

六。顯密 顯教と密教。顯教は衆生の機に應じて顯了に説かれたる教。密教家(眞言宗及び天台宗の一部)が自宗以外の教法を指していふのである。

七。豎出 眞宗の教判たる二雙四重判の一。豎は自力、出は漸證を彰はす。自力聖道門中の漸教をいふ。密教が自宗を識めていふ言である。

八。豎超 二雙四重判の一。豎は自力、超は頓證を彰はす。自力聖道門中の頓教。即身成佛の法を説く所の華嚴、天台、眞言、禪宗等の實大乘教をいふ。是等の教法は、自力にして而も頓悟の法であるから豎



超といふ。

【文科】 聖道門の意義を示し給ふ。

【講義】 凡て釋尊一代の教法に就いて、其證果を獲るといふ結果の方面から觀察するに、此娑婆世界に於いて聖果を獲るのを聖道門と名け、又是を修道の困難といふ點から難行道とも云はれてをる。この聖道門の中に、大乘あり小乘あり、漸教あり頓教あり、菩薩一乗の法門あり、聲聞緣覺二乗の法門あり、又、聲聞、緣覺、菩薩三乗の法門あり、又權教、實教、顯教、密教と分れ、又自力の漸教たる堅出の教、自力の頓教たる堅超の教がある。かやうに様々の教と分れてゐるけれども、深く是等諸教の歸一する意義を釋ぬるに、一括して自力教であるが、此自力の法門を衆生に勸め給ふは、還相廻向の菩薩である。此菩薩は衆生濟度の利他教化地の果より此世に出現はれて、是等自力の權假方便の教をもつて、衆生を誘引して、遂に眞實門に入らしめんとし給ふものである。即ち釋尊一代の教に、聖道淨土と對立する二つの法門のある筈はない。其所謂聖道門なるものは、淨土の還相の菩薩が衆生の機に應じて説き給ふ所の方便の門戸に過ぎないのである。この眞實の見解に立てば、恰も千里の雲霧れて、碧空に銀輪の影さはやかなる如く全法界を盡して他力眞實の一法が長へに、光りを放つてゐるのみである。

## 第二項 淨土門

### 第一科 釋名と總標

於ニ安養淨刹ニ入聖證果名ニ淨土門ニ云易行道就ニ此門中有横出横超假眞漸頓助正雜行雜修專修也

【讀方】 安養淨刹にして入聖證果するを淨土門となづく。易行道といへり。この門のなかに横出、横超、假眞、漸頓、助正、雜行、雜修、專修あるなり。

【字解】 一。横出 二雙四重判の一。横は他力、出は漸證を彰はす。定散の諸善を修めて彌陀の方便化土に往生することを説く「觀經」要門の教、並に自力念佛を修する「彌陀經」眞門の教をいふ。他力にして而も漸證の法であるから横出といふ。(第二卷三三八一頁參照)

二。横超 二雙四重判の一。他力淨土門中の頓教をいふ。獲信の一念に往生決定し、命終の時直に大涅槃を證する「大經」眞如門の教を指す。(同上)

【文科】 淨土門の中、初めに釋名總標を出し給ふ。

【講義】 聖道門の此土に證果を獲るに對して、安樂淨土に於いて聖果を得る教へを淨土

門と名けるのである。是を又實修上より聖道門の難行道に對して易行道といふ。因に易行といふことは、單に「行じ易い」といふ便宜的な功利的な意味を表はしてゐるのではなく、眞實の大道に入る時は、自と自然法爾の道理にて易行といふ結果をもち來すので、是は其儘教の眞實なることを反證してゐるのである。

此淨土門の中には、要門自力の教へたる横出、弘願他力の教へたる横超の二がある。前者は權假方便の教、後者は弘願眞實の教へである。そして要門は漸教、弘願は頓教、又是を助正、雜行、雜修、專修等に分たれてある。

第二科 所行體

正者五種、正行也。助者除名號、已外、四種是也。雜行者、除正助、已外、悉名雜行。此乃横出漸教、定散三福、三輩九品自力假門也。

【讀方】正といふは五種の正行なり。助といふは名號をのぞきて已外の四種これなり。雜行といふは正助をのぞきて已外をことごとく雜行となづく。これすなはち横出、漸教、定散、三福、三輩、九品、自力假門なり。

【文科】淨土門の修行の體として初めに横出の正、助、雜の三を擧げ給ふ。

【講義】此中正といふは淨土の五種正行を指す。助といふは五正行の中から第四の稱名を除いて餘の讀、觀、禮、讚の四正行をいふ。

雜行といふは、此淨土の正行助業を除いた餘の一切の修道を盡く雜行と名ける。是等は阿彌陀如來に對して疎遠なる行業にして、そして又六度萬行等の種々雜多なる行業であるから雜行と名けられるのである。

是等の正助、雜行は、『觀經』に説かれたる要門自力教の内容にして、即ち是を横出と名ける。又迂遠なる根機各別の果を得る教へであるから漸教と名ける。是れ即ち定善、散善の法門にして、散善を開けば、三輩九品の機類に分かれるが、畢竟するに自力の方便假門である。『觀經』一部に亘りて説かれたる顯説の法門は是より外はない。

横超者憶念本願、離自力之心、專修者唯稱念佛名、離自力之心、是名横超他力也。斯即專中之專、頓中之頓、眞中之眞、乘中之一乘、乃眞宗也。已顯眞實行之中、畢

【讀方】横超といふは本願を憶念して自力の心をばなる。專修といふはたゞ佛名を稱念して自力の心を

離る。これを横超他力となづくるなり。これすなはち専のなかの専、頓のなかの頓、眞のなかの眞、衆のなかの衆、一乘なり。すなはち眞宗なり。すでに眞實行の中にあはし舉ぐぬ。

【文科】淨土門の眞實の所行の體として横超他方の行を擧げ給ふ。

【講義】次に淨土門中の横超といふは、他力の本願を信じて自力の計心を離れるのである。この時如來の廣大なる功德智慧は、すべて吾等の功德智慧となりて、佛凡一體の妙趣を得るのである。

專修といふは、弘願他力の行を示す、上の「憶念本願」は他力の深信、この裏を返せば他力の大行たるこの專修である。即ち唯如來の名號を稱へて自力の計心を離れることである。是を横超他力と名ける。

斯れ即ち專修の中の眞實の專修である。あらゆる頓教中の唯一の頓教である。眞實の了義教中の尤も眞なる教へである、眞實の一乗教中の最も至極した一乗教である。是が乃ち眞宗の眞意義である。是は『行卷』の終りに諸善と念佛を比較べて四十八對の相對を明し委しく眞實行の何たるかを述べてある。

第三科 能行相

夫雜行雜修其言一而其意惟異於雜之言攝入萬行對五種正行有五種雜行雜言人天菩薩等解行雜故曰雜自本非往生因種廻心廻向之善故曰淨土之雜行也

【讀方】それ雜行雜修そのことば一にして其意これ異なり。雜の言において萬行を攝入す。五種の正行に對して五種の雜行あり。雜の言は人天菩薩等の解行雜せるがゆへに雜といふ。もとより往生の因種にあらず。廻心廻向の善なり。かるがゆへに淨土の雜行といふなり。

【文科】能行の相を明す中、第一に雜行と雜修の混同を簡び給ふ釋。

【講義】夫れ雜行雜修といふは、雜の字は同一であるが、其意味は稍相違してゐるのである。雜行の雜は一般に行そのものに關して名けたもので、よしや一行でも雜行といはれるので、即ち其行が淨土の行ともなり、又菩薩、人天の因行ともなる場合に雜行と名けられる。此意味に於いて五戒十善は各みな雜行である。

然るに雜修の雜は是と異り、専ら彌陀一佛に向ひ奉る上に於いて、其行業が幾個も間雜られることをいふ。即ち五正行に就いて云へば、第四の稱名と他の前三後一の四正行を兼行する如きは雜修と名けるのである。

雜行雜修の關係

【餘義】一、雜行雜修其の言一にして其意惟異なり、善導法然兩祖にあつては、正行即專修、雜行即雜修である。即ち雜行と雜修とは同體の異名である。正行雜行は行せられる行體に就いて名を立て、專修雜修は、行する機相について名を立てたものである。雜修といふは諸善萬行を修して淨土に廻向すること、專修といふは専ら正行を修することである。この時正行は五正行なれども、總即別名で、選擇本願の念佛のこと、なるのである。それ故に法然聖人の『選擇集』本十二には、「百即百生の專修正行を捨てて、堅く千中無一の雜修雜行を執する乎」といふ文がある。かの雜修十三失といふは、雜行を修するもの、十三個の失といふことである。

正行と雜行

處が我が聖人はいつも善導法然兩祖の微意を得て兩祖の大判の上に更に細判を施し給ふやうに、今も一步を進めて、正行と雜行を分ちたる上に、更にその正行について專修と雜修とをわから給ふのである。今便宜のために、正行雜行、專修雜修の名體を分別して見やう。

二、正行。正は純一無雜の義で、純粹なる極樂淨土の行といふことである。體はいふまでもなく、五正行である。

雜行。雜には疎雜の義（彌陀の淨土に疎遠なる行）雜通の義（人天三乘及び十方淨土に

專修と雜修

通ずる義。純粹なる極樂淨土の行に非ざる義）雜攝の義（諸善萬行を雜え攝める義）の三義あつて、三學六度四諦十二因縁の萬行を體とする。

專修。專は專一無雜の義で、餘行を雜へず、専ら一行を修すること。體を出せば、唯稱佛名と五專修である。

雜修。雜は兼雜の義で、五正行を兼ね雜え修することである。體を出せば助正兼行である。『和讚』、『持名鈔』に依れば、他の雜修もある。即ち一は部類の雜修とも稱すべきもので、『和讚』に「佛號むねと修すれども、現世をいのる行者をば、これも雜修と名けてぞ、千中無一とさらはる」とあり。往生極樂のために専ら稱名を稱へながら、現世祈禱の心の絶えないものをいふ。二に正行雜行兼行の雜修で、『持名鈔』本丁に出でゝゐる。故に雜修といふ中にも助正兼行の雜修、正雜兼行の雜修、部類の雜修の三種ある譯であるが、後二者は例外とも稱すべきもので、正統なる雜修は無論この下に明されたる助正兼行の雜修である。

かくの如く各々の名體を出せば、一目瞭然となるが、雜行雜修は語は似てゐるけれども、名體共に異なり。我が聖人は兩祖の微意を採つてかくの如く細判なされたものである。